

奈良県御所市

# 檜原遺跡 I

平成6年(1994年)3月

奈良女子大学蔵書



951002961000

210.2

95

御所市教育委員会

奈良県<sup>ごせし</sup>御所市

なら<sup>なら</sup> ばら<sup>ばら</sup> い<sup>い</sup> せき<sup>せき</sup> 遺跡 I

平成6年（1994年）3月

95100296

御所市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、奈良県御所市大字櫛原字荒毛438-2外15筆で実施した、櫛原(ならばら)遺跡第1次発掘調査の成果を報告するものである。なお、櫛原遺跡は奈良県遺跡地図では第三分冊の16-B-143に相当する。
2. 調査は幸町地区改良事業の一環としての改良道路の建設に伴うもので、昭和61年(1986年)11月28日に調査を開始、昭和62年(1987年)2月10日に現地における全ての作業を終了(実働52日間)した。その後、断続的に整理作業を実施し、調査後7年を経て、本書を刊行できるはこびとなったものである。
3. 現地調査は、御所市教育委員会 技術職員 藤田和尊が担当した。調査補助員として藤村藤子、尾上昌子、榎田いつえ、尼子奈美枝、田仲伸王、木許 守、辻合靖司、奥田国光、芳田純治、渡海 恒、横出昌之、植田隆司、西城壽郎の参加協力が、調査作業員として地元有志14名の参加があった。また、遺物整理・報告書作成には、藤村、尾上をはじめとする調査参加者全員のほか、木村美幸、高田加容子、平尾今日子、長越和世、榎原静代、藤井浩子、戸村和子、中久美子、城本宏代、川田修平、井戸川愛、岡本美保があたった。また、その後、御所市教育委員会技術職員となった木許、同調査員となった尼子の協力があつた。
4. 製図は、遺構を藤田が、遺物を藤村と高田が担当した。
5. 本書の執筆・編集・写真撮影は藤田が行った。なお、遺物観察表の調整の欄は木村が担当し、これを藤田が補正した。
6. 文献註・補註は、文末に一括した。
7. 出土遺物実測図、同図版写真の縮尺は原則として1/4に統一した。文中の遺物番号は、挿図・図版中の番号とも全て統一した。
8. 本書を作成するにあたりましては、寺沢 薫氏、森岡 秀人氏をはじめ、下記の方々から貴重なご教示を賜りました。記して深謝致します。

(順不同・敬称略)

網干善教・石野博信・泉森 皎・奥田 尚・亀田 博  
柳本照男・西川卓志・米田文孝・合田茂伸・青木勘時

# 本文目次

第1章 位置と環境	1
第2章 本書刊行に至る契機と経過	2
第1節 調査の契機と経過	2
第2節 本書刊行に至る経過	3
第3章 E地区の調査	4
第1節 トレンチの形状と層序	4
第2節 遺構	4
第3節 遺物	13
第4章 W地区の調査	19
第1節 トレンチの配置と層序	19
第2節 遺構	21
1. 溝1	21
2. 溝2	21
3. 溝3	21
4. 溝4	21
5. 土坑1	22
6. 土坑2	23
第3節 遺物	26
第4節 各遺構の所属時期と性格	26
1. 溝1	27
2. 溝2	27
3. 溝3	27
4. 溝4	28
5. 土坑1	28
6. 土坑2	28
7. 溝1覆土 W-1トレンチ⑦層	29
8. 包含層各層について	29
第5章 榑原遺跡W地区出土土器の占める位置	90
第1節 一括資料	90
第2節 榑原遺跡の在地の土師器の胎土	90
第3節 布留形甕の口縁形態	91
第4節 搬入土器	94
おわりに	97

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	1
第2図	トレンチ配置図	3
第3図	E地区土層断面図(その1)	4
第4図	E地区平面図および土層断面図(その2)	5
第5図	E地区平面図および土層断面図(その3)	6
第6図	E地区平面図および土層断面図(その4)	7
第7図	E地区平面図および土層断面図(その5)	9
第8図	E地区平面図および土層断面図(その6)	10
第9図	E地区平面図および土層断面図(その7)	11
第10図	包含層(29層)出土陶質土器(?)	13
第11図	E地区各遺構出土遺物	14
第12図	W地区遺構配置図	19
第13図	W地区層序柱状模式図	19
第14図	W地区 溝1断面および平面図	20
第15図	W地区 溝1出土石鏃	21
第16図	W地区 溝2および溝3 断面および平面図	22
第17図	W地区 溝4 断面および平面図	22
第18図	W地区 土坑1および土坑2 断面および平面図	23
第19図	W地区 土坑1遺物出土状態	24
第20図	W地区 土坑2遺物出土状態	25
第21図	W地区 溝1出土遺物(その1)	30
第22図	W地区 溝1出土遺物(その2)	31
第23図	W地区 溝1出土遺物(その3)	32
第24図	W地区 溝1出土遺物(その4)	33
第25図	W地区 溝2出土遺物	34
第26図	W地区 溝4出土遺物	34
第27図	W地区 土坑1出土遺物(その1)	35
第28図	W地区 土坑1出土遺物(その2)	36
第29図	W地区 土坑2出土遺物	36
第30図	W地区 溝1覆土 W-1トレンチ⑦層出土遺物(その1)	37
第31図	W地区 溝1覆土 W-1トレンチ⑦層出土遺物(その2)	38
第32図	W地区各包含層出土遺物	39
第33図	甕の口縁形態	92

## 表 目 次

第1表	ピット計測表	12
第2表	土坑計測表	13
第3表	溝計測表	13
第4表	E地区出土遺物観察表	15
第5表	W地区 溝1出土遺物観察表	40
第6表	W地区 溝2出土遺物観察表	60
第7表	W地区 溝4出土遺物観察表	63
第8表	W地区 土坑1出土遺物観察表	65
第9表	W地区 土坑2出土遺物観察表	71
第10表	W地区 溝1覆土 W-1トレンチ⑦層出土遺物観察表	75
第11表	W地区各包含層出土遺物観察表	83
第12表	布留形甕口縁形態の頻度によるセリエーション	92

## 図版目次

- 図版 1 E地区 全景（西から）  
図版 2 E地区 全景（東から）  
図版 3 E地区 小屋状遺構（P52～56, 北から）  
E地区 竪穴式住居（P60～64付近, 東から）  
図版 4 E地区 溝11 遺物出土状態（東から）  
E地区 土杭4 遺物出土状態（北から）  
図版 5 E地区 地山下の獣の足跡（西から）  
同 接写（中央部, 北から）  
図版 6 W地区 全景（東から）  
W地区 溝4（南から）  
図版 7 W地区 溝3（東から）  
図版 8 W地区 土坑1（手前が北）  
同 （南から）  
図版 9 W地区 土坑2（手前が北）  
同 （南から）  
図版10 10. 陶質土器？ E地区包含層（29層）出土  
E地区 各遺構出土遺物  
図版11 15. W地区 溝1出土 石鏃  
W地区 溝1出土遺物（その1）  
図版12 W地区 溝1出土遺物（その2）  
図版13 W地区 溝1出土遺物（その3）  
図版14 W地区 溝1出土遺物（その4）  
図版15 W地区 溝1出土遺物（その5）  
図版16 W地区 溝1出土遺物（その6）  
図版17 W地区 溝2出土遺物  
W地区 溝4出土遺物  
図版18 W地区 土坑1出土遺物（その1）  
図版19 W地区 土坑1出土遺物（その2）  
図版20 W地区 土坑2出土遺物  
図版21 W地区 溝1覆土 W-1トレンチ⑦層出土遺物（その1）  
図版22 W地区 溝1覆土 W-1トレンチ⑦層出土遺物（その2）  
図版23 W地区 包含層出土遺物（その1）  
図版24 W地区 包含層出土遺物（その2）

# 第1章 位置と環境

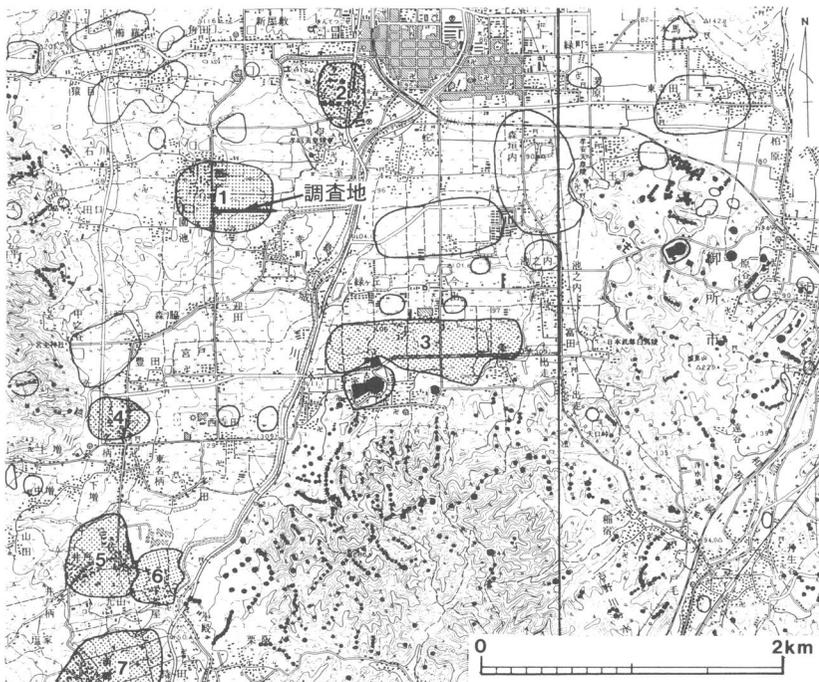
御所市は奈良盆地の東南部に位置する。西部には葛城山、金剛山などの峻峰が峙ち、南部には巨勢山丘陵などが、東部には国見山さらには高取山などがあり、市域の北側のみが盆地平野部(国中)<sup>くんなか</sup>の一画を占めている。

橿原遺跡は葛城山麓から東に延びる尾根が、盆地平野部と接して途切れかかる緩傾斜面上に占地し、南を鎌田川、北を大字石川付近に源をもつ小河川によって画された扇状地上に立地している。遺跡の規模は南北、東西共におよそ400m程度と推定され、古墳時代前期以降の集落跡として位置付けられる。

御所市内の古墳時代前期の遺構は、この橿原遺跡(1)のほか鴨都波遺跡<sup>(1)</sup>(2)でも検出されているが、近辺に前期古墳の存在は知られていない。やや範囲を広げて求めるならば、御所市内では大字原谷字ヲサカケ所在の車輪石や石製合子などを出土したと伝える古墳<sup>(2)</sup>、新庄町域では寺口和田1号墳<sup>(3)</sup>、高取町域ではタニグチ1号墳など小規模な前期古墳は知られるが、いずれにせよ橿原遺跡や鴨都波遺跡と直接的な関係を想定することは地形的に困難である。

中期前葉に至り、大字室に墳長238mの前方後円墳、宮山古墳<sup>(5)</sup>が築造され、その北側に隣接する中西遺跡<sup>(6)</sup>(3)は、宮山古墳にほぼ併行する時期の集落跡として注目される。

このほか、若干時期は下るが、佐田<sup>(7)</sup>・下茶屋<sup>(8)</sup>・南郷<sup>(9)</sup>の各遺跡では、近年の調査により、中期中葉以降の鉄器や碧玉製玉類の工房跡および集落跡が検出され、中期後葉の遺跡としては、濠に石垣を巡らせる方形単郭の豪族居館として注目された名柄遺跡<sup>(10)</sup>(4)がある。



第1図  
周辺遺跡分布図

1. 橿原遺跡
2. 鴨都波遺跡
3. 中西遺跡
4. 名柄遺跡
5. 佐田遺跡
6. 下茶屋遺跡
7. 南郷遺跡

## 第2章 本書刊行に至る契機と経過

### 第1節 調査の契機と経過

御所市では昭和61年（1986年）に至り、小集落地区改良事業の一環として幸町地区改良事業を実施することになった。奈良県条例に従い、大規模開発に伴う遺跡有無確認踏査を行ったところ、御所市大字檜原の付近を中心として広がる檜原遺跡（奈良県遺跡地図16-B-143）は当初考えられていたよりもさらに100mばかり東に広がることが明らかになった。

この地域に、東西方向の改良道路が建設されることになったので、文化財保護法第57条の3第1項の規定により、御所市長 芳本甚二氏から埋蔵文化財発掘届が提出された。これを受け、御所市教育委員会は文化財保護法第98条の2第1項の規定により埋蔵文化財発掘調査の通知を提出、事前の発掘調査を昭和61年（1986年）11月28日から実施することになった。現地調査の終了は昭和62年（1987年）2月10日、実働日数は52日間である。この間、洗浄など基礎的な整理作業も併せて行った。

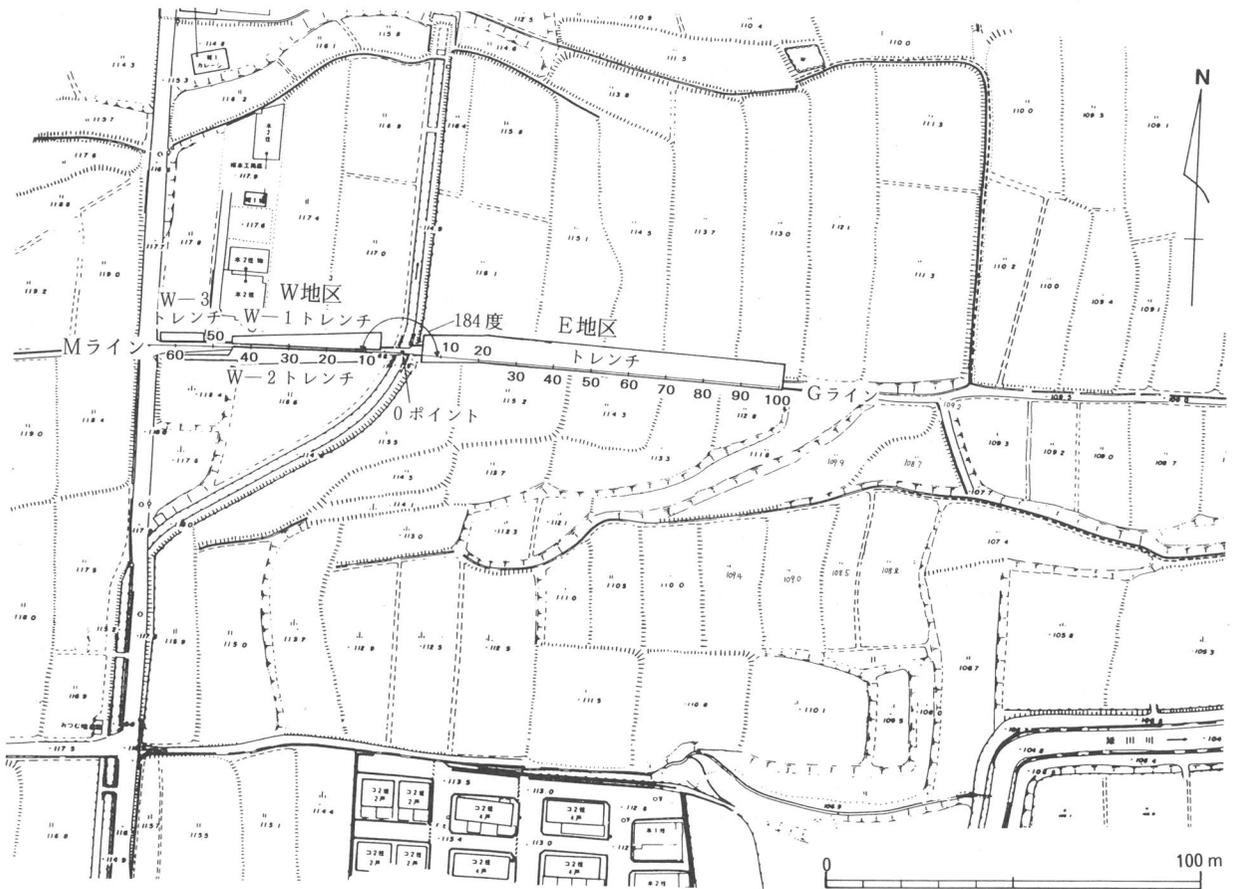
調査区は道路幅平均約7m、延長約160m、面積約1,120㎡にわたるが、一部生活道路や排水溝などは調査中にも利用されており、調査対象とはできなかったため、実際の調査面積は1,005㎡程度になっている。

調査区は、南から北に流れる用水（吉野川分水西部幹線）によって東西に分断されているため、用水から東をE地区とし、トレンチを設定、用水から西をW地区とし、W-1、W-2、W-3の3本のトレンチを設定した。

調査、実測にあたっての基準線は、本来一直線であるべきだが、調査区が全体に緩いカーブを描くものであるため、特に東西方向については全調査区にわたる一直線の基準線を設定することができなかった。このため、任意の0ポイントを用水に懸かる橋の上に設定、W地区の東西方向の基準線は、E地区の東西方向の基準線から4度南にずらせて設定することにより対処した。

E地区・W地区ともに0ポイントからの水平距離により、南北方向の区画をアルファベット、東西方向の区画を数字を用いて、1m四方の方眼を設定した。E地区の東西方向に走る基準線はGライン、W地区の東西方向に走る基準線はMラインとし、両者は0ポイントで接点を持つことになる。このことにより、E地区は南北方向を北からA～G、東西方向は0ポイントから東に離れるにしたがい1～100の1mごとの区画に分け、またW地区は南北方向を北からH～P、東西方向はE地区とは逆に、0ポイントから西に離れるにしたがい1～64の1mごとの区画に分けた。そして各区画では北西の接点をもってその区画を呼称することにし、以下、B8区などと表記する。

なお、E地区のGラインは、座標北に対して約93度東に偏し、W地区のMラインは同じく座標北に対して約91度西に偏している。



第2図 トレンチ配置図 (S. = 1/2000)

## 第2節 本書刊行に至る経過

現地調査の終了が昭和62年（1987年）2月10日と年度末であったことと、次年度から継続事業として、工業団地とゴルフ場造成に伴う巨勢山古墳群の大規模な発掘調査が予定されていたことの2つの理由をもって、早期の遺物整理・報告書の刊行は望めない事態となった。そしてこのことにより、整理・報告書刊行の費用は、自動的に御所市の単独費用負担となって、いつその仕事ができるようになるのか全く検討もつかないままで数年が経過、平成3年（1991年）を迎える。同年9月には、ゴルフ場開発に伴う巨勢山古墳群の調査もようやく終了するはびこったので、さきだって7月から2カ月間のみ、総額40万円余の予算で橿原遺跡出土遺物のネーミングや接合など基礎的な整理作業を行った。

その後、折をみて遺物の実測作業を行い、平成4年（1992年）度中には報告書を刊行できる目処が立ったので、印刷費が予算化されたが、年度当初には予定していなかった発掘調査計画が次から次へと持ち上がり、この年度内の刊行は困難となったので不執行とし、改めて平成5年（1993年）度に印刷費を予算化して、ようやく平成6年（1994年）3月31日付けで刊行できることとなった。

## 第3章 E地区の調査

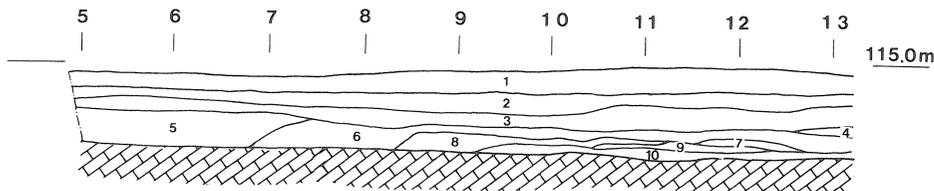
### 第1節 トレンチの形状と層序

先述のように、用水のため調査区が東西に分断されている関係上、以下、E地区では、0ポイントから東に向かって順次記述して行くことにする。したがって、区画の数値は、東に向かうにつれ、小から大へと移行することになる。トレンチは南北幅7m程度、東西長さ約100mに及ぶものであるが、遺構面は古墳時代前期から近世までを通じて1面のみである。5～23ライン付近までは、遺構面直上に古墳時代後期までに収まる包含層を1枚ないし2枚挟むが、それ以東は遺構面直上まで、近世以降の水田造営に伴う削平・攪乱を受けている。

### 第2節 遺構

E地区の遺構の所属する時期は、古墳時代前期～近世の長期に及ぶが、削平のためいずれも地山から掘り込まれており、全て同一の遺構面で検出した。遺構面直上の堆積土は、5ライン以降、23ラインを若干越える付近の北半では5～10層の古墳時代後期以前の遺物しか含まないものであったので、この範囲で検出した遺構はそれ以前の時期に限定できるが、それ以東の堆積土については遺構面直上まで近世の遺物を含んでおり、その遺構面は削平や攪乱の著しいものであった。このため、ピットの並びなどにより建物の配置などを検討する作業は、多くの場合、困難であった。また、各ピットの所属時期による埋土の差も一部を除き認知できるほどではなく、多くは暗または黒灰かかった褐黄色砂質土であった。なお、各遺構の長径・短径・深さ、出土遺物等のデータは第1～3表に一括して記述した。

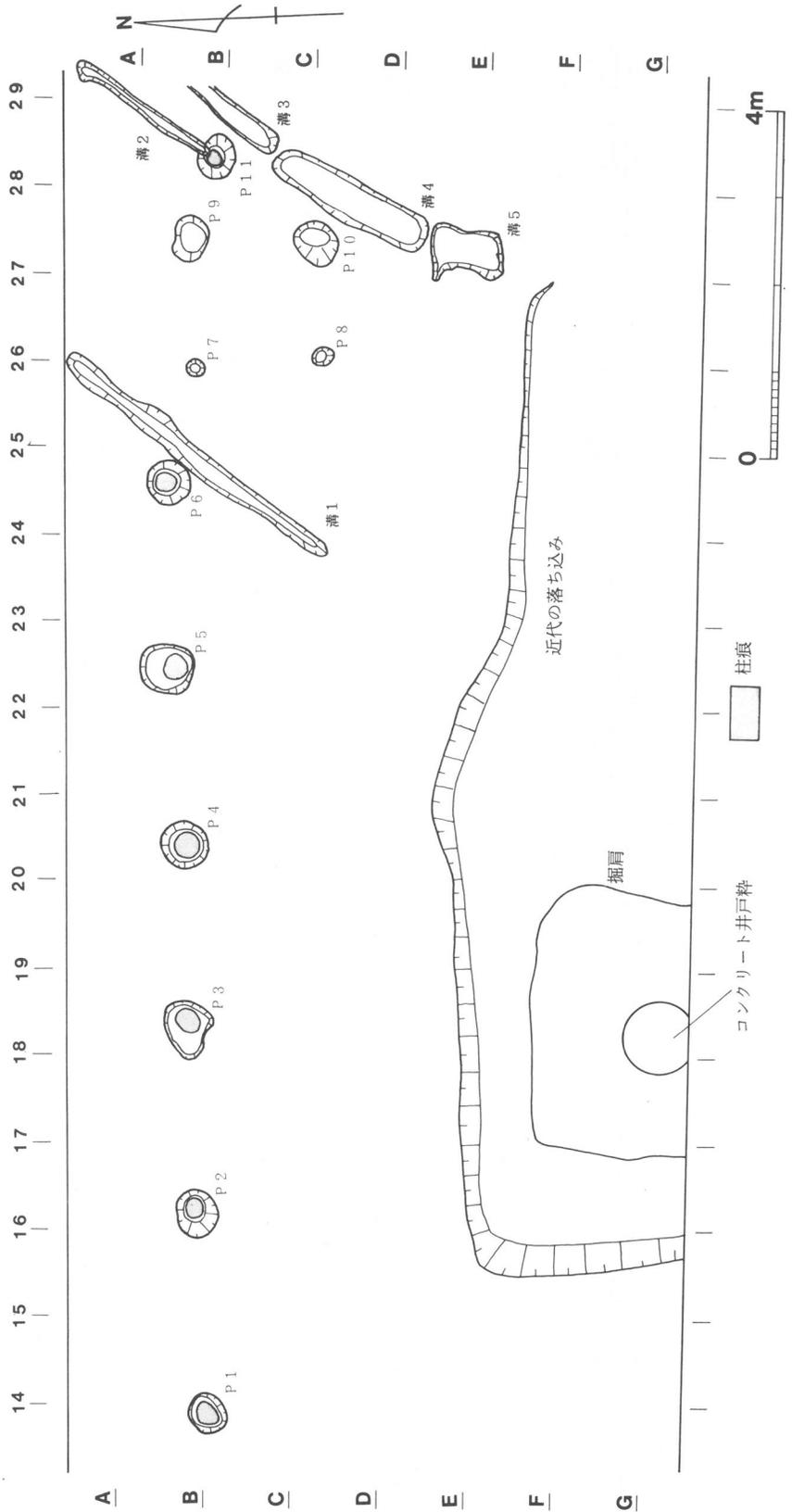
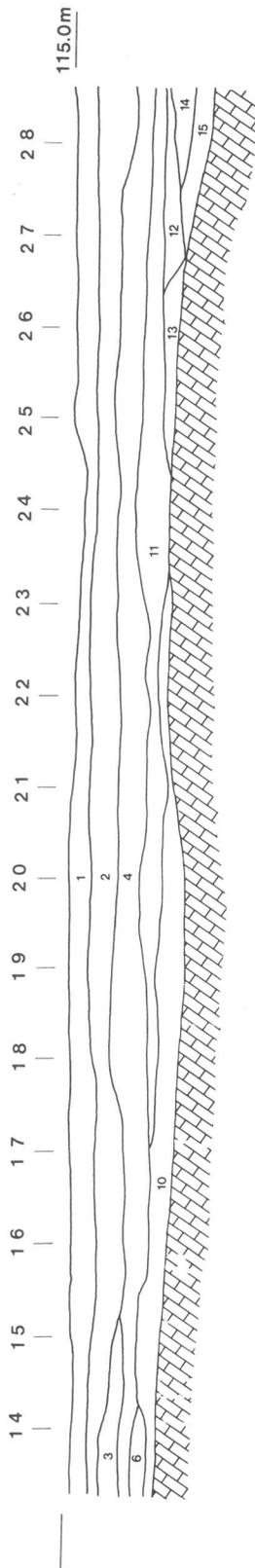
まず、13区～25区にかけては、ほぼ東西に並ぶP1～P6の6個のピットを検出した(第4図)。



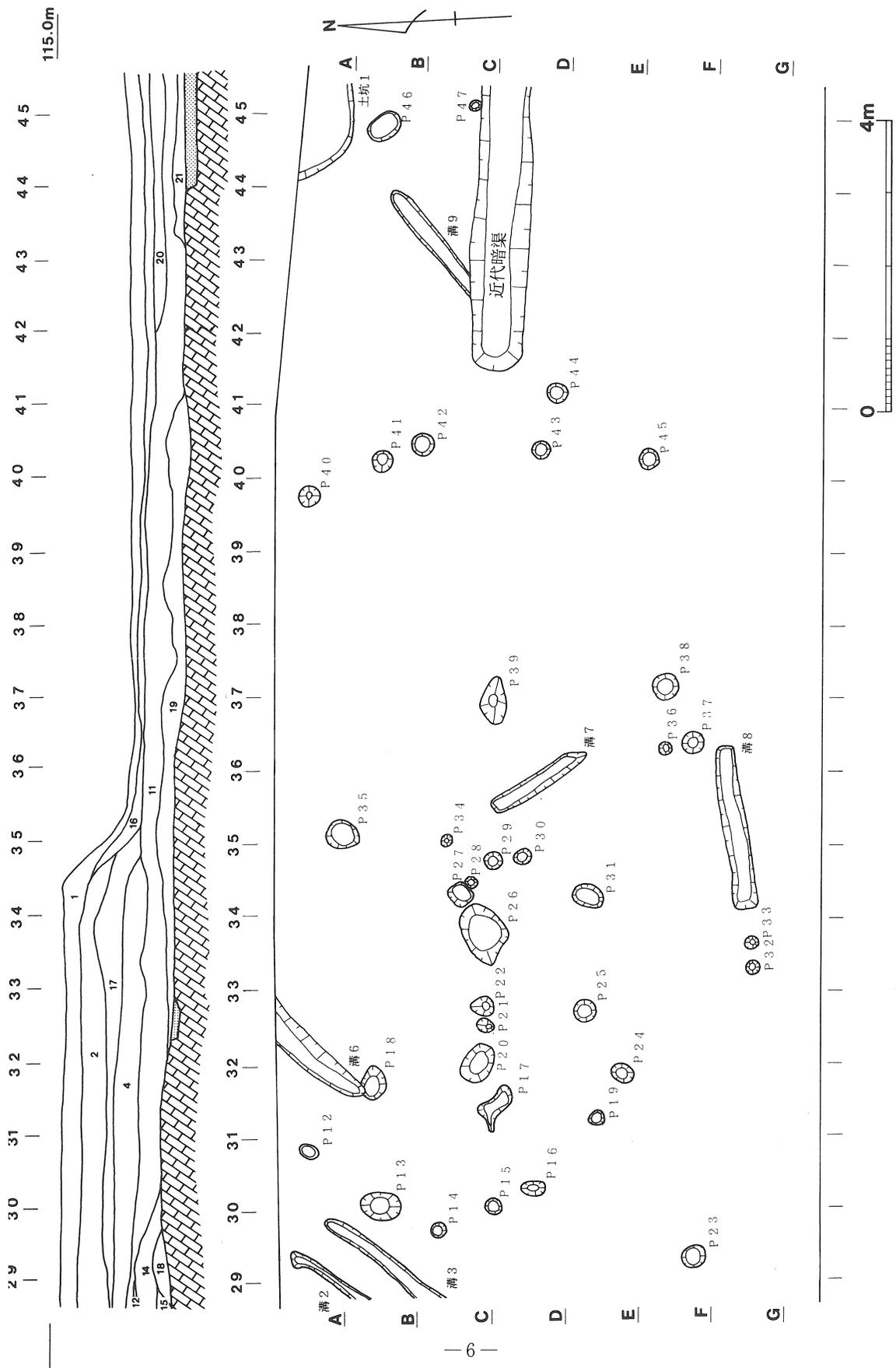
第3図 E地区土層断面図(その1)(S. = 1/80)

#### 土層註記

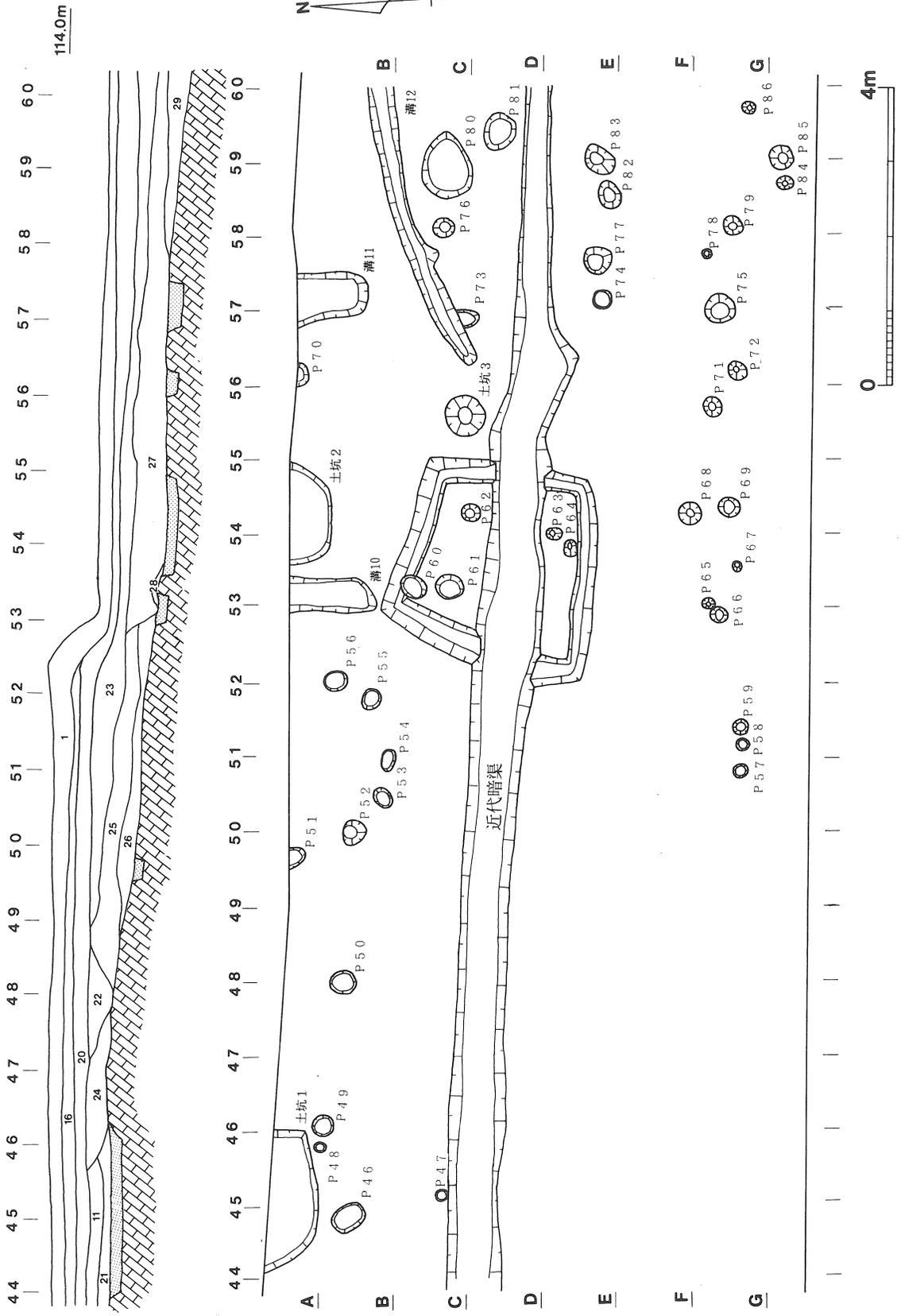
- |             |             |            |             |                    |
|-------------|-------------|------------|-------------|--------------------|
| 1. 耕土       | 2. 床土       | 3. 灰褐色砂質土  | 4. 黒褐色砂質土   | 5. 暗灰褐色砂質土         |
| 6. 暗褐色粘質土   | 7. 黄褐色細砂    | 8. 暗灰褐色砂質土 | 9. 黒色粘質土    | 10. 黄色細砂内黒褐色細砂縞状混入 |
| 11. 黒褐色砂質土  | 12. 黒褐色礫砂土  | 13. 黒褐色砂礫土 | 14. 黄褐色礫砂土  | 15. 黄灰褐色礫砂土        |
| 16. 灰褐色砂礫土  | 17. 暗灰褐色砂質土 | 18. 褐灰色礫砂土 | 19. 黄褐色砂礫土  | 20. 黒褐色礫砂土         |
| 21. 暗褐灰色礫砂土 | 22. 褐色礫砂土   | 23. 明褐色砂礫土 | 24. 黒褐色砂礫土  | 25. 黒褐色礫砂土         |
| 26. 暗灰褐色砂礫土 | 27. 黒褐色礫砂土  | 28. 黄褐色礫砂土 | 29. 暗黄灰色砂質土 | 30. 暗灰褐色砂質土        |
| 31. 灰褐色砂質土  | 32. 暗褐色砂質土  |            |             |                    |



第4図 E地区平面図および土層断面図(その2)(S.=1/80)



第5図 E地区平面図および土層断面図 (その3) (S. = 1/80)



第6図 E地区平面図および土層断面図(その4)(S.=1/80)

ピットの長径は47～64cm、短径は43～57cm、深さは19～28cmと若干の幅があるが、ピット底面の標高は113.55～113.60mとほぼ同じレベルにある。いずれも柱痕を検出でき、その直径は28～32cmとなっており、これはほぼ統一されている。柱間距離はP 1－P 2間240cm、P 2－P 3間210cm、P 3－P 4間203cm、P 4－P 5間204cm、P 5－P 6間217cmで、おおむね統一されている。これに連なるべきピットを南側では検出できなかったため、これより北に向けて、調査区外に中心部をもつ、一辺5間の掘立柱建物が存在しているものと考えられる。所属する時期については、先述した通り、23ライン以西の遺構面直上の包含層（1～10層）は古墳時代後期以前の遺物しか含まないこと、また、P 2埋土内出土遺物から、古墳時代後期後半（TK10型式期以降、TK209型式期以前）とみられる。

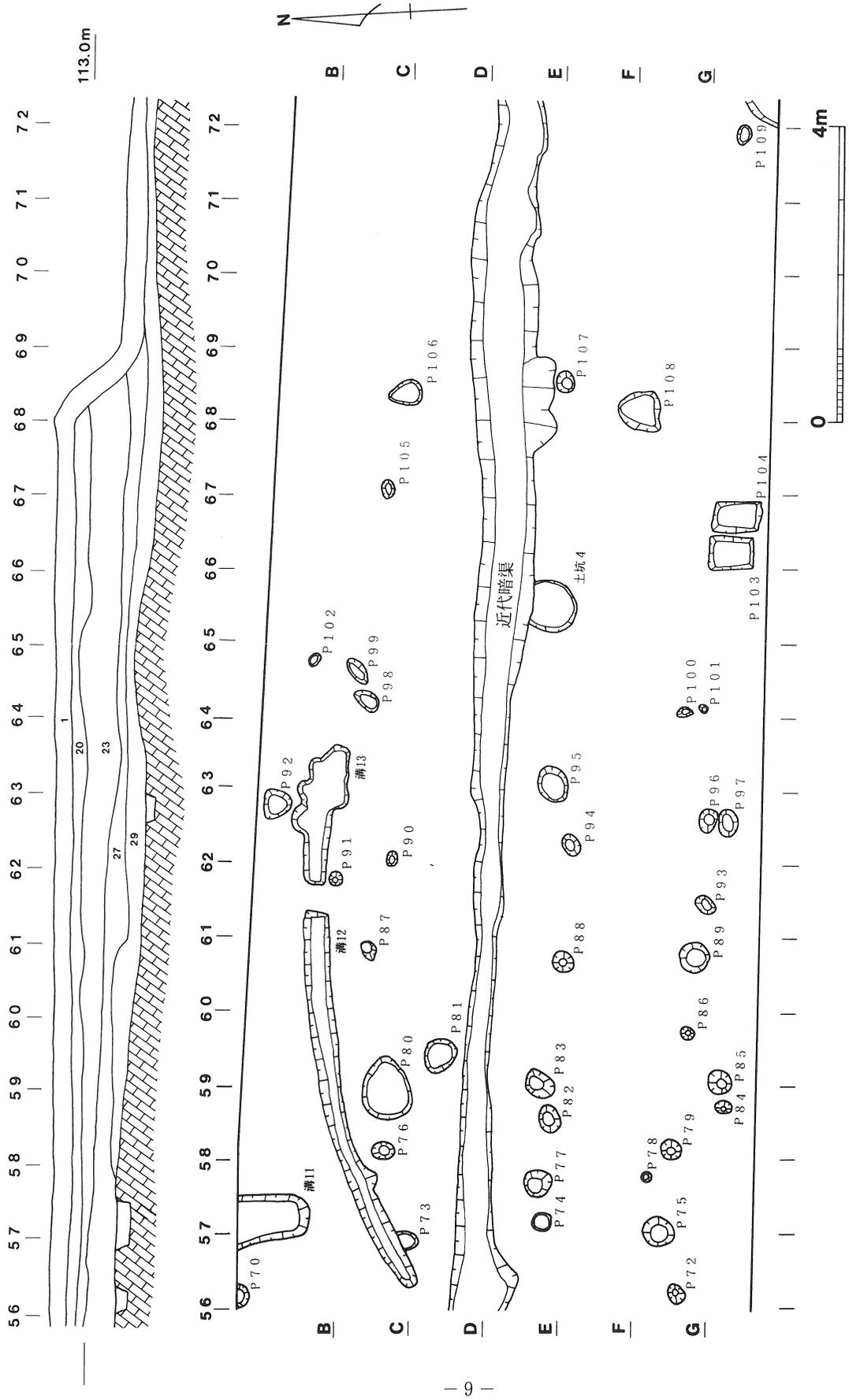
23ラインを東に越えた辺りから、先述のように遺構面直上の包含層は近世の遺物まで含むものとなるため、それ以西では、さきに記したP 6以外の遺構は多くの場合、所属する時期の認定が困難である。以下、そうした中で、各種状況からほぼ所属する時期を特定できるものを中心に記述する。遺構の所属時期は、近世・中世・古墳時代後期・古墳時代前期の4時期に大別できる。

まず、その埋土中に中世以降、近世までの遺物を含む遺構にP 19、20、21、22、24、26、33、42、52、95と土坑4がある。埋土はいずれも暗黄褐色礫砂土または黒褐色礫砂土と、礫を多く含む点特徴的で、同様の埋土の特徴を示す遺構には、遺物の出土をみなかったP 30、31、32、36、37、55と溝10・11を除く溝1～13の11本の溝があって、これらも中世以降にその所属時期が下るものとみられる。

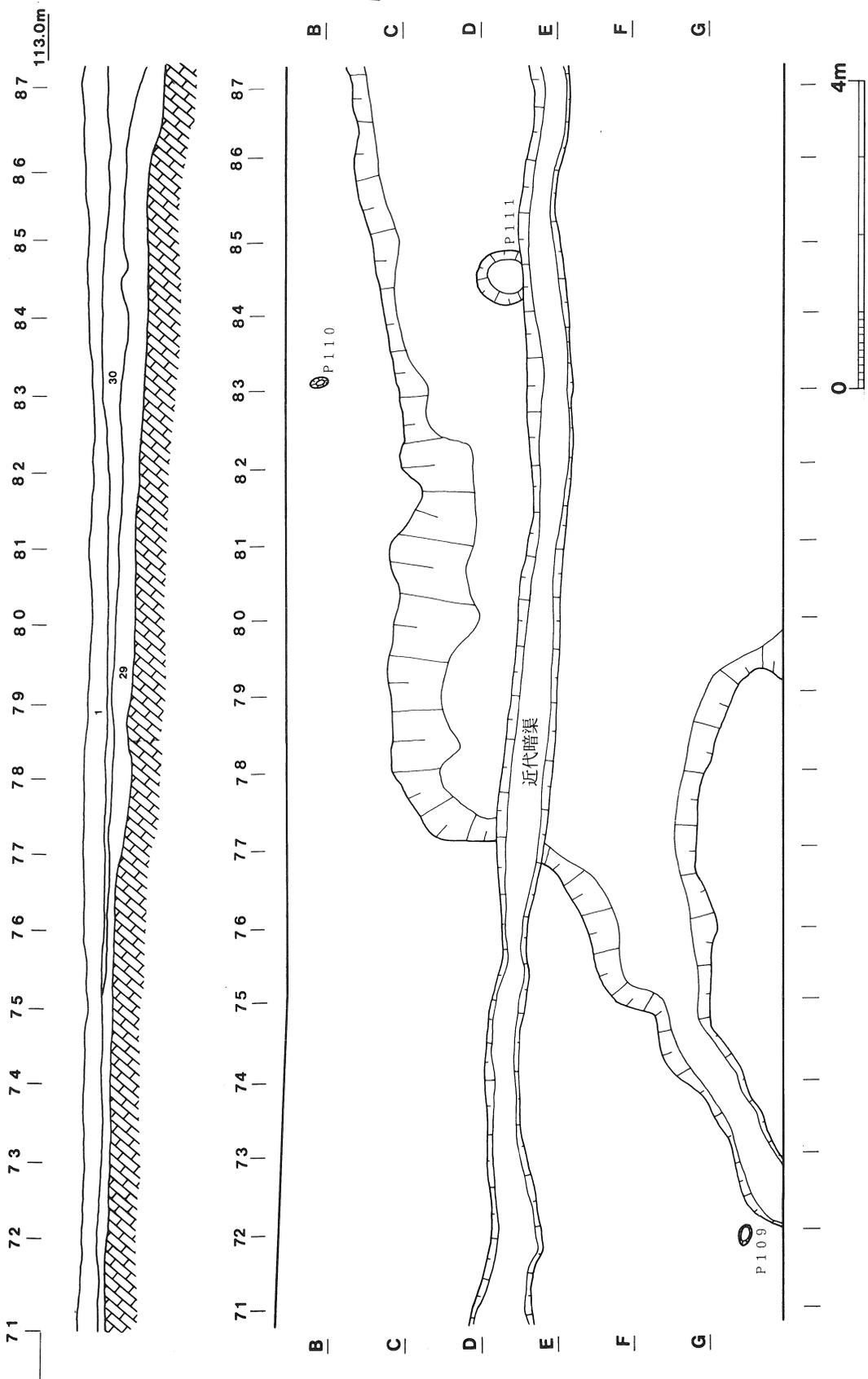
このうち埋土中の遺物の時期が中世のうちに収まる遺構にはP 20、21、22、26、42、52、95がある。特に、P 21、26、42、52、95は一定量の遺物を含みながら、いずれも中世以前の遺物に限定されることから、その時期の遺構である可能性が高い。一方、土坑4（図版4）はいわゆる瓦溜めで、近世のものである。

また、第6図中央北ではP 51～P 56で円弧を描くピットの並びがみられ、小屋状の遺構の存在を想定できるが、うちP 52からは施釉陶器や土師質小皿の出土が知られるので、この小屋状遺構については近世のものともみてよいだろう。なおこの場合においても、P 52と55を除いては、先述のように遺構埋土は暗褐黄色砂質土で、中近世以前のものともみられる他の遺構とこれらを、埋土の状態で区別することはできなかった。

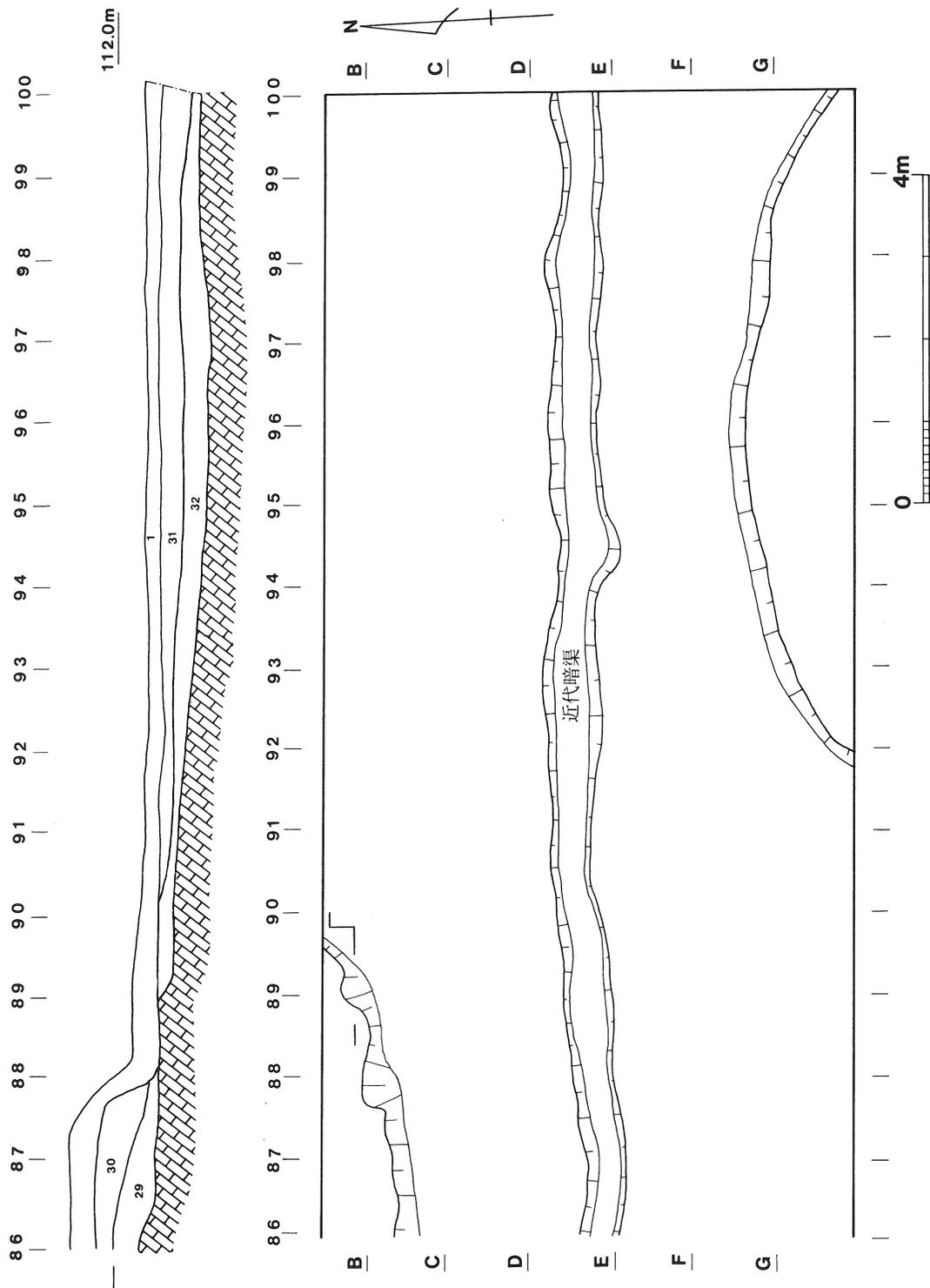
E地区においてはこのような理由から、中近世以前の遺構、とりわけ古墳時代の遺構を特定することは困難を伴うが、さきに中世の遺構を抽出する際に用いた方法、すなわち、一定量の遺物を埋土中に含みながら、ある時期以前の遺物に限定されるものをその時期の遺構と評価するという方法を採用するならば、土坑1・溝10・竪穴式住居は古墳時代後期に、土坑3・溝11は古墳時代前期に比定することが可能である。後述するようにW地区では古墳時代前期の遺構の存在を確実視できるので、ここでの土坑3や溝11を古墳時代前期の遺構のE地区への広がりとして評価することにさほど無理はないと思われるので、いまは以上のように考えておくことにする。



第7図 E地区平面図および土層断面図 (その5) (S. = 1/80)



第8図 E地区平面図および土層断面図 (その6) (S. = 1/80)



第9図 E地区平面図および土層断面図(その7) (S.=1/80)

なお第1表にもデータは掲げたが、竪穴式住居(第6図中央)はやや歪な方形プランを呈する、一辺2.8m程度の小形のもので、住居というよりは小屋に近いものと思われる。壁溝は外周から底まで30cm程度の段差をもち、壁溝の底から床面までの高さは6cm程度である。内部のピットはP61

～64の4個で、ピット底面の標高は112.4mではぼ揃う。ただし、南西隅には相当するピットを検出できなかった。

以上を時期毎にまとめておく。E地区においては、古墳時代前期・古墳時代後期・中世・近世の遺構、および、そのうちのいずれかの時期とは考えられるものの、所属時期を特定できない多くの遺構を検出した。

古墳時代前期とみられる遺構には55ライン付近の土坑3と57ライン付近の溝11がある。古墳時代後期の遺構であることを確実視できるものに14ライン付近から25ライン付近にかけて検出した一辺5間の掘立柱建物があり、その他古墳時代後期に属するとみられるものに44～46ライン付近の土坑1、53ライン付近の溝10、52～55ライン付近にかけて検出した竪穴式住居がある。中世の遺構とみられるものに7個以上のピットがあり、近世の遺構とみられるものには3個以上のピットと50～52ライン付近で検出した小屋状遺構および65ライン付近で検出した土坑4（瓦溜め）がある。

なお、随所で、さらに先行する遺構・遺物の有無を確認するために地山の深掘を行っているが、多くの箇所では地山の約30cmに安定した黒灰色粘土層がある。うち、45～63区にかけて、同層の上を、トレンチを横切るように南北に走るイノシシの親子のものとおぼしき足跡多数（図版5）を検出した。一部を石膏で型取りして取り上げたが、所属する時期は明らかにし難い。

E地区遺構計測表凡例（単位はcm、>はそれ以上、( )内は数量を示す。）					番号	長径	短径	深さ	柱痕	遺物	
番号	長径	短径	深さ	柱痕	遺物	P46	47	34	17		瓦片(4)、瓦器片(1)、土師器片(36)、須惠器片(14)
P1	47	43	21	26	土師器片(13)、須惠器片(1)	P47	16	15	7		
P2	54	45	27	20	土師器片(11)	P48	16	15	11		
P3	58	55	19	24	土師器片(1)	P49	29	29	11		
P4	56	55	28	30		P50	34	32	15		
P5	64	57	28	27	土師器片(1)	P51	>28	28	7		
P6	50	50	19	23	土師器片(1)	P52	35	30	20		施釉陶器片(1)、土師器片(16)、須惠器片(7)、石包丁片(1)
P7	22	20	13			P53	28	21	13		
P8	25	22	9			P54	29	18	9		
P9	54	35	7			P55	29	24	19		土師器片(3)
P10	53	50	22		瓦片(1)	P56	33	29	24		土師器片(17)
P11	51	42	24	19	土師器片(1)	P57	19	19	9		
P12	17	15	12			P58	17	17	12		
P13	52	39	24			P59	21	20	10		
P14	23	22	4			P60	37	28	11		
P15	24	22	6			P61	36	33	12		
P16	32	22	12		土師器片(1)	P62	24	24	13		
P17	66	23	13		土師器片(1)、須惠器片(1)、土師器片(1)	P63	20	16	12		
P18	48	37	13			P64	23	18	11		
P19	18	17	23			P65	19	16	11		
P20	57	39	19		染付片(1)、土師器片(1)	P66	23	22	12		
P21	24	18	14		土師器片(3)、中世須惠器片(1)	P67	15	8	6		
P22	30	27	15		白磁片(1)、サヌカイト剥片(1)、須惠器片(1)	P68	32	31	12		
P23	33	32	7			P69	29	27	13		土師器片(1)
P24	59	45	16		青磁片(1)、土師器片(3)、須惠器片(2)	P70	32	>15	14		
P25	30	28	15			P71	27	25	13		
P26	87	56	26		施釉陶器(1)、土師器(16)、弥生土器片(2)、サヌカイト剥片(1)、須惠器片(1)	P72	26	21	12		
P27	31	28	15			P73	>23	25	7		
P28	17	15	9			P74	26	25	11		
P29	24	24	10		染付碗片(1)、摺鉢片(2)	P75	41	39	11		
P30	23	21	9			P76	29	25	14		
P31	37	30	7			P77	38	36	11		土師器片(2)
P32	21	18	8			P78	13	12	10		
P33	19	18	11			P79	26	25	13		
P34	16	14	11		瓦片(9)、鉄釘片(1)、陶器(2)、土師器片(7)、須惠器片(7)	P80	79	67	12		
P35	46	39	12			P81	49	43	6		
P36	20	17	6		土師器片(1)	P82	39	29	11		土師器片(3)
P37	30	30	8			P83	44	32	25		土師器片(2)
P38	36	35	6			P84	22	17	8		土師器片(1)
P39	64	36	16			P85	33	31	15		
P40	28	26	12			P86	21	16	10		
P41	30	29	6		土師器片(2)	P87	27	17	9		
P42	32	29	6		円筒埴輪片(1)	P88	27	27	10		
P43	25	24	5			P89	43	40	14		土師器片(1)
P44	29	29	10			P90	20	15	9		
P45	29	26	8		陶器片(1)、須惠器片(1)、弥生土器片(1)	P91	19	19	10		
						P92	43	41	13		土師器片(1)

第1表の1 ピット計測表(1)

番号	長径	短径	深さ	柱痕	遺物	番号	長径	短径	深さ	柱痕	遺物
P 93	29	19	12		土師器片(3) 黒色土器片(1)、羽釜片(1)、須恵器片(1)、土師器片(8)  土師器片(2)	P 103	59	42	6		土師器片(8)、須恵器片(1) 土師器片(3) 土師器片(4)
P 94	29	25	13			P 104	61	43	7		
P 95	51	40	11			P 105	24	16	7		
P 96	33	24	21			P 106	45	36	6		
P 97	36	26	10			P 107	28	22	16		
P 98	37	22	11			P 108	55	53	10		
P 99	41	19	9			P 109	28	18	4		
P 100	22	14	4			P 110	22	19	6		
P 101	15	10	4			P 111	71	>58	19		
P 102	17	12	7								

第1表の2 ビット計測表(2)

番号	長径	短径	深さ	遺物
土坑1	>183	>71	12	須恵器片(2)、土師器片(23)、サヌカイト片(1)
土坑2	>135	>60	24	土師器片(8)、砥石(1) 瓦片(31)、染付(1)、土師器片(9)、須恵器片(3)
土坑3	55	52	16	
土坑4	69	>59	8	

第2表 土坑計測表

番号	長さ	幅(平均)	深さ(平均)	方向	比高差	遺物
溝1	374	28	9	SW→NE	9	須恵器片(2)、土師器片(57) 土師器片(11)
溝2	172	16	6	SW→NE	5	
溝3	227	20	5	SW→NE	5	
溝4	193	47	13	SW→NE	1	
溝5	80	43	9	-	-	
溝6	>160	38	7	SW→NE	7	
溝7	143	22	5	NW→SE	4	
溝8	225	31	5	-	-	
溝9	>173	25	8	SW→NE	7	
溝10	>118	45	9	N → S	5	
溝11	>96	67	21	S → N	1	
溝12	532	30	15	SW→E	5	
溝13	190	34	7	-	-	

第3表 溝計測表

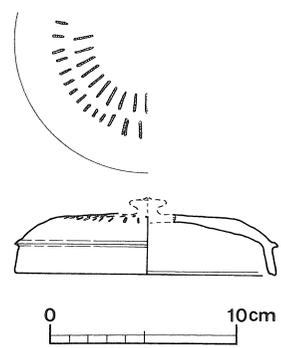
### 第3節 遺物(第11図)

土器の胎土観察については寺沢薫編『矢部遺跡<sup>(12)</sup>』によって提唱された方法を援用し、肉眼と倍率30倍の顕微鏡(ナショナルライトスコープFF-393)による観察を併用して行った(第5章参照)。搬入土器の認定は胎土観察の結果、在地の胎土中鉦物の在り方(第5章参照)とは明らかに異なるものについてそれと認めた。

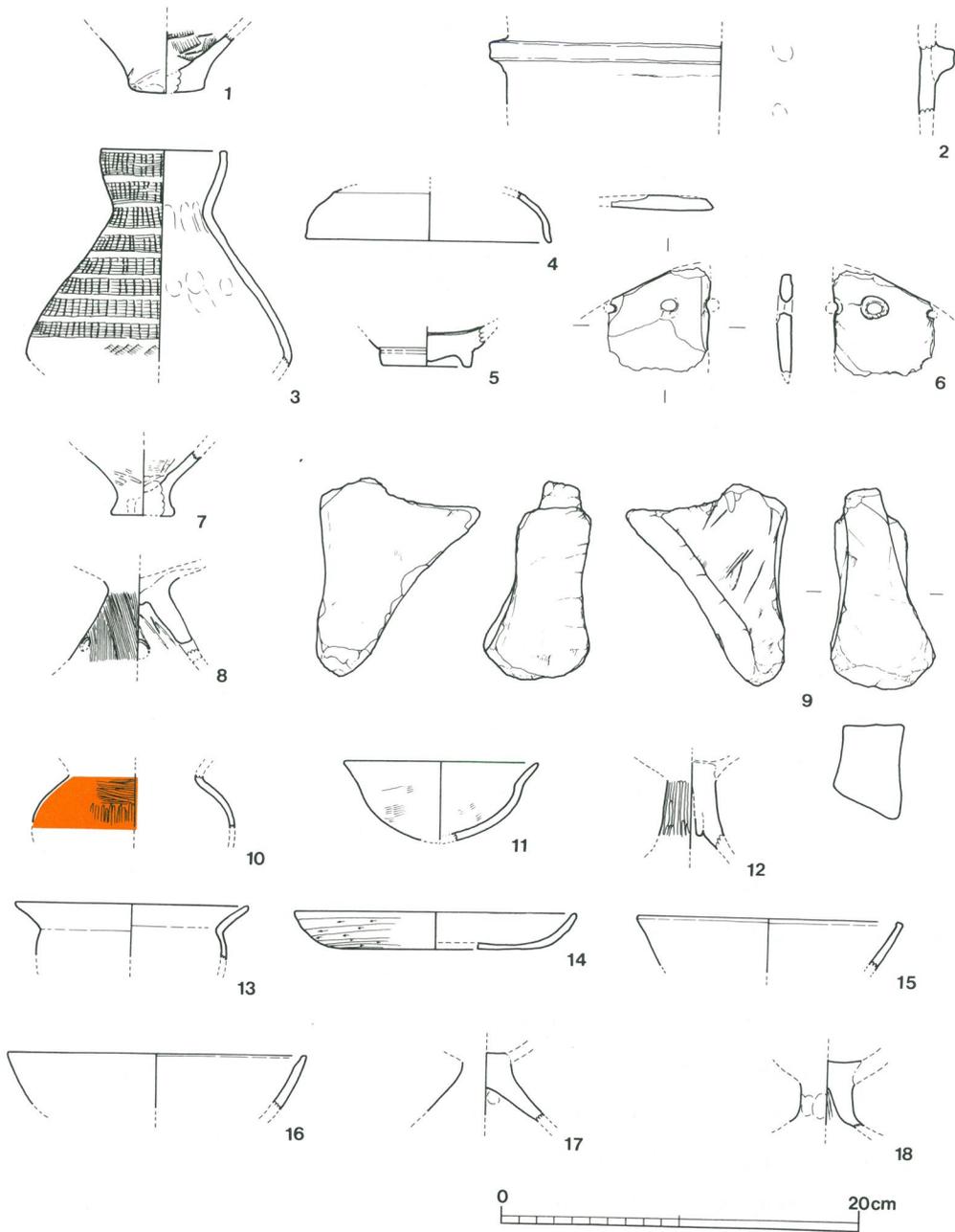
弥生土器(1・3・7)は佐原真『弥生式土器集成 本編2(畿内地方)<sup>(13)</sup>』の形・型式分類に準拠し、古式土師器(8~13・15~18)の形式分類は『矢部遺跡<sup>(14)</sup>』に準拠する。

円筒埴輪(2)は川西宏幸「円筒埴輪総論」、須恵器(4)は田辺昭三『陶邑古窯址群I<sup>(16)</sup>』、奈良時代以降の土師器(14)は小笠原好彦・西弘海「土器」の型式分類法をそれぞれ採用した。

石器では、6(P52出土)の石包丁、9(土坑3出土)の砥石やサヌカイトの剥片などがある。6は結晶片岩製で3穴を穿っている。再利用あり。9は流紋岩製で、図示した各4面を使用している。



第10図 包含層(29層)  
出土陶質土器(?) (S.=1/4)



第11图 E地区各遺構出土遺物 (S. = 1 / 4)

1 = P32、2 = P37、3 · 4 · 5 = P42、6 = P52

7 = P55、8 · 9 = 土坑3、10 · 11 · 12 = 溝11、

13 = P92、14 · 15 · 16 · 17 = P110、18 = 溝10

第4表 E地区出土遺物観察表

挿図番号 および 図版番号	遺層 構成	器種	形式 または 型式	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色調	胎土							備考		
						石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他			
10 (図版10)	包含層 (29層)	杯蓋		口径 13.6cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 回転ヘラケズリ(明瞭ではない)の ちヨコナデ。さらに櫛描列点文を2 段に施す。 内面 ヨコナデ。 ・	灰褐色	S 1	M 3	S 2	S 2	0	0	S 2	M 1	S 2	陶質土器(?) (通常この地域で見 られる須恵器に比し て、石英が非常に少 なく、チャート、角 閃石や多い。)
11-1	P32	壺 (底部)		底部径 4.2cm (残存1/2からの回転復元) ・ ・ ・外面 底部の不定方向のナデ、指頭による 押圧。体部に移行するに従い、タタ キの痕跡が残る。 内面 クモノス状ハケ(6条/cm)。黒斑。 ・	淡褐色	L 1	L 1	S 3	S 3	2	0	0			弥生土器?
11-2	P37	円筒埴輪	IV期	突帯径 26.1cm (残存1/12からの回転復元) ・ ・外面 器面摩滅のため、調整不明。突帯を はり付け後、ヨコナデ。 内面 ナデおよび指頭による押圧。 ・	乳褐色	S 2	M 1	S 3	S 2	2	3	0	M 1	S 2	搬入品 (石英・角閃石少な く、チャート多い。)
11-3	P42	細頸壺	第三様式	口径 11.9cm (残存1/5からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、櫛描籬状文(10条/cm)。 内面 ヨコナデ。頸部には指頭によるタテ 方向ナデによる成形痕跡残存。 ・外面 ヨコナデ後、櫛描籬状文(10条/cm) を施す。さらに下部には同一原体に よる櫛描列点文を施す。 内面 不定方向ナデ。指頭による押圧痕跡 存。 ・	淡褐色	M 1	M 1	S 3	S 3	2	0	0			弥生土器

挿 および 図 放 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式 また は 型	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色 調	胎 土					備 考		
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒 チ ャ ー ト		そ の 他	
11-4	P42	杯蓋	杯蓋	TK209	口径 13.6cm (残存1/9からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。	外面 青灰色 内面 灰色	S	M	S	S	0	0	須惠器 (在地の土師器と近 似した胎土。在地産 か。)	
11-5	P42	椀	(施釉土器)		底部径 4.8cm (残存1/4からの回転復元) ・ _____ ・ _____ ・ 外面 ヨコナデ。底部と体部の境界に擬凹 線を施す。 ・ 内面 ヨコナデ。	生地土 灰白色 外面釉 アズキ色 内面釉 黒色							精良な胎土	
11-7	P55	鉢 (底部)	皿様式?		底部径 3.4cm (残存1/2からの回転復元) ・ _____ ・ _____ ・ 外面 不定方向のナデ、指頭による押圧。 ・ 内面 クモノス状ハケ(10条/cm)。底は指 頭による押圧。	外面 淡赤褐色 内面 暗褐色	M	M	S	S	0	2	弥生土器	
11-8	土坑3	小形器台	C <sub>3</sub> or C <sub>4</sub>		(この部分ほぼ完形) ・ _____ ・ _____ ・ 外面 タテ方向のハケ(16条/cm)を左廻 りに施す。径1.2cmの円形スカシを 3方に配す。 ・ 内面 クモノス状ハケ(ヘラケズリ状)。	淡褐色	M	M	S	S	0	1	0	古式土師器
11-10	溝11	小形丸底 鉢	II-B <sub>1</sub> ?		(この部分残存1/3からの回転復元) ・ _____ ・ 外面 ヨコ方向およびタテ方向のヘラミガ キ(14条/cm)。 ・ 内面 不定方向のナデ。	淡褐色	M	M	S	S	0	2	古式土師器 外面に丹塗	

11-11	溝 11	小形丸底鉢	Ⅲ-A <sub>1</sub>	口径 10.8cm (残存1/2からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコ方向ハケ (10条/cm) 後、ヨコナデ。 内面 ヨコ方向ハケ (10条/cm) 後、ヨコナデ。	淡褐色	L-S 3 L-S 3 S 3 S 3 S 2 S 1 S 2			古式土師器
11-12	溝 11	高杯	挿入法(C)	(この部分残存1/2からの回転復元) ・ _____ ・ タテ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 内面 不定方向のナデ、心棒痕あり。	淡灰褐色	S-M 3 S 3 S 3 S 2 S 0 S 0			古式土師器
11-13	P92	甕 布留形	・ - ・ - 5 a	口径 13.0cm (残存1/8からの回転復元) 器面摩滅のため、調整不明。	赤褐色	M-S 3 M-S 3 S 2 S 2 S 1 S 0			古式土師器 輸入土器 (角閃石少ない。)
11-14	P110	皿	A-II	口径 15.8cm (残存1/10からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ 外面 右廻りのヘラケズリ (1単位0.6cm)。 内面 ヨコナデ。黒斑。	赤褐色	M-S 3 M-S 3 S 3 S 2 S 2 S 2			平城宮～10世紀
11-15	P110	甕 布留形	・ - ・ - ・ e <sub>1</sub>	口径 11.6cm (残存1/12からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ _____ ・ _____	淡赤褐色	S-M 2 S 3 S 2 S 2 S 2 S 2			古式土師器 輸入土器 (石英・角閃石少なく、チャートややめだつ。)
11-16	P110	小形器台	C <sub>3</sub> or C <sub>4</sub>	口径 16.6cm (残存1/16からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	淡赤褐色	S ①-S 3 S 2 S 2 S 2 S 2 S 2			古式土師器 輸入土器 (石英・角閃石少なく、チャートややめだつ。)

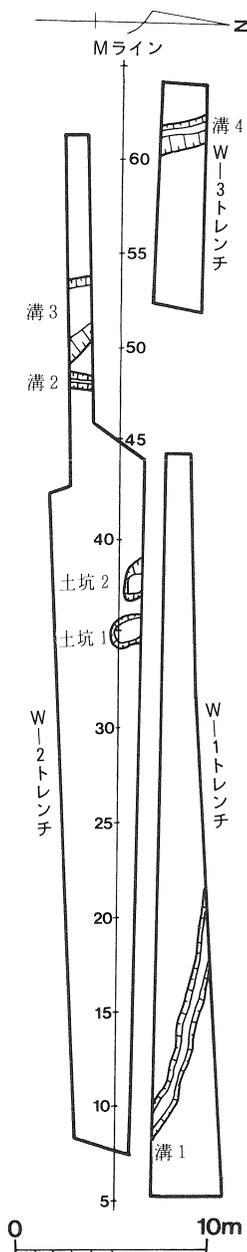
挿 お 図 番	遺 層	構 位	器 種	形 式 また は 型	法 量 と 調 整	色 調	胎						備 考	
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チ ャ ー ト	赤 色 斑 粒		そ の 他
11-17	P110	高 杯	高 杯	E <sub>4</sub> ?	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口頸部</li> <li>・体部</li> <li>・底部(脚台部)</li> </ul> (この部分残存1/2からの回転復元) <ul style="list-style-type: none"> <li>・外面 ヨコナデ。</li> <li>・内面 不定方向ナデおよび指頭による押圧。</li> </ul>	淡赤褐色	M	S	S	S	S	S		古式土師器 搬入土器 (石英・角閃石少な く、チャー ートややめ だつ。)
11-18	溝	10	高 杯	挿入法(c)	(この部分残存2/3からの回転復元) <ul style="list-style-type: none"> <li>・外面 ヨコナデ。一部指頭による押圧。</li> <li>・内面 不定方向のナデ。シボリメ残存。</li> </ul>	淡赤褐色	S	L	S	S	S	S	M	古式土師器

## 第4章 W地区の調査

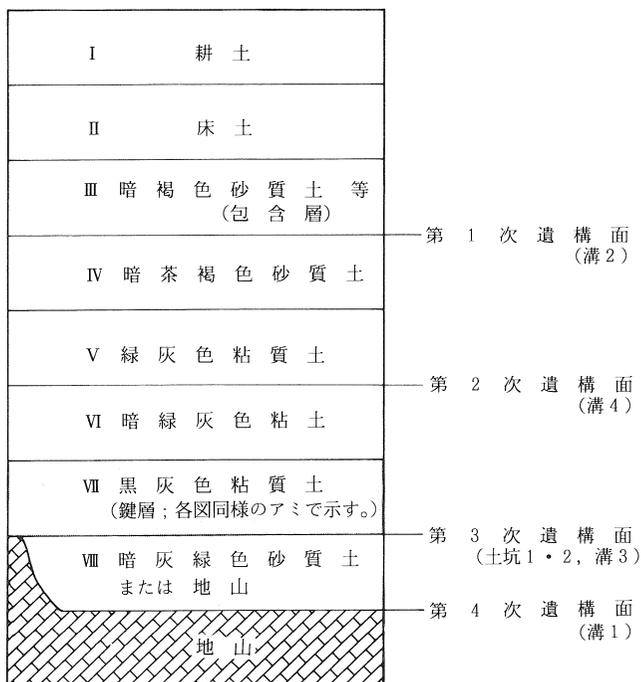
### 第1節 トレンチの配置と層序

先述のように、用水のため調査区が東西に分断されている関係上、以下、W地区では、E地区とは逆に、0ポイントから西に向かって順次記述して行くことにする。したがって、区画の数値は、西に向かうにつれ、小から大へと移行することになる。また、先述の通り、南北方向は北端をHライン、南端をPラインとし、これにより1m四方の方眼を区画した。Mラインは0ポイントでE地区のGラインと接点を持つ。

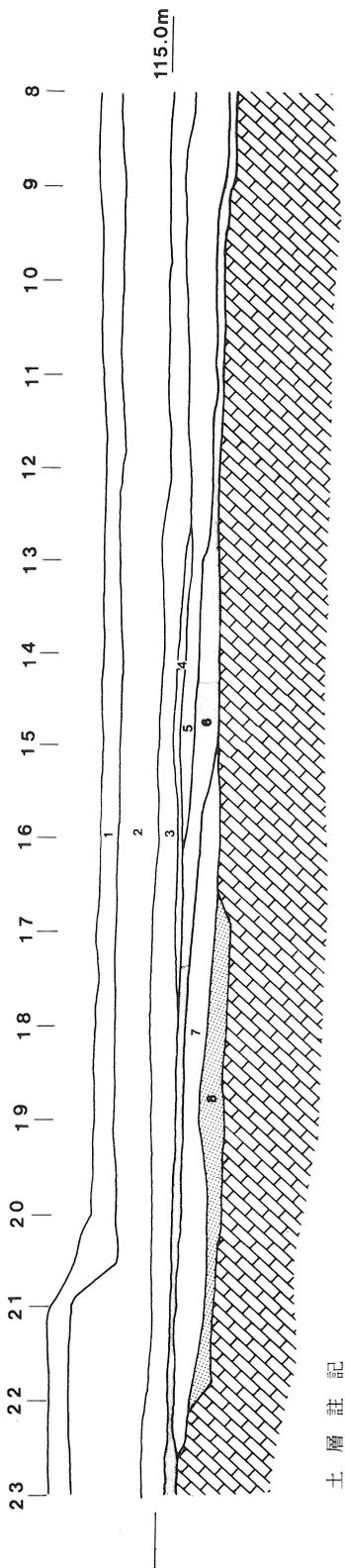
W地区のトレンチは、生活道路ならびに生活排水の溝のため、第12図のような配置と形状とならざるを得なかった。基本層序は、1層から3層まで各トレンチほぼ共通で、耕土・床土の下は暗褐色砂質土またはそれに近似した礫砂土で、同層以下、地山直上まで古墳時代前期の遺物しか含まない、プライマリーな包含層となっている。検出できた遺構は溝1～



第12図 W地区遺構配置図 (S. = 1 / 400)

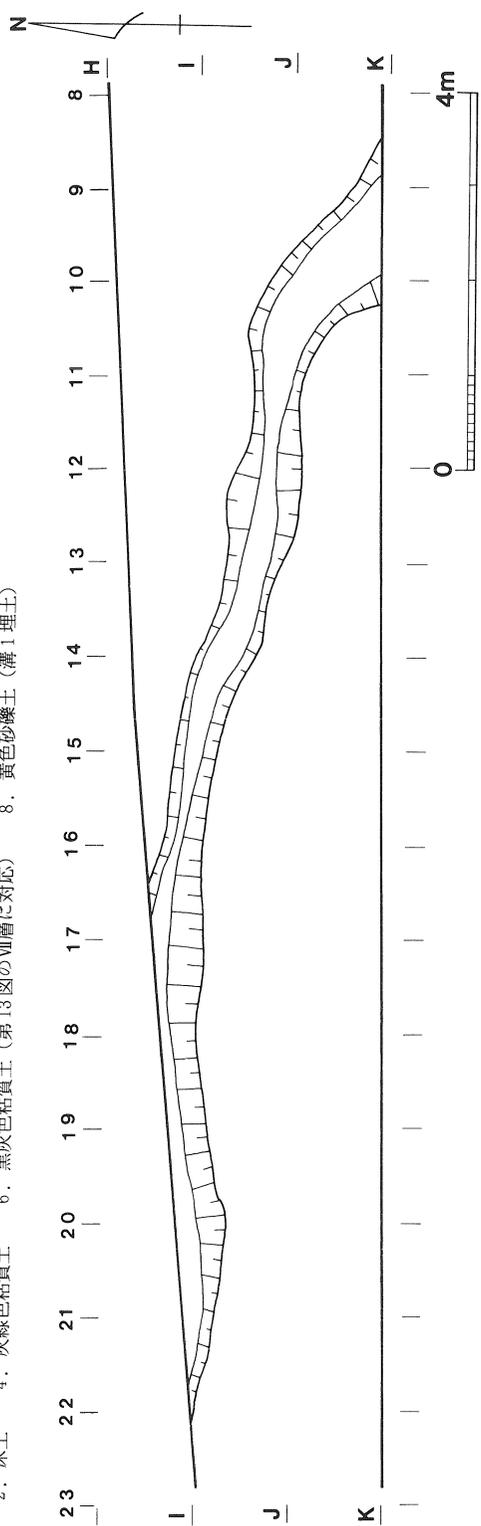


第13図 W地区層序柱状模式図



土層註記

- 1. 耕土
- 2. 床土
- 3. 茶褐色礫砂土
- 4. 灰緑色粘質土
- 5. 黄灰褐色砂質土
- 6. 黒灰色粘質土 (第13図のⅦ層に対応)
- 7. 暗灰緑色砂質土 (第13図のⅧ層に対応)
- 8. 黄色砂礫土 (溝1埋土)



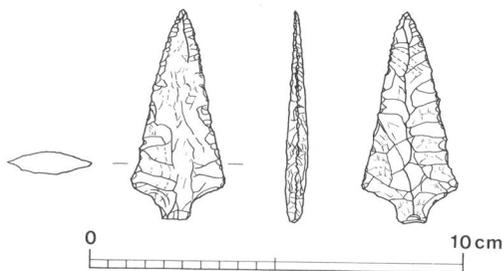
第14図 溝1断面および平面図 (S.=1/80)

4と土坑1・2で、いずれも古墳時代前期に属するものであるが、W地区では鍵層となる黒灰色粘質土（第13図のⅦ層）がほぼ全面に分布していることもあって、4面の遺構面に区分することができた。その関係を間層等を省いて模式図的に示したのが第13図の土層柱状図で、溝2は第1次遺構面、溝4は第2次遺構面、土坑1・2と溝3は第3次遺構面、溝1は第4次遺構面にそれぞれ属することになる。

## 第2節 遺構

### 1. 溝1（第14図）

W-1トレンチ東半部、K8区からI22区にかけて検出した、第4次遺構面に属する溝で、断面は逆台形を呈する。西北西から南東にむかって下降する。検出できた長さは約6.6m、溝底の西端と東端の比高差は約39cmで比較的緩やかな傾斜を示す。幅は40～110cmで、南東に行くに従って幅を増す傾向にあり、これは西側部分の削平の結果ともみられるが、溝の深さは西端で約13cm、東端で約15cmとほぼ同じなので、おそらく平面形については、これがほぼ当初の姿とみなして良いであろう。埋土は⑧黄色砂礫土で、その状況からは滞水状態にあったとは考え難く、むしろ、土石流などにより一気に埋まったものとみられる。土師器など遺物の密度は、小片ながら極めて高い。



第15図 溝1出土石鎌（S. = 1/2）

### 2. 溝2（第16図）

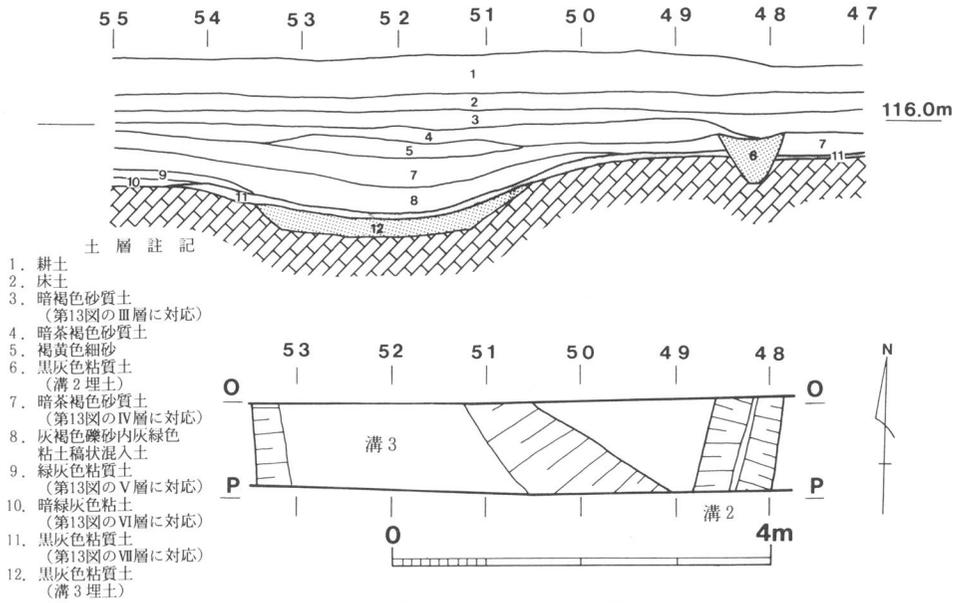
W-2トレンチ西寄り、OおよびP48区から49区にかけて検出した、第1次遺構面に属する溝で、ほぼ南北方向に掘削されている。長さ1m程度しか検出できなかったため、溝の流れの方向を知ることが困難であるが、溝底部の高さで言えば、北側が約2cm高い。溝の断面は、底部にわずかの平坦面をもつ角度の緩い逆V字形を呈し、深さは約45cmである。埋土は⑥黒灰色粘質土で、滞水状態であったことを推定できる。遺物は小片が多く、完形品はない。

### 3. 溝3（第16図）

W-2トレンチ西寄り、OおよびP49区から54区付近にかけて検出した、不定型の溝状遺構で、断面は幅広の逆台形を呈する。後述の土坑1・2と共に、第3次遺構面に属している。溝3の深さは約36cmで、底は北側が南側よりも約8cm高い。埋土は⑫黒灰色粘質土で滞水状態を示しているが、遺物は、ローリングの著しいわずかの土師器細片以外は出土しなかった。

### 4. 溝4（第17図）

W-3トレンチの西端近く、I・J・K60区から62区付近にかけて検出した、第2次遺構面に属する溝で、断面は逆台形を呈する。検出できた長さは約2mに過ぎないので断定はできないが、溝



第16図 溝2および溝3 断面および平面図 (S. = 1/80)

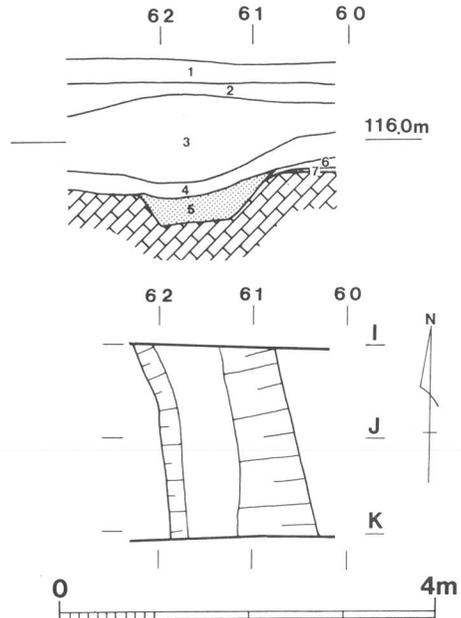
の底は北側のほうが南側よりも約6cm高く、埋土は⑤暗灰緑色砂質土で、北から南に向かってわずかな水流があったものと思われる。溝の深さは東辺部分で約40cmである。遺物は小片が多い。

### 5. 土坑1 (第18・19図)

W-2 トレンチの中央東寄り、MおよびN34区から36区にかけて、後述の土坑2に接するようにして検出した土坑で、土坑1・2共に第3次遺構面に属する。埋土は暗灰褐色砂質土で、隅丸の方形プランを呈するものとみられる。東西方向の長径は170cmを測る。南北方向の径は、北側に生活排水溝があるために調査できなかつた部分があるので明確にできないが、北側に接するW-1 トレンチに対応する遺構の肩をみいだせないで、147cm以上で、250cmを越えるものではなかつたことはわかる。深さは最も深いところで39cmである。

出土遺物は土師器と炭化木で、土坑の中位から上方に集中し、下位からの遺物は少ない。土器はいずれも欠失部がみられるか破片である。なお、No.12の甕は胴部の大半を欠失しており、第19図の平面図の通り、拉げた状態で出土しているが、同図の立面図では復元完形として示している。

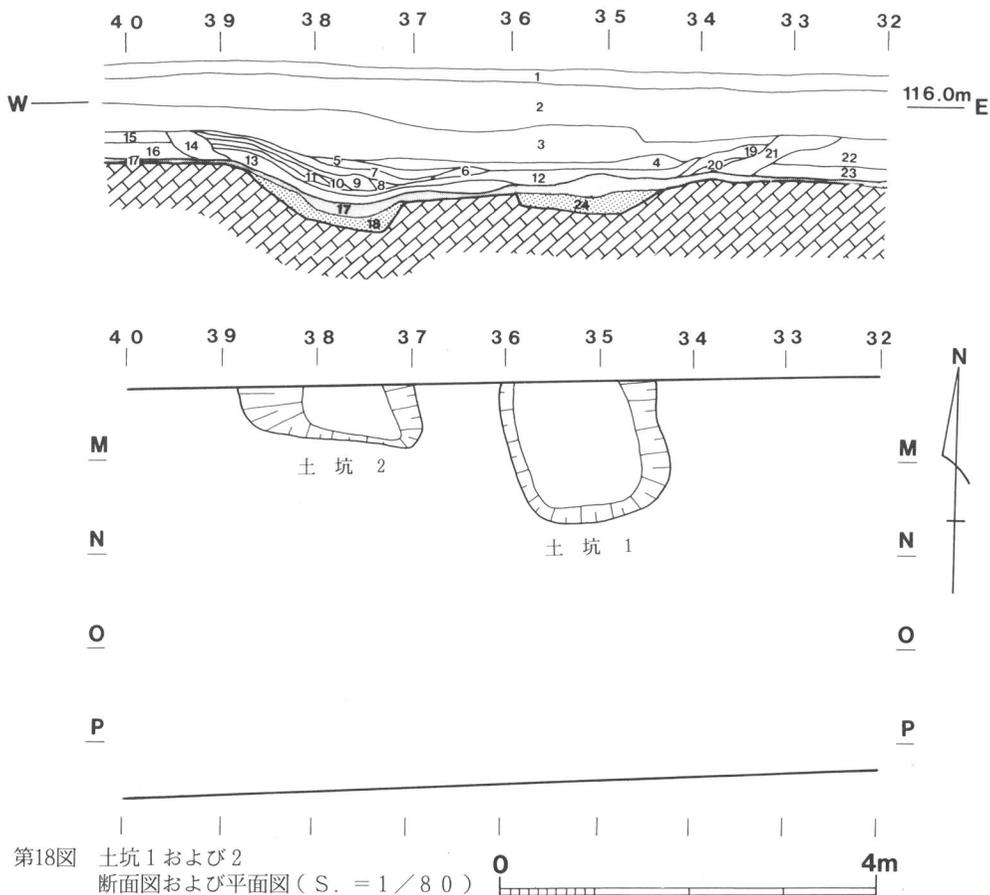
土坑1の性格としては、遺物は、復元完形であっても欠失部があるか破片で出土し、その破片も多くの個



第17図 溝4 断面および平面図 (S. = 1/80)

体数を含むものであるので、少なくとも祭祀土坑のように土器の埋納行為を伴うものではない。後述するように甕の比率の高さからしても、破損して不用となった土器などを廃棄するために設けられた土坑とみて良いだろう。

なお、この土坑では埋土のサンプルを採集しているが、時間的な制約のため分析を依頼することができなかった。機会を改めて報告したい。



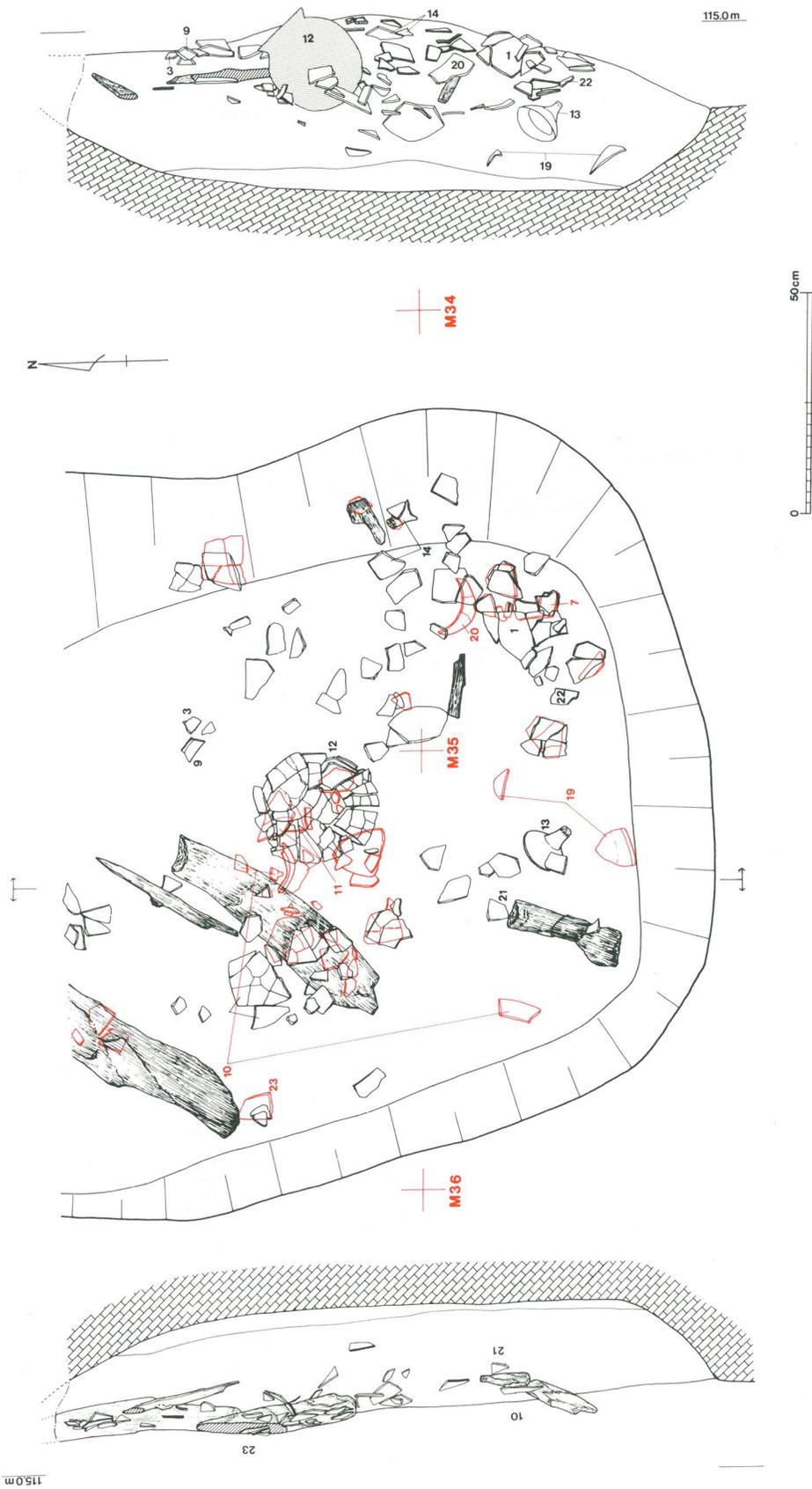
第18図 土坑1および2  
断面図および平面図 (S. = 1/80)

土層註記

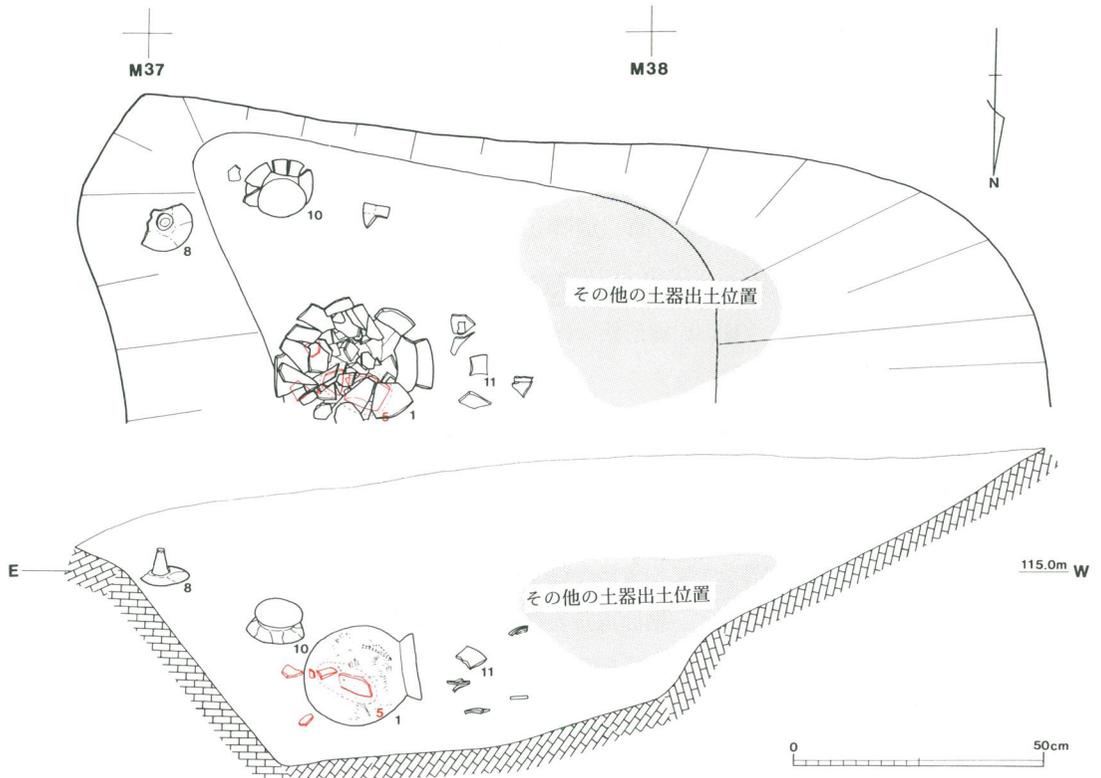
- |                       |             |                         |
|-----------------------|-------------|-------------------------|
| 1. 耕土                 | 9. 暗灰黄色砂質土  | 17. 黒灰色粘質土 (第13図のⅦ層に対応) |
| 2. 床土                 | 10. 暗灰黄色砂質土 | 18. 暗灰黄色砂質土 (土坑2埋土)     |
| 3. 暗褐色砂質土 (第13図Ⅲ層に対応) | 11. 灰黄色砂礫土  | 19. 暗灰色粘質土              |
| 4. 暗灰色礫砂土             | 12. 黒灰色粘質土  | 20. 暗灰色礫砂土              |
| 5. 暗灰黄色砂礫土            | 13. 暗黄褐色砂質土 | 21. 黒灰色礫砂土              |
| 6. 黒灰色粘質土             | 14. 暗灰褐色粘質土 | 22. 暗褐色砂質土              |
| 7. 暗灰黄色砂礫土            | 15. 暗灰色砂礫土  | 23. 褐黄色礫砂土              |
| 8. 灰黄色砂礫土             | 16. 暗灰色砂質土  | 24. 暗灰褐色砂質土 (土坑1埋土)     |

6. 土坑2 (第18・20図)

W-2 トレンチの中央西寄り、M37区から39区にかけて、先述の土坑1に接するようにして検出した土坑で、土坑1・2共に第3次遺構面に属する。埋土は暗灰黄色砂質土で、不整形な方形プランを呈するものとみられる。東西方向の長径は193cmを測る。南北方向の径は、北側に生活排水溝があるために調査できなかった部分があるので明確にできないが、北側に接するW-1 トレンチに



第19図 土坑1 遺物出土状態 (赤刷は下位の遺物) (S. = 1 / 1.5)



第20図 土坑2 遺物出土状態（赤刷は下位の土器）(S. = 1 / 15)

対応する遺構の肩をみだせないで、66cm以上で、200cmを越えるものではなかったことはわかる。深さは、最も深いところで52cmである。

出土遺物は土師器のみで、土坑の中位から下方に集中し、上位からの出土はない。完形で出土した遺物はNo.10の小形丸底鉢のみで、ほかはいずれも欠失部がみられるか破片である。なお、No.1の甕は胴部の1/3ほどを欠失しており、第20図の平面図の通り、拉げた状態で出土しているが、同図の立面図では復元完形として示している。したがって、実際にはNo.5の高杯杯部や周囲の赤刷の破片は、No.1の下位から出土している。

土坑2の性格としては、No.10の小形丸底鉢を除き、遺物は、復元完形であっても欠失部があるか破片で出土し、その破片も多くの個体数を含むものなので、土坑1と同様、廃棄用の土坑とみて良いだろう。その点、No.10の小形丸底鉢は、完形品で、かつ、赤色顔料の塗布も認められることは、他に比して特異である。また、出土位置も土坑の南東隅における、ほぼ底部に相当する位置なので、土坑掘削直後の祭祀など、特殊な用途を想定できるかもしれない。

さて、土坑1と土坑2は同一遺構面に接して存在し、その性格も、共に廃棄用とみられる、似通ったものであった。両者の違いは、土器が集中して出土するレベルにあり、土坑1の場合は中位から上位にかけて遺物が集中し、土坑2の場合は中位から下位にかけて土器の集中がみられた。両者共にその性格が、純粹の廃棄用の土坑とするならば、この遺物出土レベルの違いについては、まず土

坑1が掘削され、やや時間をおいてのち土器などが廃棄されて満杯状態になったので、続けて近接する位置に土坑2が掘削され、下位に廃棄された後、放置されたことにより生じたものとみることも可能である。

### 第3節 遺物（第21～32図）

古式土師器が大半を占める。その形式分類と所属する時期ならびに様式の認定は、寺沢薫編『矢部遺跡』<sup>(18)</sup>に準拠する。ただし、甕の口縁形態には『矢部遺跡』で設定された範疇に属さないものがあったので、第5章で榎原遺跡の頭文字をとって $nb_1 \cdot nb_2$ 手法として追加した。重複するので、ここでは説明を加えない。また、胎土観察についても『六条山遺跡』<sup>(19)</sup>で創設され『矢部遺跡』でさらなる発展を遂げた方法を援用することにし、使用した顕微鏡も同機種のナショナルライトスコープFF-393（×30）である。

ただし、胎土類型については、一定の研修を経て後でなければ『矢部遺跡』と同一の基準で認定することが困難であることに加えて、榎原遺跡の在地の土器の胎土（第5章参照）とみられるものは『矢部遺跡』で設定されたいずれの胎土類型にも属しないとみられることなどから記載を行わなかった。このようにして作成した観察表は40ページ以降に掲げた。

なお、搬入土器の認定は胎土観察の結果を重視し、在地の土器の胎土とは明らかに異なるものについてのみそれと認め、在地の土器と異なる状況を明記するように努めた。また、搬入土器については〇〇系との表現をする場合があるが、これは在地の土器とは胎土中に含まれる鉱物の大きさや量が明らかに異なり、搬入土器であることが確実視されるもので、なおかつ特徴的な手法や形態により、オリジナルの地域を認定できるものについて記した。したがって、搬入土器であることはほぼ確かであるが、その地域で製作されたものとの検証は、必ずしも経ていないことを付言しておく。

### 第4節 各遺構の所属時期と性格

W地区では、鍵層となる黒灰色粘質土（第13図Ⅶ層）がほぼ全面に分布していることもあって、4面の遺構面に区分することができた。溝2は最新の第1次遺構面、溝4は第2次遺構面、土坑1・2と溝3は第3次遺構面、溝1は最古の第4次遺構面にそれぞれ属する。以下、それぞれの遺構の時期と性格について、出土遺物と所属遺構面との両面から検討を加えよう。併せて、包含層についても記述を行っておくことにする。

なお、本節では遺構ごとの器種の比率を算出することも試みているが、状況によって、次の2種類の方法を使い分けることにする。①は全ての破片を対象にして算出する方法で、出土遺物の少ない遺構の場合、図示できるものは限られるから、欠落する器種を可能な限り少なくするために採用する。ただし、そこで壺としたもののうちには、壺以外の鉢・高杯などヘラミガキを多用する器種の破片も含む可能性があるという欠点がある。②はここで図示するものは実測可能なもののほぼ全

てであるから、そこに現れる比率の関係は大勢を代表し得るものとして算出する方法である。出土量の多い遺構の場合有効だが、元より少数の器種の場合、存在していても抽出できないという欠点がある。いずれも一長一短があるので適宜併用したり、②の方法を採る場合でも全破片の観察を行い、すこしでも実態に近づけるよう努力した。

### 1. 溝1 (第21～24図)

遺物はいずれも小片ながらコンテナ6杯に及ぶ。器種組成は②の方法によると、図示した全個体数90と破片中の器種の分かる個体14を加えた合計104個体のうち、壺26 (25%)、甕45 (43%)、鉢7 (7%)、高杯16 (15%)、器台1 (1%)、小形器台3 (3%)、小形丸底鉢4 (4%)、ミニチュア壺2 (2%)となっている。

凸帯を頸部にもつ二重口縁壺(11・12)は庄内式の古相のうちに消長するとされ、庄内河内形甕(35・63)、破片中の庄内大和形甕、高杯H(72)、鉢A<sub>2</sub>(71)、器台B<sub>3</sub>(86)、小形丸底鉢II A<sub>1</sub>(89)の存在や、高杯脚台部の接合がいずれも接合法(b手法)によることなどは、ほぼ庄内式ないし布留0式のうちにおさまる特徴とされる。一方で布留形甕(17～27・30・40)がみられることは、この遺構が確実に布留式期まで下ることを示しているが、出土の布留形甕の口縁形態について述べれば、布留形甕に特徴的なg手法がみられないことは、布留式のなかではより古い傾向を示すとみてよいだろう。なお、溝1出土の布留形甕の口縁形態については第5節で詳述する。

この遺構が溝であり、埋土の状況も一気に埋没したことを示していることを考慮に入れば、その出土遺物は布留0式を主体としつつ、庄内式以前の古い段階の混入品も認められるものと評価するのが妥当であろう。このほか、縄文時代のものとみられる凸基有茎式の石鏃(第15図)も出土した。器長55.7mm、器幅26.0mm、器厚は最大で6.0mmを測る。

### 2. 溝2 (第25図)

遺物は小片が多く完形品はない。器種組成を①の方法で算出すると破片数は94個で、壺片33 (35%)、ミニチュア壺片1、甕片56 (60%)、鉢片1、高杯片2 (2%)、脚台状土器片1となる。

加飾二重口縁壺(5)は庄内3式、小形丸底鉢IA(12)は概ね布留0式ないし1式を下限とするようであり、出土遺物のみからすればこの時期に置くのが妥当ともみられる。しかしながら、いずれも小片であり、破片中に弥生形甕が存在することに端的に示されるように、混入の有り得る溝資料であること、さらには第1次遺構面に属し、遺構の掘り込み面となった第16図7層の出土遺物は布留2式を下限とするとみられることから、遺構そのものは布留2式に属するものと考えたい。

### 3. 溝3

遺物は細片のみで器種の認定ができるものさえなかったので、遺物から時期を知ることはできないが、第3次遺構面に属することから布留2式の遺構とみられる。溝というより、不定形の落ち込みであった可能性が高い。

#### 4. 溝4 (第26図)

遺物は小片が多く完形品はない。器種組成を①の方法で算出すると、破片数は73個で、壺片24 (33%)、甕片34 (47%)、鉢片1、高杯片3 (4%)、小形丸底鉢片2 (3%)、不明9となる。

弥生形甕(3)の存在を重視すれば庄内式もしくはその直後までに、小形丸底鉢Ⅲ b<sub>2</sub>(5)からは布留1式に置かれるところである。しかしながら、第2次遺構面に属することから遺構の形成時期は布留2式以降とみておきたい。なお、破片中では布留形甕が大半を占め、庄内河内形甕も1片のみだが存在する。

#### 5. 土坑1 (第27・28図)

若干破片数の足りないものや1/2以上残存して復元完形にできるものも数点存在するが、大半は小片である。器種組成を①の方法で算出すると、1の短頸壺と11・12の甕を除いた場合の破片数は212で、その組成は壺片8 (4%)、甕片181以上 (85%)、高杯片8 (4%)、小形丸底鉢片8 (4%)、小形器台片7 (3%)で、先の溝資料の場合、壺は26~33%、甕は41~60%であったのに対し、ここでは甕片の比率が極めて高い。また、破片から個体数を認識できるものを抽出すると、40のうち壺5個体 (13%)、甕21個体 (53%)、高杯5個体 (13%)、小形丸底鉢6個体 (15%)、小形器台3個体 (8%)となっている。甕の比率の高さについては、廃棄用土坑という遺構の性格に起因するものと思われる。ちなみに、②の方法で器種組成を算出すると、全個体数24のうち壺1 (4%)、甕11 (46%)、高杯5 (21%)、小形丸底鉢4 (17%)、小形器台3 (13%)となり、やや実態とは掛け離れたものになるように思われる。

遺構は廃棄用とはいえ土坑であり、その一括性は高い。甕に布留式影響の弥生形甕や庄内河内形甕などは全くみられず全て布留形甕で、口縁形態はg<sub>2</sub>手法を主体としつつもe<sub>1</sub>手法などもみられることは布留1式の様相と考えられる。高杯は量的に少なくB<sub>4</sub>形式 (15)しか確認できないが、小形丸底鉢におけるⅢB<sub>3</sub>形式の卓越 (19・20)は注目され、布留2式に盛行するとされる小形丸底鉢ⅡBもしくはⅡC形式は存在するものの、組列の主体を占める形式ではない。以上からこの土坑1は、南葛城地域における布留1式の標識的な遺構として位置付けることができると考える。

#### 6. 土坑2 (第29図)

遺物は、完形品や1/2以上残存して復元完形にできるものも数点存在するが、大半は小片である。器種組成を①の方法で算出すると、10の完形の小形丸底鉢と1・2の復元完形の甕を除いた場合の破片数は35個で、組成は壺片12 (34%)、甕片17 (49%)、高杯片6 (17%)で、甕片の比率がやや高い。個体数では認識できるもの23以上のうち壺8個体 (35%)、甕8個体以上 (35%以上)、高杯6個体 (26%)、小形丸底鉢1個体 (4%)で、破片で比率を算出した結果よりもさらに壺と甕の個体数が拮抗するものとなっているが、壺には図示できるものはなく、いずれも小片であるので、このことを高く評価するべきではない。やはり甕の比率の高さに注目するべきであり、遺構の性格としては廃棄用土坑とみなすことが妥当であろう。

破片も含めて甕は布留形甕に統一されており、口縁形態も  $g_2 \cdot g_3$  手法など布留形甕に特有のものになっている。高杯は  $B_4$  (5) と  $B_6$  (6) の 2 者が存在し、小形丸底鉢は II  $C_2$  形式 (10・11) のみとみられることなどは、先述の土坑 1 とは明らかに異なった様相といえる。布留 2 式の標識的遺構とすることができるだろう。ちなみに、土坑 1 と土坑 2 は、先述の状況から連続して使用されたものと考えられるが、各形式の使用頻度の変化はそのようなわずかの期間においても起こり得るものなのだろう。

#### 7. 溝 1 覆土 W-1 トレンチ⑦層 (第30・31図)

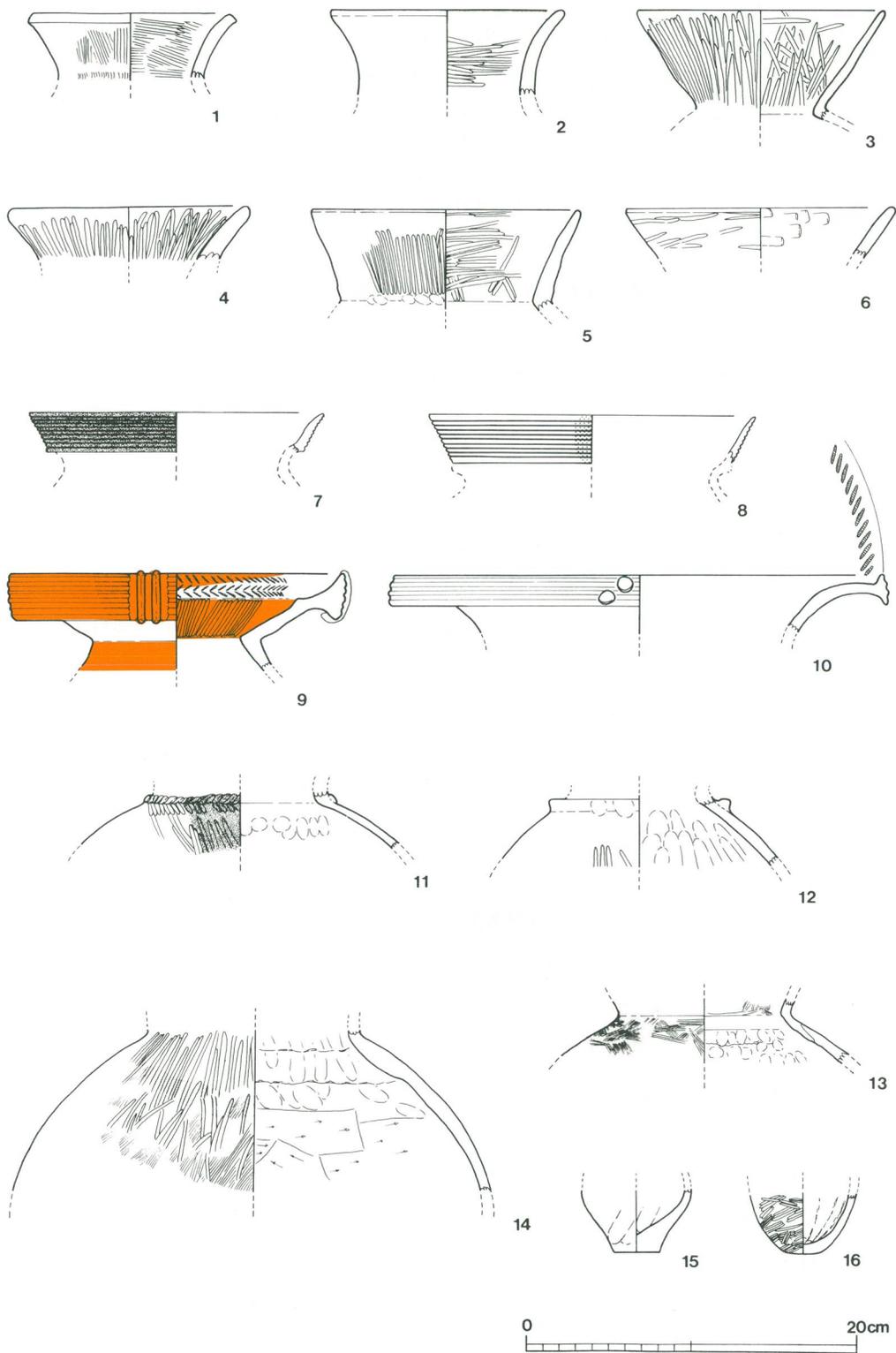
いずれも小片ながら、コンテナ 5 杯に及ぶ多量の遺物が出土した。壺は、図示した短頸壺のほか加飾二重口縁壺の細片もみられるが、総体に量は少ない。甕には弥生形 (14・15・21)、庄内大和形 (5)、布留式影響弥生形 (16)、布留形 (5・7・8) の各種がみられる。布留形甕の口縁形態を図示しなかったものも含めて検討すると、12 点中で a 手法 3 点 (25%)、b 手法 2 点 (17%)、 $e_1$  手法 3 点 (25%)、 $g_2$  手法 2 点 (17%)、 $nb_1$  手法 (第 5 章参照) 2 点 (17%) で、先述の各形式の甕のありかたからみても布留 0 式ないし 1 式の様相を示すものとして良いであろう。

小形丸底鉢には II  $C_1$  形式の 22 と III  $B_2$  形式の 23 がある。高杯は  $B_4$  形式の 24 のほか、図示しなかったものには  $B_5$  形式・ $B_6$  形式もみられる。小形器台は  $C_3$  形式の 29 のほか破片中の脚台部もいずれも C 形式で、これらも布留 1 式の範疇に収まる組成である。

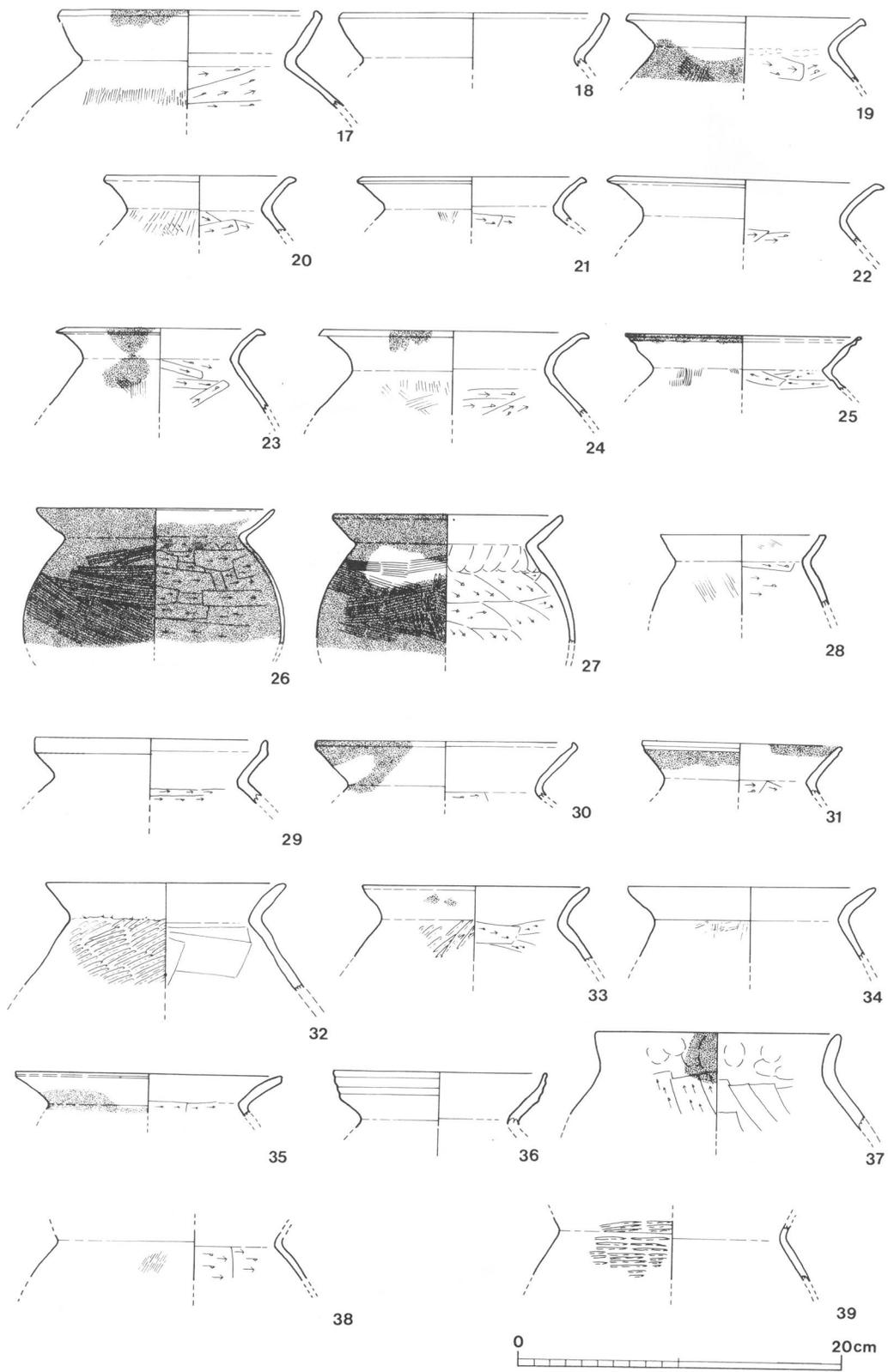
28 は丹塗の加飾器台の脚台部で庄内式古相に属し、このほか図示しなかったものには、簾状文と斜格子文で飾られる大形鉢の小片や脚台端部を上方に拡張する高杯の破片、底部に木葉文を押捺する壺の破片もあって、この包含層はわずかに弥生 III 様式の遺物を含むことは確かであるが、小片を含めて観察しても、弥生 V 様式から庄内式を経て、布留 1 式までの範疇に収まる遺物が大半を占めており、布留 0 式を中心としつつ布留 1 式を下限とする包含層とみてよい。

#### 8. 包含層各層について (第32図)

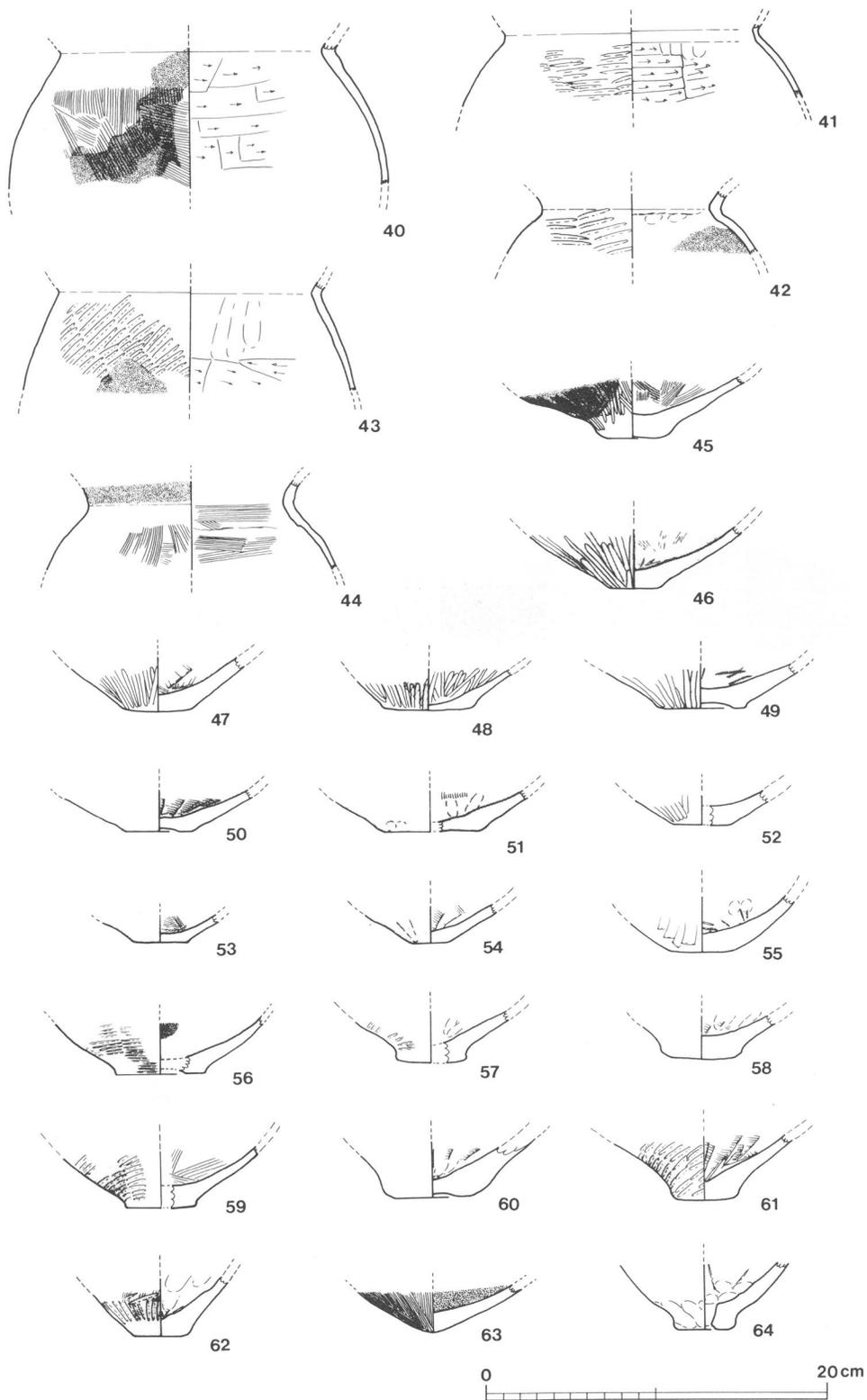
包含層出土土器が全体の 8 割を占めるが、やむなくその多くの図示を割愛する。鍵層 (第13図 VII 層) 出土土器中の布留形甕の口縁形態は、図示しなかったものも含めると 26 個体中、a 手法 3 個体 (12%)、b 手法 2 個体 (8%)、 $e_1$  手法 5 個体 (19%)、 $g_2$  手法 6 個体 (23%)、h 手法 1 個体 (4%)、 $nb_1$  手法 (第 5 章参照) 8 個体 (31%)、 $nb_2$  手法 (第 5 章参照) 2 個体 (8%) となっており、在地の手法である  $nb_1$  手法の高率に注目させられる。第 5 章で詳述するように、 $nb_1$  手法は布留 0 式の橿原遺跡の布留形甕に特徴的にみられる口縁形態なので、このことからこの鍵層が布留 0 式の遺物を多く含んでいることが判る。上限の遺物は頸部に突帯を有する加飾二重口縁壺 (1) や弥生 V 様式甕で、下限は  $B_6$  形式の高杯の比率が高い傾向に求めることができるだろう。布留 2 式を下限とする包含層とみてよい。このほか W-1 トレンチ 3 層も概ね布留 2 式までに収まるとみられ、このことは古墳時代前期の橿原遺跡の存続期間を示唆している<sup>(20)</sup> と言えるかもしれない。



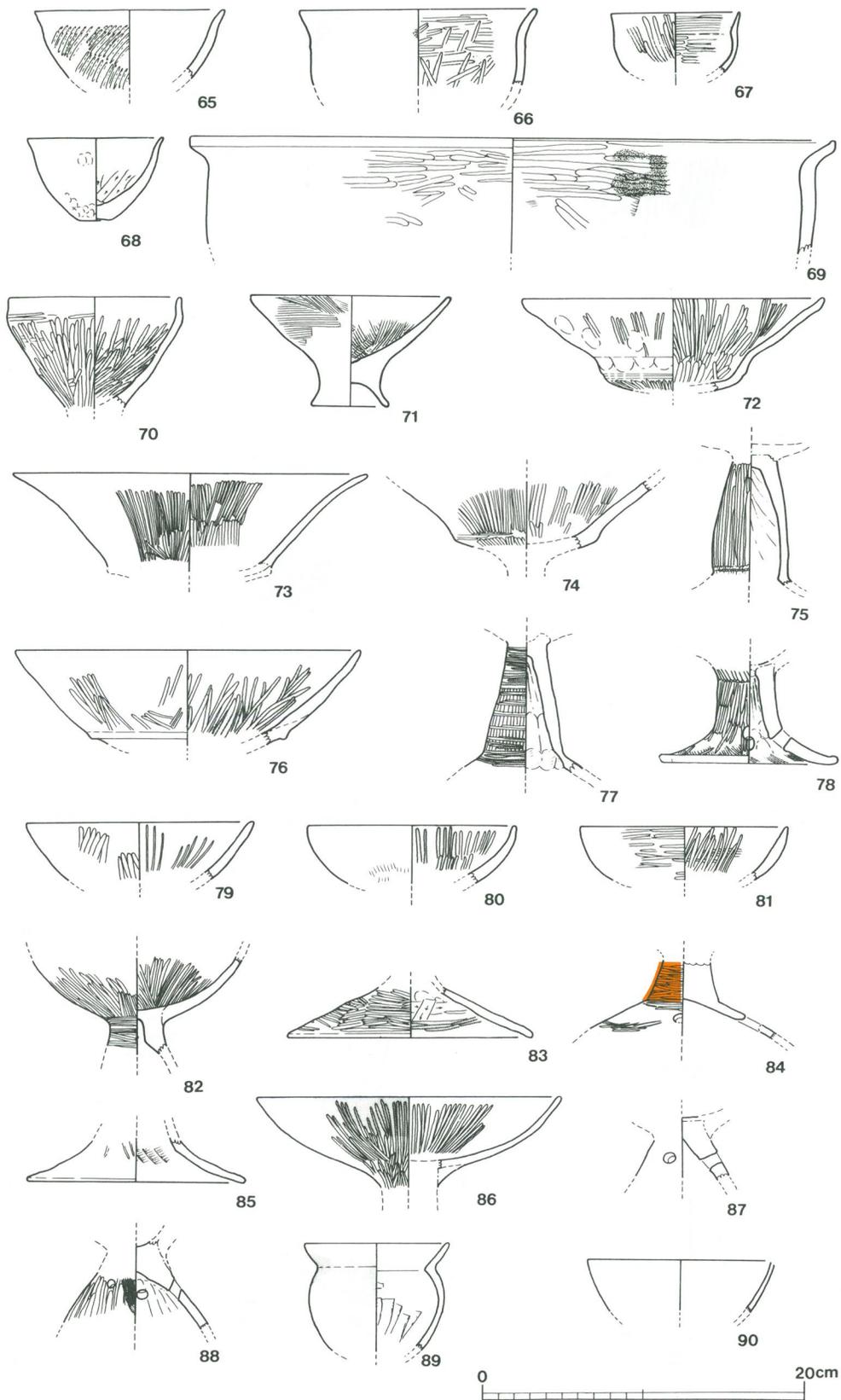
第21図 溝1出土遺物(その1)(S. = 1/4)



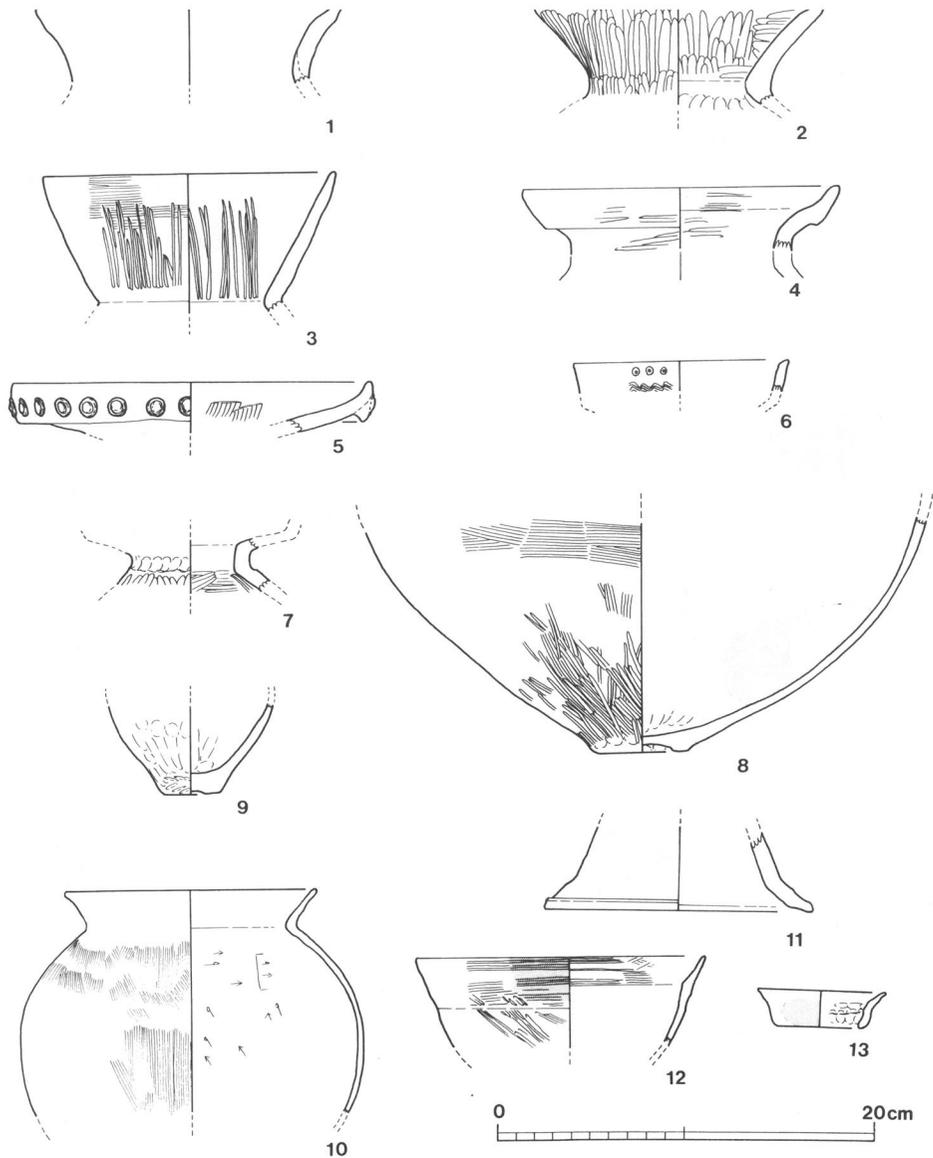
第22図 溝1出土遺物(その2) (S. = 1/4)



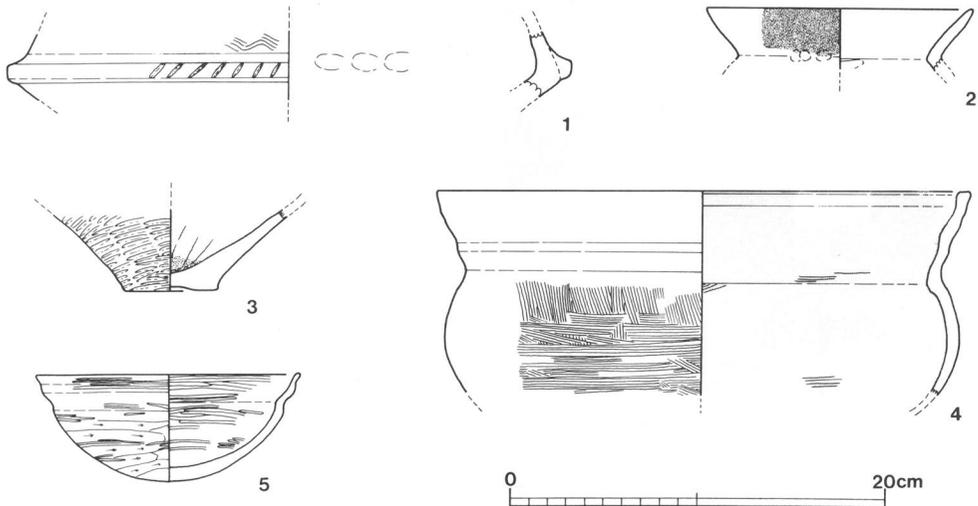
第23図 溝1出土遺物(その3)(S. =1/4)



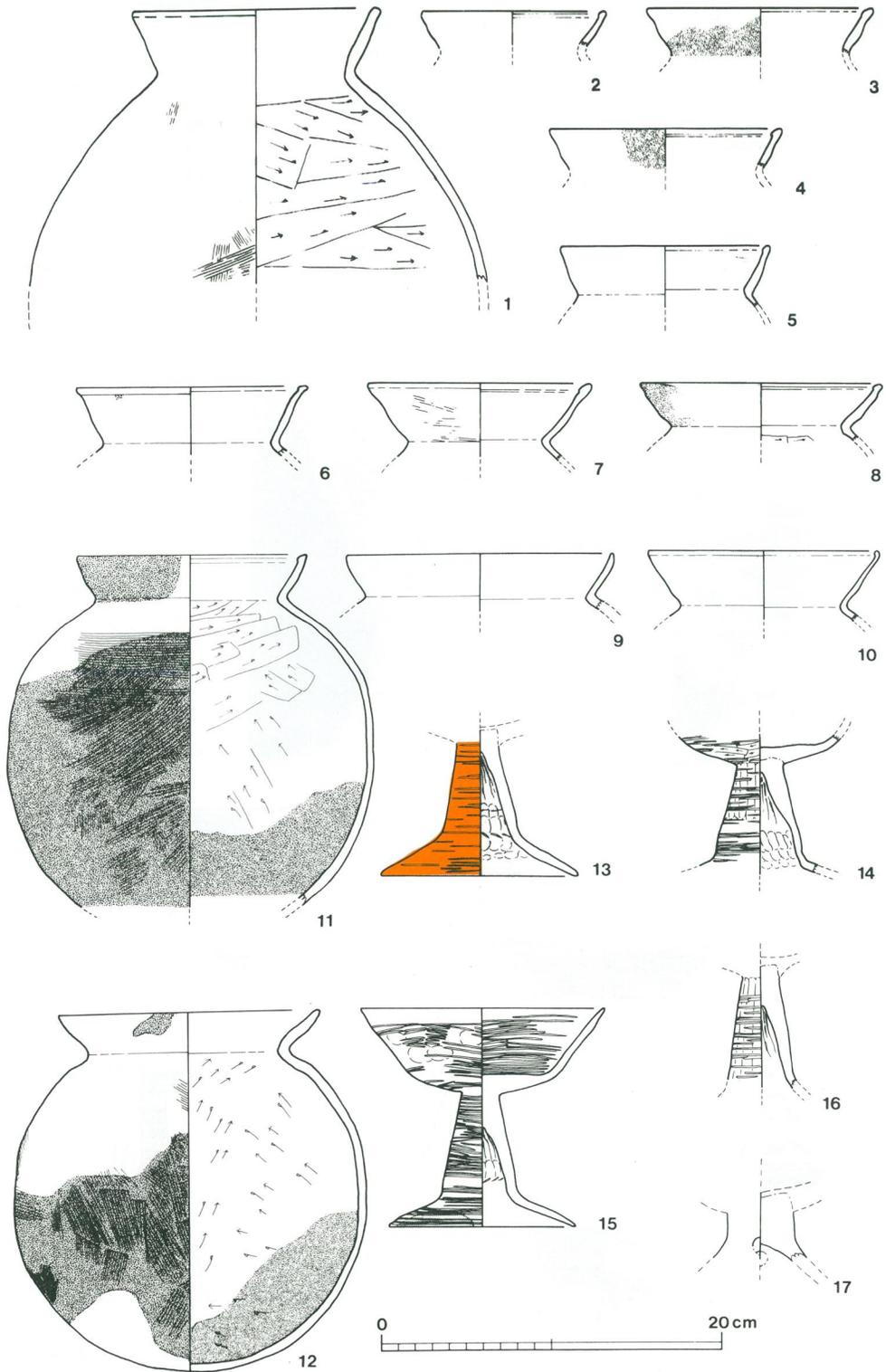
第24図 溝1出土遺物(その4)(S. =1/4)



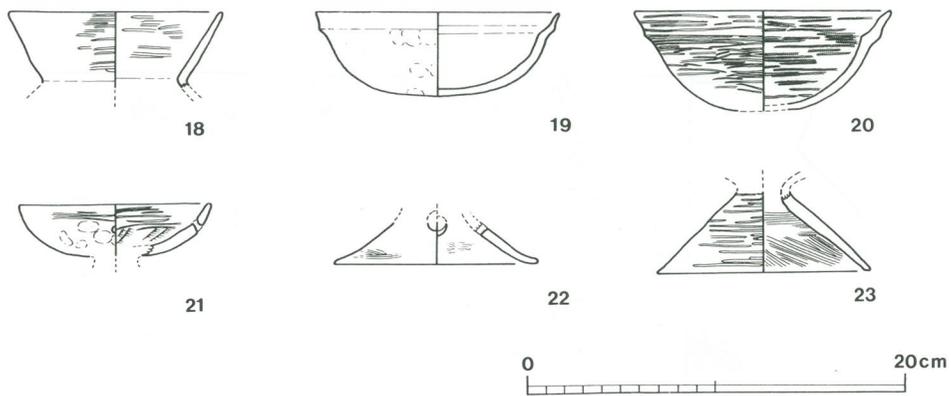
第25図 溝2出土遺物 (S. = 1 / 4)



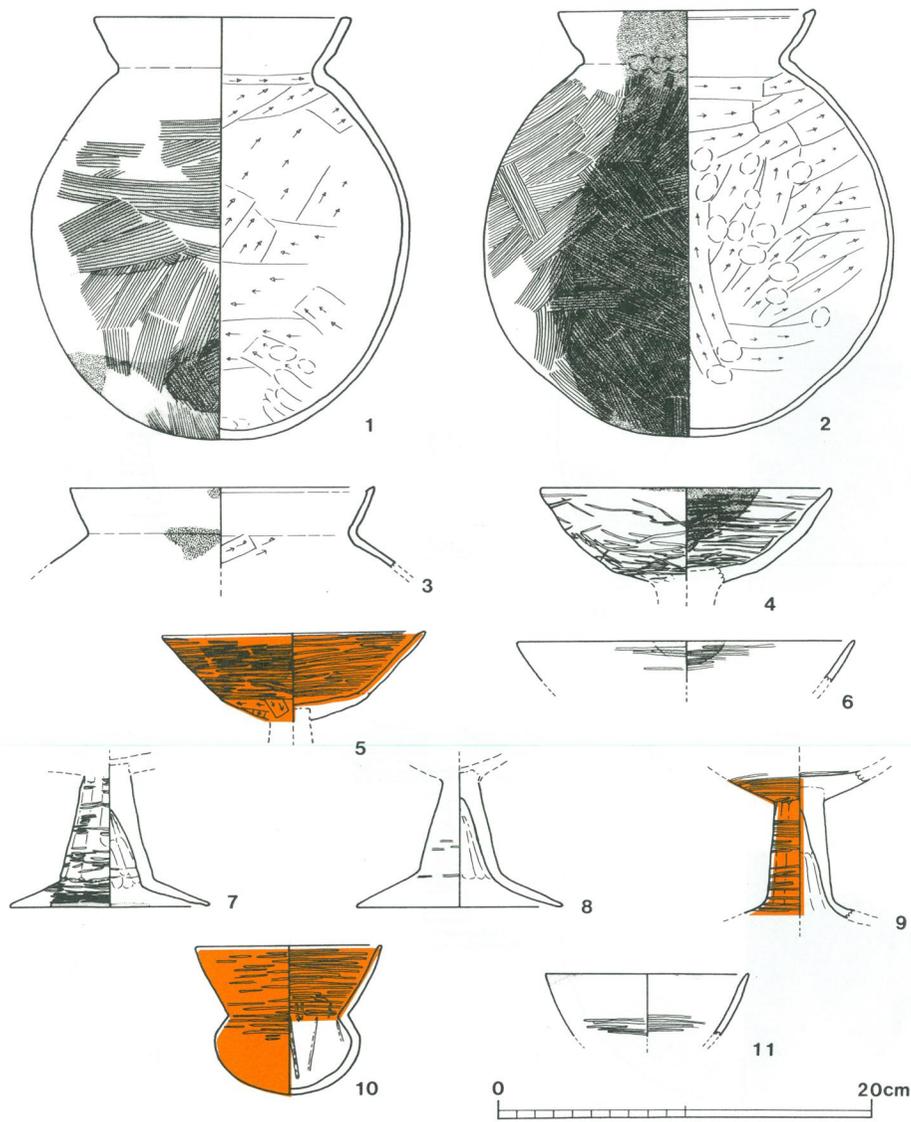
第26図 溝4出土遺物 (S. = 1 / 4)



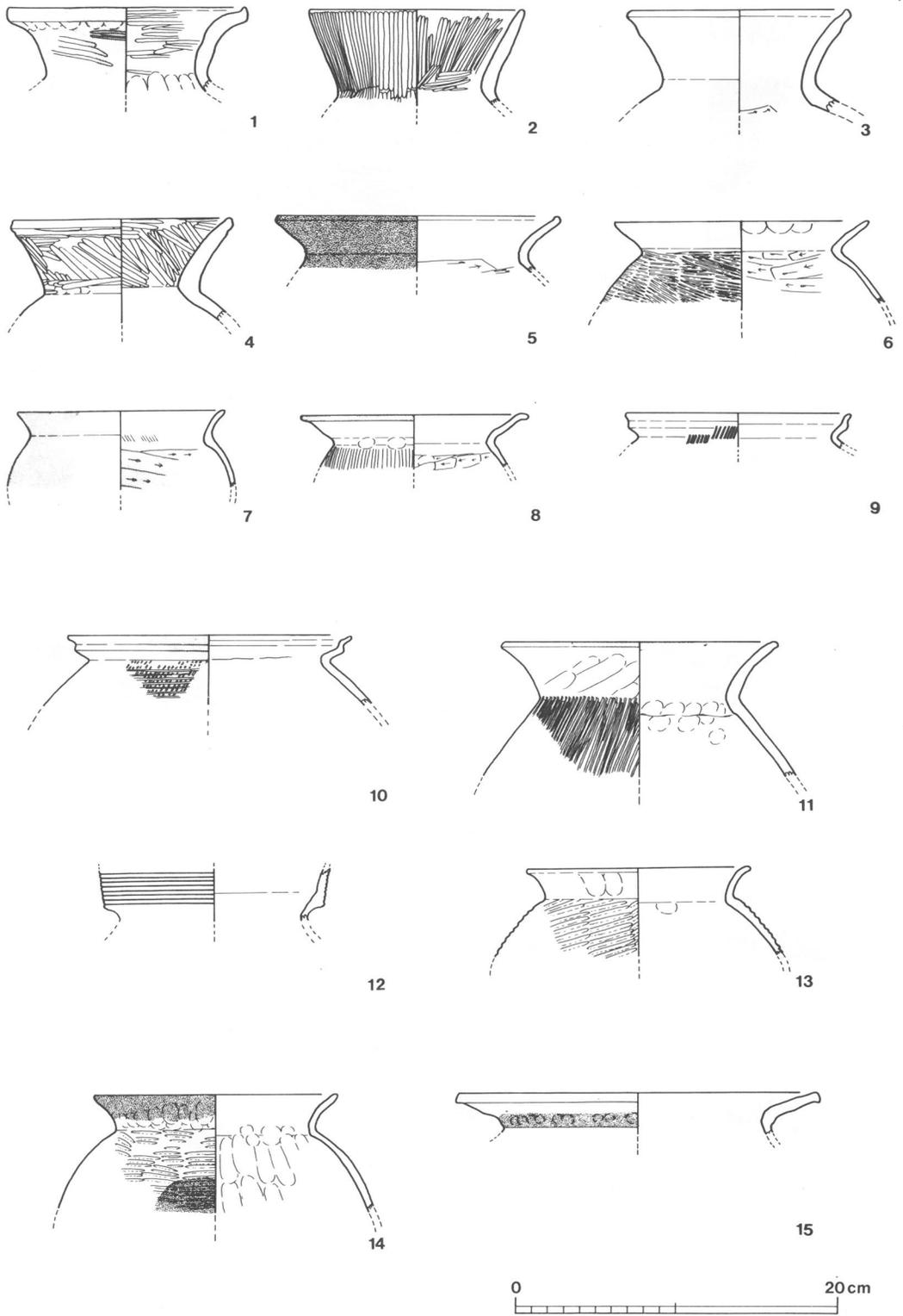
第27図 土坑1出土遺物(その1)(S. =1/4)



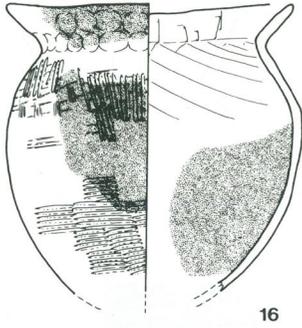
第28図 土坑1 出土遺物 (その2) (S. =1/4)



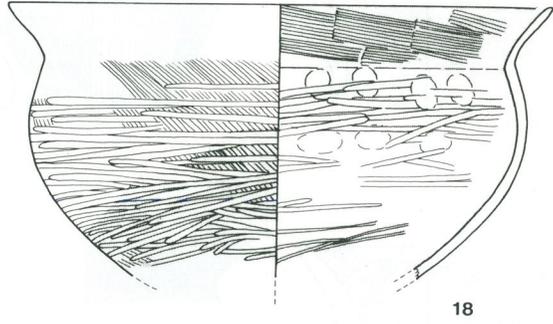
第29図 土坑2 出土遺物 (S. =1/4)



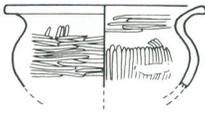
第30図 溝1覆土 W-1トレンチ⑦層出土遺物(その1) (S. = 1/4)



16



18



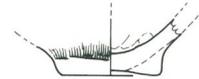
17



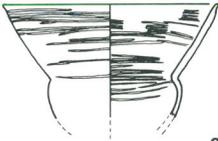
19



20



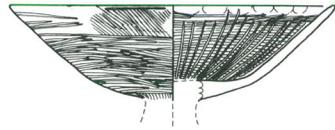
21



22



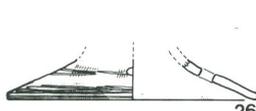
23



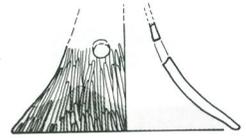
24



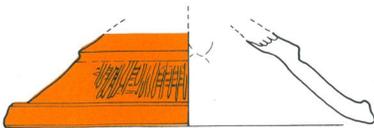
25



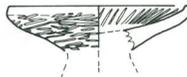
26



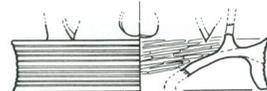
27



28



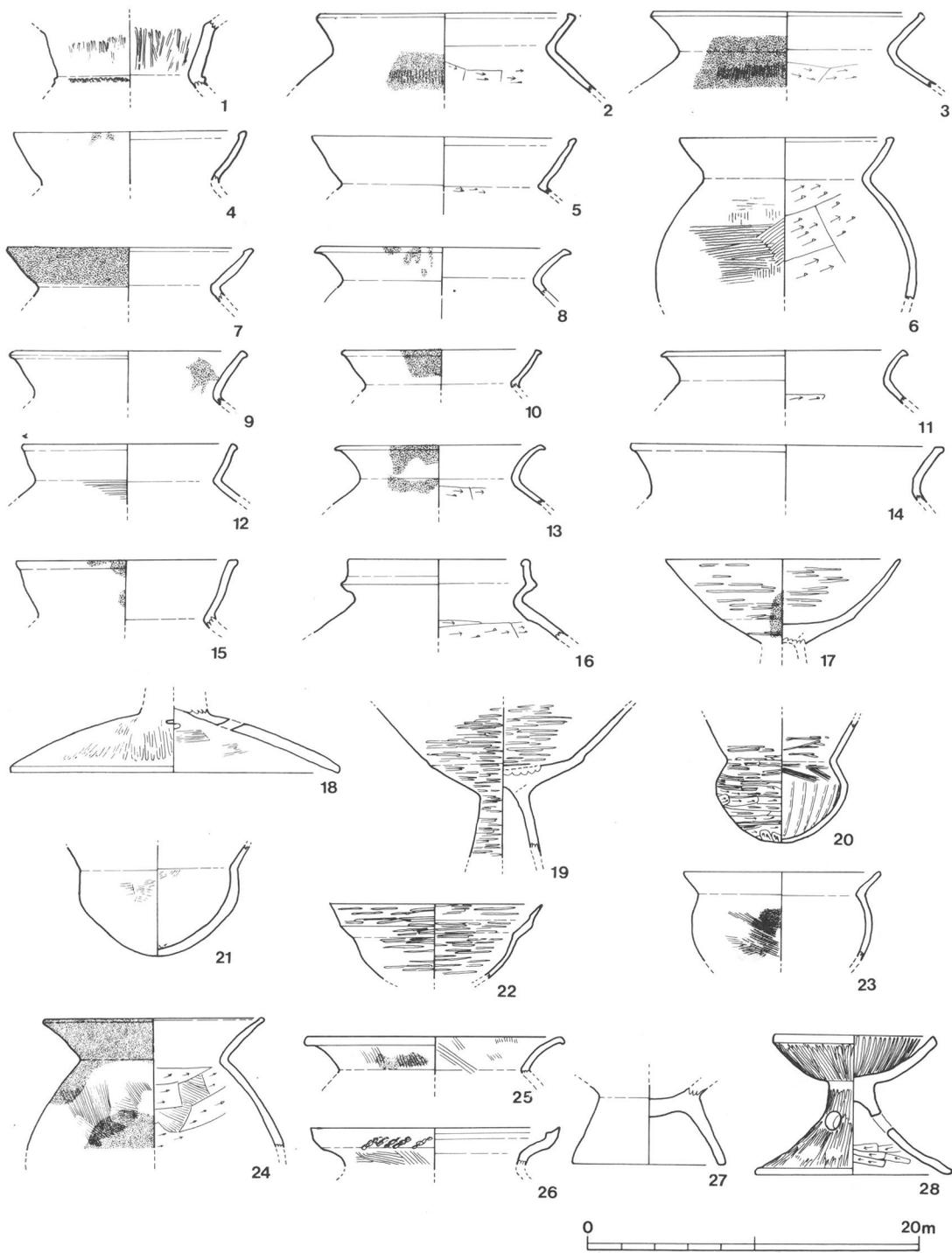
29



30



第31図 溝1覆土 W-1トレンチ⑦層出土遺物(その2)(S. =1/4)



第32图 W地区各包含层出土遗物 (S. =1/4)

第5表 W地区 溝1出土遺物観察表

挿図 および 図版 番号	遺層 構位	器種	形式	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色調	胎				土		備考	
						石	長	角	雲	チャ	赤		その他
21-1 (図版11)	溝 1	短頸壺	T-C-b	口径 11.8cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 タテ方向のハケ(6条/cm) 後、ヨコナデ。 内面 ヨコ方向のハケ(6条/cm)。 ・ ・	淡赤褐色	M	M	S	S	S	S		
21-2	溝 1	短頸壺	T-C-a	口径 14.0cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 器面摩擦のため調整不明。 内面 ヨコ方向のヘラミガキ(3条/cm)。 黒斑。 ・ ・	赤褐色	①	①	S	S	M	S		
21-3	溝 1	短頸壺	T-A <sub>1</sub> -a	口径 16.8cm (残存3/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ(3条/cm)。 内面 不定方向のヘラミガキ(幅2mm)。 ・ ・	淡褐色	①	①	S	S	M	S		
21-4	溝 1	短頸壺	T-A <sub>1</sub> -a	口径 14.0cm (残存1/3からの回転復元) ・外面 タテ方向のヘラミガキ(4条/cm)。 内面 タテ方向のヘラミガキ(4条/cm)。 ・ ・	淡褐色	M	M	S	S	S	M		外面赤色土スリップ。
21-5	溝 1	短頸壺	T-A <sub>1</sub> -a	口径 16.0cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ(4条/cm)。 頸部に指頭による押圧。 黒斑。 内面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ後、ヨコ方向のヘラミガキ(3条/cm)。 ・ ・	淡褐色	L	L	S	S	S	S		

21-6	溝 1	短頸壺	T-A <sub>1</sub> -a	口径 16.2cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm)。 内面 ヨコ方向の板ナデ後、ヨコナデ。 ・ ・	淡赤褐色	M S 3 M S 2 S S 2 S S 2 M S 3	花崗岩 (長径10mm)
21-7	溝 1	甕		口径 19.6cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、凹線 (4条/cm) を施す。黒斑。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	赤褐色	S S 2 S S 4 S S 2 S S 2 S S 2 S S 2	搬入土器 北陸系 (月影2式) (石英小形で多くない。角閃石非常に多い。)
21-8	溝 1	甕		口径 17.6cm (残存1/13からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、9条の凹線 (5条/cm) を施す。煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	淡褐色	M S 3 M S 2 S S 3 S S 1 S S 2 M S 3	搬入土器 北陸系 (月影2式) (チャート多く、雲母少ない。)
21-9 (図版12)	溝 1	壺		口径 20.1cm (残存1/3からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、5条の凹線 (2条/cm) を施す。1単位2本以上の棒状浮文を張り付ける。黒斑。 内面 上部はヨコナデ後、櫛描刺突文を互い違いに3段施す。黒斑。 下部はタテ方向のへらミガキ (5条/cm) を施す。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・	灰褐色	M S 2 M S 2 S S 5 S S 1 S S 2 M S 2	丹塗 搬入土器 伊勢湾岸系 (柳ヶ坪型) (角閃石非常に多く、雲母少ない。)
21-10	溝 1	壺		口径 29.4cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、3条の凹線 (2条/cm) を施す。1単位2個の円形浮文を張り付ける。 内面 ヨコナデ後、櫛描刺突文を施す。 ・ ・	淡赤黄色	M S 3 M S 2 S S 2 S S 2 S S 2 M S 3	弥生IV様式 広口壺 搬入土器 紀伊系か (角閃石・長石少なく、赤色斑粒多い。)

挿 お よ び 図 版 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎 土						備 考		
							石	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ ー ト	赤 色 斑 粒		そ の 他	
21-11			二重口縁 壺	N	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口頸部</li> <li>・体部</li> <li>・底部（脚台部）</li> </ul> 法量と調整 頸部径 11.6cm（残存1/8からの回転復元） <ul style="list-style-type: none"> <li>・外面 タテ方向のヘラミガキ（2条/cm）の後、頸部にはり付け突帯を施す。煤付着。</li> <li>・内面 指頭による押圧後、ヨコナデ。</li> </ul>	淡褐色	M	M	S	M	S	M	S		
21-12			二重口縁 壺	N	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ（幅0.2cm）を施す。頸部は突帯を張り付けた後、ヨコナデ。</li> <li>・内面 指頭によるタテ方向のナデ。</li> </ul>	淡褐色	M	M	S	S	S	S	S	S	
21-13	溝 1		二重口縁 壺	N	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外面 不定方向のハケ（14条/cm）。黒斑。</li> <li>・内面 不定方向のハケ（12条/cm）と指頭による押圧。</li> </ul>	淡褐色	M	M	S	S	S	S	S	S	
21-14	溝 1		二重口縁 壺	N	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外面 タテ方向のハケ（8条/cm）後、タテ方向のヘラミガキ（4条/cm）を施す。黒斑。</li> <li>・内面 左廻りのヘラケズリ（工具は左から右）。頸部付近は指頭による押圧とナデ。</li> </ul>	乳褐色	M	M	S	S	S	S	S	S	



挿 お よ び 図 版 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎					備 考
							石 長 石 英	角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒	其 他	
22-20	溝 1	1	甕 布留形	• - • - 5 nb <sub>1</sub>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 口頸部</li> <li>• 体部</li> <li>• 底部 (脚台部)</li> </ul> 法量と調整 口径 11.6cm (残存1/8からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 • 外面 タテ方向ハケ (4条/cm) 後、ヨコナデを施す。 内面 左廻りのヘラケズリ (工具は左から右)。	灰褐色	M   S 3	M   S 3	M   S 3	0	0	雲母はS・Sサイズ多い。
22-21	溝 1	1	甕 布留形	• - • - 5 nb <sub>1</sub>	口径 13.6cm (残存1/6からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 • 外面 タテ方向のハケ (4条/cm)。 内面 左廻りのヘラケズリ (工具は左から右)。	灰褐色	M   S 2	M   S 3	M   S 3	0	0	雲母はS・Sサイズ多い。
22-22	溝 1	1	甕 布留形	• - • - 5 nb <sub>1</sub>	口径 16.4cm (残存1/8からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 • 外面 ヨコナデ。 内面 左廻りのヘラケズリ (工具は左から右)。	灰褐色	M   S 3	M   S 3	M   S 3	0	1	
22-23 (図版13)	溝 1	1	甕 布留形	• - • - 5 nb <sub>1</sub>	口径 12.3cm (残存1/6からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。 • 外面 タテ方向のハケ (8条/cm)。 内面 左廻りのヘラケズリ (工具は左から右)。	灰褐色	M   S 3	M   S 3	M   S 3	0	0	

22-24	溝 1	甕 布留形	・-・- 5nb <sub>1</sub>	口径 16.0cm (残存1/10からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・外面 タテ方向後、ナナメ方向のハケ (5条/cm)。 内面 左廻りのへらケズリ (工具は左から右)。 ・	淡褐色	M-S 4 M-S 3 S-S 3 S-S ⑤ 3 S-S 1 M-S 1 S		
22-25	溝 1	甕 布留形	・-・- 5 特殊	口径 14.8cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・外面 タテ方向のハケ (12条/cm)。 内面 左廻りのへらケズリ (工具は左から右)。 ・	淡黄褐色	M-S 3 M-S 3 S-S 2 S-S 2 S-S 2 S	搬入土器 (角閃石少ない。)	
22-26	溝 1	甕 布留形	・-・B- 5 a	口径 14.6cm (残存1/5からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。炭化物付着。 ・外面 ヨコ方向のハケ (11条/cm) 後、ナ ナメ方向のハケ (11条/cm)。 内面 原則左廻りのへらケズリ (工具は左 から右)。 ・	乳褐色	M-S 2 M-S 2 S-S 2 S-S 2 S	煤・炭化物の付着著 しく、胎土観察困難。	
22-27	溝 1	甕 布留形	・-・B- 5 b	口径 14.0cm (残存1/5からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコ方向のハケ (5条/cm) 後、タ テ方向のタタキ。煤付着。 内面 左廻りのへらケズリ (工具は左から 右)。頸部のみ指頭によるタテ方向 のナデが残存。 ・	乳褐色	L-S 3 L-S 3 S-S 3 S-S 2 S-S 1 S		

挿 お よ び 版 号 番	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎						備 考
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ イト	赤 色 斑 粒	
22-28	溝	1	甕 布留式影 響弥生形	• - • B - 5 b	口径 9.8cm (残存1/4からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。ナメ方向のハケがかす かに残る。 • 外面 タテ方向のハケ (9条/cm)。 内面 ヘラケズリ (工具は左から右)。 • _____	淡褐色	M - S 3	M - S 3	S S 3 3	S S 3 1	S S 1 1		
22-29	溝	1	甕	• - • - 5 c	口径 14.2cm (残存1/10からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。黒斑。 内面 ヨコナデ。 • 外面 ヨコナデ。 内面 ヘラケズリ (工具は左から右)。 • _____	淡褐色	L - S 3	L - S 3	S S 2 2	S S 2 2	S S 2 0		搬入土器 東部瀬戸内系 (角閃石少なく、チャー トややめだつ。)
22-30	溝	1	甕 布留形	• - • - 5 e <sub>1</sub>	口径 16.2cm (残存1/8からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。 • 外面 ヨコナデ。 内面 左廻りのヘラケズリ (工具は左から 右)。 • _____	灰褐色	M - S 3	M - S 3	S S 3 3	S S 3 1	S S 1 1		
22-31	溝	1	甕	• - • - • a	口径 12.4cm (残存1/8からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。煤付着。 • 外面 ヨコナデ。 内面 左廻りのヘラケズリ (工具は左から 右)。 • _____	淡褐色	M - S 3	M - S 3	M S S	M S S	M S 3 0		

22-32	溝 1	廻 布留式影 響弥生形	<ul style="list-style-type: none"> <li>• - A -</li> <li>• a</li> </ul>	<p>口径 14.8cm (残存1/4からの回転復元)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 外面 ヨコナデ。</li> <li>• 内面 ヨコナデ。</li> <li>• 外面 タタキ (4条/cm) を上から下へ右廻りに行う。</li> <li>• 内面 左廻りの板ナデ (工具は左から右)。</li> </ul>	淡褐色	L   S 3 L   S 3 L   S 3	S   L 3 S   S 3 S   S 3	L   S 3 L   S 3 L   S 3			雲母はS・㊟サイズ多い。
22-33	溝 1	廻 布留式影 響弥生形	<ul style="list-style-type: none"> <li>• - - -</li> <li>• a</li> </ul>	<p>口径 14.2cm (残存1/7からの回転復元)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 外面 ヨコナデ。煤付着。</li> <li>• 内面 ヨコナデ。</li> <li>• 外面 右上がりのタタキ (3条/cm) を左廻りに施す。</li> <li>• 内面 左廻りのへラケズリ (工具は左から右)。</li> </ul>	灰褐色	L   S 3 L   S 2 L   S 3	M   S 3 S   S 3 S   S 3	L   S 3 L   S 2 L   S 3			
22-34	溝 1	廻 布留式影 響弥生形	<ul style="list-style-type: none"> <li>• - - -</li> <li>• a</li> </ul>	<p>口径 15.4cm (残存1/5からの回転復元)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 外面 ヨコナデ。</li> <li>• 内面 ヨコナデ。</li> <li>• 外面 ヨコ後、タテ方向のハケ (11条/cm)。</li> <li>• 内面 ヨコナデ。</li> </ul>	淡褐色	M   S 3 M   S 3 M   S 3	S   S 3 S   S 3 S   S 3	M   S 3 M   S 3 M   S 3			
22-35	溝 1	廻 庄内河内 形	<ul style="list-style-type: none"> <li>• - - -</li> <li>• b</li> </ul>	<p>口径 16.2cm (残存1/5からの回転復元)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 外面 ヨコナデ。煤付着。</li> <li>• 内面 ヨコナデ。</li> <li>• 外面 ヨコナデ。</li> <li>• 内面 へラケズリ (工具は左から右)。</li> </ul>	暗褐色	S   M 2 M   S 3 L   S 4	M   L 3 L   S 3 M   S 3	S   M 2 M   S 3 L   S 4			搬入土器 生駒西麓系 (石英少なく、大形の角閃石が多い)
22-36	溝 1	廻	<ul style="list-style-type: none"> <li>• - - -</li> <li>• c</li> </ul>	<p>口径 12.1cm (残存1/8からの回転復元)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 外面 ヨコナデ後、擬凹線を施す。</li> <li>• 内面 ヨコナデ。</li> </ul>	淡褐色	M   S 3 M   S 3 M   S 3	S   S 2 S   S 2 S   S 2	M   S 2 M   S 2 M   S 2			搬入土器 東部瀬戸内系? (角閃石少なく、チャー トややめだつ。)

押 お 図 版 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎						備 考	
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ ー ト	赤 色 斑 粒		其 他
22-37	溝	1	甕 布留形影 響弥生形	・-・- ・a	<ul style="list-style-type: none"> <li>口頸部</li> <li>体部</li> <li>底部 (脚台部)</li> </ul> 口径 15.0cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデおよび指頭による押圧。煤 付着。 内面 ヨコナデおよび指頭による押圧。 ・外面 タテ方向のへラケズリを下から上へ 施す。	淡褐色	M - S 3	M - S 3	S S 2	S S 2	S S 2	S S 2		搬入土器 (角閃石少なく、チャー トややめだつ。)
22-38	溝	1	甕 布留形		<ul style="list-style-type: none"> <li>頸部径 13.8cm (残存1/10からの回転復元)</li> <li>外面 タテ方向のハケ (10条/cm) 後、ヨ            コナデ。            内面 左廻りのへラケズリ (工具は左から            右)。</li> </ul>	淡褐色	M - S 3	S S 2	S S 3	S S 2	S S 2	S S 2	0	
22-39	溝	1	甕 弥生形		<ul style="list-style-type: none"> <li>頸部径 14.0cm (残存1/8からの回転復元)</li> <li>外面 左廻りのタタキ (3条/cm)。            内面 ヨコナデ。            ・外面 左廻りの水平タタキ (3条/cm)。            内面 ヨコナデ。</li> </ul>	淡赤褐色	M - S 3	M - S 3	S S 2	S S 2	M S	S S 2	2	口縁叩き出し技法 搬入土器 (角閃石少なく、チャー トややめだつ。)
23-40 (図版14)	溝	1	甕 布留形	・-・- 5	<ul style="list-style-type: none"> <li>頸部径 17.2cm (残存1/16からの回転復元)</li> <li>外面 不定方向のハケ (9条/cm)。頸部は            後、ヨコナデ。煤付着。            内面 左廻りのへラケズリ (工具は左から            右)。</li> </ul>	淡褐色	M - S 3	S S 2	S S 2	S S 2	S S 2	S S 2	0	

23-41	溝 1	甕 布留式影 響弥生形		頸部径 14.8cm (残存1/4からの回転復元) ・ 外面 タタキ (3条/cm) を右廻りに施す。 内面 左廻りのへらケズリ (工具は左から右)。頸部は指頭による押圧痕を残す。	淡赤褐色	M - S 2 M - S 2 S 2 S 2 S 2 S 1	搬入土器 (石英・長石・角閃石少なく、微細なチャート多い。)
23-42	溝 1	甕 弥生形		頸部径 10.7cm (残存1/4からの回転復元) ・ 外面 タタキ (3条/cm) を左廻りに施す。 黒斑。 内面 ヨコナデおおよび指頭による押圧。炭化物付着。	淡褐色	M - S 3 M - S 3 S 3 S 3 S 3	
23-43	溝 1	甕 布留式影 響弥生形		頸部径 15.6cm (残存1/4からの回転復元) ・ 外面 右上がりタタキ (3条/cm) を上から下へ右廻りに施す。煤付着。 内面 上部指頭によるナデ。下部は左廻りのへらケズリ (工具は左から右)。	淡褐色	L - S 3 L - S 3 S 3 S 3 S 3 S 0	
23-44	溝 1	甕 布留式影 響弥生形	・ - - - 5	頸部径 12.0cm (残存1/4からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・ 外面 ヨコ後、タテ方向のハケ (14条/cm)。 内面 ヨコ方向のハケ (11条/cm)。	淡褐色	M - S 2 M - S 2 S 2 S 2 S 2 S 0	搬入土器 (石英・長石・角閃石少なく、チャートやや目立つ。)
23-45	溝 1	壺 (底部)		底部径 4.2cm ・ 外面 底部ナデおおよび指頭による押圧。体部に移行するに従い、原則左廻りのへらミガキ (4条/cm) を施す。煤付着。 内面 指頭による押圧。上部は不定方向のハケ (8条/cm)。	淡褐色	M - S 3 M - S 3 S 3 S 3 S 3 S 1	

挿 および 図 版 番 号	遺 層 位	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	色 調	胎 土						備 考	
								石 長	角 閃	雲 母	チャ ート	赤 斑 粒	そ の 他		
23-46	溝 1	壺 (底部)			底部径 3.0cm (残存1/2からの回転復元) ・ _____ ・ _____ ・ 外面 底部指頭による押圧。体部に移行するに従い、タテ方向のヘラミガキ (3条/cm) を施す。黒斑。 内面 右廻りのクモノス状ハケ。黒斑。		淡褐色	S	S	S	0	0	0		
23-47	溝 1	壺 (底部)			底部径 3.8cm (残存1/4からの回転復元) ・ _____ ・ _____ ・ 外面 底部未調整。体部へと移行するに従いタテ方向のヘラミガキ (2条/cm) を施す。 内面 不定方向のハケ (8条/cm)。黒斑。		淡褐色	M	S	S	3	2	3	2	搬入土器 (チャート目立つ。)
23-48	溝 1	壺 (底部)			底部径 5.4cm ・ _____ ・ _____ ・ 外面 指頭による不定方向のナデ、体部に移行するに従い、タテ方向のヘラミガキ (3条/cm)。黒斑。 内面 指頭による押圧。上部はタテ方向のヘラミガキ (3条/cm)。		淡褐色	M	S	S	3	2	1	0	
23-49	溝 1	壺 (底部)			底部径 5.2cm (残存1/3からの回転復元) ・ _____ ・ _____ ・ 外面 底部未調整。体部に移行するに従い、タテ方向のヘラミガキ (3条/cm)。黒斑。 内面 右廻りのクモノス状ハケ。黒斑。		淡褐色	S	S	S	3	2	0	0	

23-50	溝 1	壺 (底部)	底部径 3.8cm <ul style="list-style-type: none"> <li>• 底面 底部不定方向のナデ、体部に移行するに従い、ハケがかすかに残る。</li> <li>• 内面 右廻りのクモノス状のハケ後、指頭による押圧。</li> </ul>	淡褐色	M 3 M 1 S 2 S 2 S 2 S 2 S 2	M 3 M 1 S 2 S 2 S 2 S 2 S 2	M 3 M 1 S 2 S 2 S 2 S 2 S 2	M 3 M 1 S 2 S 2 S 2 S 2 S 2	搬入土器 (押戻り少く、チャートややめだつ。)
23-51	溝 1	壺 (底部)	底部径 6.2cm (残存1/3からの回転復元) <ul style="list-style-type: none"> <li>• 底面 底部未調整。体部に移行するに従い、指頭による押圧とヨコナデ。黒斑。</li> <li>• 内面 指頭によるタテ方向のナデ、一部タテ方向のハケが残る。黒斑。</li> </ul>	暗赤褐色	M 3 M 1 S 3 S 3 S 2 S 2 S 2	M 3 M 1 S 3 S 3 S 2 S 2 S 2	M 3 M 1 S 3 S 3 S 2 S 2 S 2	M 3 M 1 S 3 S 3 S 2 S 2 S 2	
23-52	溝 1	壺 (底部)	底部径 3.6cm (残存1/2からの回転復元) <ul style="list-style-type: none"> <li>• 底面 不定方向のナデ、体部に移行するに従い、タテ方向のヘラミガキ(3条/cm)。</li> <li>• 内面 不定方向のナデ。</li> </ul>	灰褐色	S 2 M 3 S 1 S 2 S 2 S 2				
23-53	溝 1	壺 (底部)	底部径 3.3cm (残存1/2からの回転復元) <ul style="list-style-type: none"> <li>• 底面 不定方向のナデ。黒斑。</li> <li>• 内面 不定方向のハケ後、指頭による押圧。</li> </ul>	淡褐色	S 3 M 2 S 2 S 2 S 2 S 2				
23-54	溝 1	壺 (底部)	底部径 2.2cm <ul style="list-style-type: none"> <li>• 底面 指頭によるタテ方向のナデ。黒斑。</li> <li>• 内面 右廻りのクモノス状ハケ。</li> </ul>	灰褐色	M 3 M 1 S 2 S 2 S 2 S 2				

挿 お 図 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法量と調整	口頸部 ・ 体部 ・ 底部 (脚台部)	色 調	胎						備 考
								石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ ート	赤 色 斑 粒	
23-55	溝 1	壺 (底部)			底部径 3.8cm ・ 外面 底部不定方向の板ナデ。体部に移行するに従い、タテ方向の板ナデ。 内面 右廻りのクモノス状ハケ後、指頭による押圧。黒斑。		淡褐色	M - S 3	M - S 3	S S 2 1	S S 2			
23-56	溝 1	壺 (底部) 弥生形			底部径 5.2cm (残存1/4からの回転復元) ・ 外面 底部不定方向のナデ、体部に移行するに従い、タタキ (5条/cm) を下から上へ右廻りに施す。 内面 不定方向のナデ。黒斑。炭化物付着。		淡褐色	M - S 3	M - S 3	S S 3 2 0 0	◎			
23-57	溝 1	甕 (底部)			底部径 4.2cm (残存1/3からの回転復元) ・ 外面 底部不定方向のナデ。体部みに移行するに従い、タタキ (3条/cm) を施した後、不定方向のナデ。 内面 指頭によるタテ方向のナデ。		灰褐色	L - S 3	L - S 3	S S 3 2 0 0	S S 2			
23-58 (図版15)	溝 1	壺 (底部)			底部径 4.6cm ・ 外面 タタキがかすかに残る。器面摩擦のため残存状況は良くない。 内面 指頭によるタテ方向のナデおよびクモノス状ハケ。		淡赤褐色	L - S 3	L - S 3	S S 2 3 2	S S 2	L - S 2		搬入土器 (角閃石少なく、チャートややめだつ。石英・長石は大形。)

23-59	溝 1	甕 (底部) 弥生形	底部径 4.0cm (残存1/2からの回転復元) ・ 外面 底部不定方向のナデ、体部に移行するに従い、左廻りに右上がりのタタキ (3条/cm) を施す。黒斑。 内面 不定方向のハケ (8条/cm)。	暗褐色	M - S 3 M - S 3	S 0 1			
23-60	溝 1	壺 (底部)	底部径 6.0cm (残存2/3からの回転復元) ・ 外面 器面剝離により、調整不明。 内面 右廻りのクモノス状ハケ後、指頭によるタテ方向のナデ。	灰褐色	M - S 3 M - S 3	M S M S M S M S M S M S	1 1		
23-61	溝 1	甕 (底部)	底部径 3.8cm (残存1/2からの回転復元) ・ 外面 底部未調整。体部に移行するに従い、右上がりタタキ (2条/cm) を下から上へ左廻りに施す。黒斑。 内面 指頭による押圧後、右廻りのクモノス状ハケ (10条/cm) を施す。	淡褐色	M - S 2 M - S 2	S S S S S S S S S S S S	0 1		
23-62	溝 1	甕 (底部)	底部径 3.4cm ・ 外面 底部不定方向のナデ。体部に移行するに従い、タテ方向のタタキ (2条/cm) を施した後、右上がりのハケ (8条/cm) を施す。黒斑。 内面 右廻りのクモノス状ハケ。上部は指頭による押圧。	淡褐色	M - S 3 M - S 3	S S S S S S S S S S S S	0 0		
23-63	溝 1	甕 (底部) 庄内河内 形	尖底 ・ 外面 右廻りのハケ (12条/cm)。ヘラケズリ。炭化物付着。 内面 (底部は1.2cmと厚く、残存部で最も薄いところでも0.5cmの厚みがある。)	暗褐色	S M L S M L S M L S M L S M L S M L	S S S S S S S S S S S S	0 0		搬入土器 生駒山西麓系 (石英は小形で少なく、長石と大形の角閃石多い。)

挿 お よ び 放 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色 調	胎 土						備 考			
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ イト	赤 色 斑 粒		そ の 他		
23-64	溝 1	甌			<ul style="list-style-type: none"> <li>底部径 3.0cm (残存1/2からの回転復元)</li> <li>・外面 ヨコナデ。</li> <li>内面 ヨコナデ。</li> <li>・外面 底部指頭による押圧。底部に凹形の焼成前穿孔(径1.0cm)を内面から行う。</li> <li>内面 右廻りのクモノス状ハケおよび指頭による押圧。</li> </ul>	淡褐色	L	M	S	S	⑤	3	0	0		
24-65	溝 1	鉢	III-E <sub>1</sub>		<ul style="list-style-type: none"> <li>口径 11.9cm (残存1/6からの回転復元)</li> <li>・外面 タタキ(4条/cm)後、ヨコナデ。</li> <li>内面 ヨコナデ。</li> <li>・外面 タタキ(4条/cm)を上から下へ右廻りに施す。</li> <li>内面 不定方向のナデ。</li> </ul>	赤褐色	M	M	S	S	⑤	3	2	1	2	
24-66	溝 1	鉢	II-E <sub>1</sub>		<ul style="list-style-type: none"> <li>口径 14.8cm (残存1/8からの回転復元)</li> <li>・外面 ヨコナデ。</li> <li>内面 ヨコナデ。</li> <li>・外面 器面剥離のため、調整不明。</li> <li>内面 ヨコナデ後、ヘラミガキ(幅2.5mm)を施す。黒斑。</li> </ul>	淡褐色	M	M	S	S	⑤	3	2	1	2	
24-67	溝 1	鉢	III-A <sub>1</sub>		<ul style="list-style-type: none"> <li>口径 8.0cm (残存1/10からの回転復元)</li> <li>・外面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ(幅2mm)を施す。</li> <li>内面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ(5条/cm)。</li> <li>・外面 タテ方向のヘラミガキ(幅2mm)。</li> <li>内面 ヨコ方向のヘラミガキ(5条/cm)。</li> <li>・ 黒斑。</li> </ul>	淡褐色	S	S	S	S		1	3	2	0	精良な胎土

24-68	溝 1	鉢	Ⅲ-A <sub>1</sub>	口径 8.6cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデおよび指頭による押圧。 内面 ヘラケズリを下から上へ行う。黒斑。 ・外面 指頭による押圧。 内面 指頭による押圧。黒斑。	淡褐色	M 1 S 2	M 1 S 2	S 2	S 2	S 1	S 1	0			精良な胎土	
24-69	溝 1	鉢	I-F <sub>1</sub>	口径 40.0cm (残存1/10からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (3条/cm)。 内面 ヨコ方向のヘラミガキ (3条/cm)。 炭化物付着。 ・外面 ヨコ方向のヘラミガキ (3条/cm)。 内面 ヨコ方向のハケ (14条/cm) 後、ヨコナデ後、ヘラミガキ (3条/cm)。 ・	暗褐色	① S 3	M 1 S 3	S 3	M 1 S 2	S 0	S 1					
24-70	溝 1	鉢	Ⅲ-A <sub>1</sub> or A <sub>2</sub>	口径 10.7cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコ方向後、タテ方向のヘラミガキ (3条/cm)。 内面 タテ方向のヘラミガキ (3条/cm)。 黒斑。 ・	淡褐色	M 1 S 3	M 1 S 3	S 3	S 2	S 0	S 1					
24-71	溝 1	鉢	Ⅲ-A <sub>2</sub>	口径 12.4cm (残存1/5からの回転復元) ・外面 ナナメ方向のハケ (12条/cm)。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ハケ (12条/cm)。 内面 右廻りのクモノス状ハケ (7条/cm)。 黒斑。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	暗褐色	M 1 S 3	M 1 S 3	S 3	S 1	S 2	S 0	S 0				

挿 お よ び 図 版 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法量と調整	・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色 調	胎						備 考
								石 英	石 長	角 閃	雲 母	チャ イト	赤 色 斑 粒	
24-72	溝 1	高 杯 (杯)	H	口径 18.8cm ・外面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ (幅2mm)を施す。 内面 タテ方向のヘラミガキ (5条/cm)。 ・外面 タテ方向のヘラミガキ (5条/cm)。 上部はヨコナデと指頭による押圧。 内面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ (幅2.5mm)を施す。 ・	淡褐色	① - S 2 ① - S 2 S - ⑤ 2 S - 1 S 2							搬入土器 (角閃石少なく、石 英・長石は大形で風 化の進んだものめだ つ。)	
24-73	溝 1	高 杯 (杯)	B <sub>s</sub>	口径 22.1cm (残存1/10からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 内面 タテ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 ・ ・	淡褐色	M - S 2 M - S 2 S 3 S 2							精良な胎土	
24-74 (図版16)	溝 1	高 杯 (杯)	H	・外面 タテ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 体部との境界のみヨコ方向のヘラミ ガキ (幅1.5mm)。 内面 タテ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 ・外面 タテ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 内面 タテ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 ・	淡赤褐色	M - S 3 M - S 3 S 3 S 2 M - S 3								
24-75	溝 1	高 杯 (脚台)	4-A-b	・ ・ ・外面 タテ方向のヘラミガキ (4条/cm)。 裾部と柱状部の境界にヨコ方向の短 いヘラミガキ (幅2.5mm)を施す。 内面 上部は指頭によるナメ方向のナデ。 下部はヨコナデ。	淡赤褐色	M - S 3 M - S 3 S 3 S 3 S 1 S 2								

24-76	溝 1	高 杯 (杯)	B <sub>5</sub>	口径 21.8cm (残存1/7からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ (幅2mm) を施す。 内面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ (5条/cm)。黒斑。 ・ ・	淡褐色	M - S 2 M - S 2	S S S S S S S	0 2 0 2		
24-77	溝 1	高 杯 (脚台)	4-A-b	・ ・ ・外面 タテ方向のハケ (10条/cm) 後、ヨコ方向ヘラミガキ (8条/cm)。黒斑。 内面 指頭によるタテ方向のナデ後、指頭による押圧。シボリメ残存。	赤褐色	M - S 2 M - S 2	S S S S S S S	0 2 0 2	精良な胎土	
24-78	溝 1	高 杯 (脚台)	4-A-b	裾口径 11.0cm (残存1/2からの回転復元) ・ ・ ・外面 脚柱部はタテ方向のヘラミガキ (5条/cm)。裾部はハケ (5条/cm) 後、ヘラミガキ (幅2mm)。両者の境界に径0.9cmの純成前外面穿孔のスカシ孔を4方に配する。黒斑。 内面 指頭によるタテ方向のナデ、または指頭による押圧。裾端部はヨコナデ。ハケが残る。黒斑。	淡褐色	M - S 3 M - S 3	S S S S S S S	0 2 0 2	搬入土器? (チャートやや多い)	
24-79	溝 1	高 杯 (杯)	E <sub>4</sub> or E <sub>3</sub>	口径 14.2cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ (4条/cm)。 内面 タテ方向のヘラミガキ (幅1mm)。 ・ ・	淡褐色	M - S 3 M - S 3	S S S S S S S	0 2 0 2		
24-80	溝 1	高 杯 (杯)	E <sub>4</sub> or E <sub>3</sub>	口径 12.8cm (残存1/7からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。ハケがかすかに残る。 内面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ (5条/cm)。黒斑。 ・ ・	暗茶褐色	M - S 3 M - S 3	S S S S S S S	0 2 0 2		

挿 お 図 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色 調	胎 土						備 考	
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ ート	赤 色 斑 粒		そ の 他
24-81	溝 1	高 杯 (杯)	E <sub>4</sub> or E <sub>5</sub>	口径 12.8cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 内面 ヨコ方向後、タテ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 ・ ・	淡赤褐色	S 3	S 3	S 3	S 2	0	3	S 3		
24-82	溝 1	高 杯	E <sub>4</sub> or E <sub>5</sub>	・外面 タテ方向のヘラミガキ (7条/cm)。 内面 タテ方向のヘラミガキ (7条/cm)。 ・外面 タテ方向のヘラミガキ (7条/cm)。 内面 タテ方向のヘラミガキ (7条/cm)。 ・外面 ヨコ方向のヘラミガキ (7条/cm)。 内面 ヨコナデ。	淡赤褐色	M 1 S 2	S 2	S 2	⑤ 1	0	1	S 1		精良な胎土
24-83	溝 1	高 杯 (脚台)	E <sub>4</sub>	裾部径 15.2cm (残存1/8からの回転復元) ・ ・ ・外面 ヨコ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 内面 右廻りのヘラケズリ後、上から下へのヘラケズリ。後、ヨコナデ。黒斑。	乳褐色	M 1 S 3	S 3	S 3	1	1	1	S 1		
24-84	溝 1	高 杯 (脚台)	E <sub>4</sub>	・ ・ ・外面 ヨコ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 内面 1.2cmのスカン孔を外面から4方に焼成前穿孔。 ヨコナデ。	淡赤褐色	M 1 S 3	S 3	S 3	3	0	2	M 1 S 2		脚台上半丹塗
24-85	溝 1	高 杯 (脚台)	E <sub>4</sub> or E <sub>5</sub>	裾部径 13.4cm (残存1/6からの回転復元) ・ ・ ・外面 タテ方向のヘラミガキ。摩滅著しい。 内面 上部は左廻りのクモノス状ハケ (9条/cm)。下部はヨコナデ。	乳白色	S 3	S 3	S 3	S 2	1	2	S 2		搬入土器 (角閃石少なく、チャー トや多い。乳白色 の胎土。)

24-86	溝 1	器台 (杯)	B <sub>3</sub> ?	口径 18.8cm (残存1/10からの回転復元) <ul style="list-style-type: none"> <li>外面 タテ方向のへらミガキ (8条/cm)。黒斑。</li> <li>内面 タテ方向のへらミガキ (8条/cm)。</li> <li>外面 タテ方向のへらミガキ (8条/cm)。</li> <li>内面 ヨコナデおよび不定方向のナデ。</li> </ul>	淡褐色	M   S 3 M   S 3	M   S 2 M   S 2	S   S 2 S   S 2	S	
24-87	溝 1	小形器台	C	<ul style="list-style-type: none"> <li>外面 ヨコナデ後、タテ方向のへらミガキか。剝離著しい。径0.8cmの円形スキャンを3方に外面から焼成前穿孔。ヨコナデ。</li> </ul>	淡褐色	M   S 3 M   S 3	M   S 2 M   S 2	S   S 2 S   S 2	0	0
24-88	溝 1	小形器台	C	<ul style="list-style-type: none"> <li>外面 タテ方向のハケ (9条/cm)、タテ方向のへらミガキ (4条/cm)。</li> <li>内面 径0.8cmの円形スキャンを3方に外面から焼成前穿孔。煤附着。</li> <li>内面 ヨコナデおよび指頭によるタテ方向のナデ。</li> </ul>	淡褐色	M   S 2 M   S 2	M   S 2 M   S 2	S   S 2 S   S 2	0	1
24-89	溝 1	小形丸底鉢	II-A <sub>1</sub>	口径 8.9cm (残存1/4からの回転復元) <ul style="list-style-type: none"> <li>外面 ヨコナデ。黒斑。</li> <li>内面 ヨコナデ。</li> <li>外面 ヨコナデ。黒斑。</li> <li>内面 クモノス状ハケ後、ヨコナデ。</li> </ul>	淡赤褐色	M   S 3 M   S 3	M   S 2 M   S 2	S   S 2 S   S 2	0	1
24-90	溝 1	小形丸底鉢	II?	口径 11.6cm (残存1/12からの回転復元) <ul style="list-style-type: none"> <li>外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のへらミガキ (幅2mm)。摩擦著しい。</li> <li>内面 ヨコナデ。</li> </ul>	灰褐色	M   S 2 M   S 2	M   S 2 M   S 2	S   S 2 S   S 2	1	1

第6表 W地区 溝2出土遺物観察表

挿 図 お よ び 図 版 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎						備 考	
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒	チャ ート		そ の 他
25-1 (図版17)	溝 2	2	短頸壺	T-B-a	<ul style="list-style-type: none"> <li>口頸部</li> <li>法量と調整</li> <li>・ 体部</li> <li>・ 底部 (脚台部)</li> </ul> 口径 16.2cm (残存1/6からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ _____ ・ _____	淡赤褐色	L-S 3	L-S 3	S S 3	S S 2	S S 0	S 2		
25-2	溝 2	2	短頸壺	T-B-a	<ul style="list-style-type: none"> <li>口頸部</li> <li>法量と調整</li> <li>・ 体部</li> <li>・ 底部 (脚台部)</li> </ul> 口径 15.4cm (残存2/3からの回転復元) ・ 外面 タテ方向のヘラミガキ (2条/cm)。 内面 タテ、ヨコ方向のヘラミガキ (2条/cm)。 頸部はヨコナデおよび指頭による押圧。 ・ _____ ・ _____	淡褐色	M-S 3	M-S 3	S S 3	S S 3	S S 1	S 2		口縁部内外面および外面に赤褐色土スリッブ。
25-3	溝 2	2	直口壺	C-C <sub>1</sub> -a	<ul style="list-style-type: none"> <li>口頸部</li> <li>法量と調整</li> <li>・ 体部</li> <li>・ 底部 (脚台部)</li> </ul> 口径 15.4cm (残存1/9からの回転復元) ・ 外面 ヨコハケ (10条/cm) 後、タテ方向のヘラミガキ (5条/cm)。 内面 ヨコナデ後、ヘラミガキ (幅1.5mm)。 ・ _____ ・ _____	淡褐色	M-S 3	M-S 3	M S 3	M S 2	S 0	S 2		
25-4	溝 2	2	壺	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>口頸部</li> <li>法量と調整</li> <li>・ 体部</li> <li>・ 底部 (脚台部)</li> </ul> 口径 16.8cm (残存1/8からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ後、ヨコ方向にヘラミガキ (幅2mm) を施す。 内面 ヨコナデ後、ヨコ方向にヘラミガキ (幅2mm) を施す。 ・ _____ ・ _____	淡褐色	M-S 3	M-S 3	S S 3	S S 2	S S 3	S 2		搬入土器 南関東系 (寺沢薫氏の御教示による)。 (チャート多い。)
25-5	溝 2	2	加飾 二重口縁 壺	㊟-C <sub>1</sub> -e	<ul style="list-style-type: none"> <li>口頸部</li> <li>法量と調整</li> <li>・ 体部</li> <li>・ 底部 (脚台部)</li> </ul> 口径 18.8cm (残存1/12からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。円形浮文を張り付けて、竹管文を施す。 内面 タテ方向ハケ (4条/cm) 後、ヨコナデ。 ・ _____ ・ _____	赤褐色	㊟-S 3	㊟-S 3	S S 3	S S 2	S S 0	S 2		

25-6	溝 2	加飾 二重口縁 壺	㊦-D-b	口径 23.0cm (残存1/18からの回転復元) ヨコナデ後、竹管文と櫛描波状文 (6条/cm)を施す。 内面 _____ ・ _____	淡褐色	L   S 3 L   S 3	S S 3 2 0 2	S	
25-7	溝 2	二重口縁 壺	N	頸部径 6.4cm ヨコナデおよび指頭による押圧。 ヨコナデ。 内面 タテ方向のヘラミガキ (2条/cm)。 内面 ヘラミガキ (2条/cm)。 ・ _____	淡褐色	M   S 3 M   S 3	S S 3 2 0 2	S	
25-8	溝 2	壺 (底部)	—	底部径 4.6cm ・ 外面 ヨコ方向のハケ (10条/cm) 後、タ テ方向のヘラミガキ (5条/cm)。 内面 ヨコナデ。黒斑。 ・ 外面 ヨコナデおよび指頭による押圧。 内面 クモノス状ハケ後、ヨコナデ。	淡褐色	M   S 3 M   S 3	S S 3 3 0 2	S	
25-9	溝 2	ミニチュ ア 壺 (底部)	—	底部径 3.0cm ・ 外面 ヨコナデおよび指頭によるタテ方向 のナデ。指頭による押圧。 内面 ヨコナデおよび指頭によるタテ方向 のナデ。 ・ 外面 タタキ (4条/cm) 後、ヨコナデ。 内面 指頭による押圧およびナデ。	淡褐色	L   M   S 3 L   S 3	S S 3 2 0 2	S	
25-10	溝 2	纏 布留形	・ -B- 5 h	口径 13.2cm (残存1/8からの回転復元) ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ 外面 タテ方向のハケ (9条/cm)。 内面 ヘラケズリ (工具は左から右)。 ・ _____	淡褐色	M   M   S 3 M   S 3	S S ㊦ S S 3 2 1 2	S S	

挿 お 図 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎					備 考	
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ ー ト		赤 色 斑 粒
25-11	溝	2	高 杯 (脚 台)	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口頸部</li> <li>・法量と調整</li> <li>・体部</li> <li>・底部 (脚台部)</li> </ul>	赤褐色	M	L	S	M	S	M	搬入土器 (角閃石少なく、赤 色斑粒多い。チャ ー トややめだつ。)
25-12	溝	2	小形丸底 鉢	I-A <sub>1</sub>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口径 16.4cm (残存1/10からの回転復元)</li> <li>・外面 ヨコナデ。</li> <li>・内面 ヨコナデ。</li> <li>・外面 ナナメ方向のヘラミガキ (10条/cm)。</li> <li>・内面 ヨコナデ。</li> </ul>	淡褐色	S	M	S	S	S	S	
25-13	溝	2	脚台状 土器	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口径 6.8cm (残存1/4からの回転復元)</li> <li>・外面 ヨコナデ。</li> <li>・内面 ヨコナデ。</li> <li>・外面 ヨコナデ。黒斑。</li> <li>・内面 指頭による押圧。</li> </ul>	淡褐色	M	S	S	S	S	S	

第7表 W地区 溝4出土遺物観察表

挿 お 図 版 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色 調	土						備 考	
							石 英	石 長	角 閃	雲 母	チャ ート	赤 色 斑 粒		そ の 他
26-1 (図版17)	溝 4	4	壺 (複合 口縁部)		突帯径 30.0cm (残存1/12からの回転復元) ・上半外面 ヨコナデ後、波状文(4条/cm)を施す。 内面 ヨコナデ。 下半外面 突帯張り付け後、ヨコナデ。突帯には1.1cm間隔で刻み目を施す。黒斑。 内面 指頭による押圧およびヨコナデ。 ・ ・	淡褐色	L S 4	L S 4	S 2	S 0	S 1	S 3		搬入土器 (北部九州地方からの搬入土器か? 寺沢薫氏のご教示による。) (角閃石、雲母少なく、赤色斑粒多い。)
26-2	溝 4	4	甕	・ - ・ - ・ a	口径 14.2cm (残存1/14からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。頸部はヨコナデおよび指頭による押圧。煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	淡褐色	M S 3	M S 3	S 3	S 0	M 2			
26-3	溝 4	4	甕 弥生形		底部径 5.0cm (残存1/2からの回転復元) ・ ・ ・外面 タタキ(3条/cm)を左廻りに施す。 内面 クモノス状ハケ後、ヨコナデ。黒斑。炭化物付着。	淡褐色	M S 3	M S 3	M S 3	S 0	S 0			
26-4	溝 4	4	鉢	I - F <sub>1</sub>	口径 28.4cm (残存1/5からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。黒斑。 ・外面 タテ方向のハケ(12条/cm)後、ヨコナデのハケ(12条/cm)。 内面 ヨコナデ。一部ハケ(12条/cm)残存。黒斑。 ・	乳褐色	M S 3	M S 3	S 3	S 2	S 2	① S 2	搬入土器 (角閃石少なく、チャートはややめだつ。赤色斑粒は多くないが大形のものがある。)	

挿 お よ び 図 版 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	色 調	胎 土						備 考			
								石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ ー ト	赤 色 斑 粒		そ 他		
26-5	溝	4	小形丸底 鉢	Ⅲ-B <sub>2</sub>	口径 14.2cm (残存1/5からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のへラミガキ (10条/cm)。 内面 ヨコナデ後、ヨコ方向のへラミガキ (7条/cm)。 ・外面 へラケズリ後、ヨコナデ。部分的にヨコ方向のへラミガキ (10条/cm)。 内面 ヨコナデ後、ヨコ方向のへラミガキ (10条/cm)。 ・外面 へラケズリ。 内面 ヨコナデ。		赤褐色	S	S	S	S	S	L	S	3		
26-6	溝	4	高杯 (脚台)	C <sub>3</sub> or C <sub>4</sub>	裾部径 17.0cm (残存1/14からの回転復元) ・外面 — 内面 ヨコナデ。 指頭による押圧およびヨコナデ。焼成前外面からの穿孔の、径0.7cmの円形スカシを4方に配す。		赤褐色	M	S	S	S	S	S	S	3	2	

第8表 W地区 土坑1出土遺物観察表

挿 お よ び 図 版 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎					備 考	
							石	長 角 閃 石	雲 母	チャ ート	赤 色 斑 粒		土 其 他
27-1 (図版18)	土坑1	短頸壺	T-A <sub>1</sub> -b	口径 14.4cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。黒斑。 内面 ヨコナデ。黒斑。 ・外面 剝離著しい。一部ハケ (10条/cm) を残す。黒斑。 内面 へラケズリを左廻りに施す。黒斑。 ・ ・	暗灰褐色	L S 3	L S 3	S 2	S 2	0	0	0	火熱を受け、外面の 荒れ著しい。
27-2	土坑1	甕 布留形	・-・- 5 e <sub>1</sub>	口径 10.8cm (残存1/5からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	淡赤褐色	S 3	S 3	S 2	S 0	2			
27-3	土坑1	甕 布留形	・-・- 5 g <sub>2</sub>	口径 12.4cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	淡褐色	M S 3	M S 3	S 2	S 0	2			
27-4	土坑1	甕 布留形	・-・- 5 g <sub>2</sub>	口径 13.6cm (残存1/10からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	淡褐色	M S 3	M S 3	S 2	S 0	2			
27-5	土坑1	甕 布留形	・-・- 5 e <sub>1</sub>	口径 12.2cm (残存1/6からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。ハケがかすかに残る。 ・ ・	暗茶褐色	S 3	S 3	S 2	S 0	0			

挿 お 図 版 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎						備 考
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒	チャ ート	
27-6	土坑1	甕 布留形	• - • - 5 f	口径 13.8cm (残存1/4からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。煤付着。 • 内面 ヨコナデ。 • _____ • _____	乳褐色	M - S 3	S 2 1 0 1	S S S S	S			搬入土器 (角閃石少なく、雲 母極めて少ない。)	
27-7	土坑1	甕 布留形	• - • - 5 g <sub>2</sub>	口径 13.0cm (残存1/6からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。ヨコ方向のハケ (10条/ cm) がかすかに残る。 • 内面 ヨコナデ。 • 外面 ヨコナデ。 • 内面 ヨコナデ。 • _____ • _____	淡褐色	M - S 3	S 3 3 1 1	S S S S	S				
27-8	土坑1	甕 布留形	• - • - 5 g <sub>2</sub>	口径 14.2cm (残存1/4からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。黒斑。煤付着。 • 内面 ヨコナデ。 • 外面 ヨコナデ。 • 内面 左廻りのへらケズリ (工具は左から 右)。 • _____ • _____	淡赤褐色	M - S 3	S 3 2 0 1	M S S S	S				
27-9	土坑1	甕 布留形	• - • - 5 h	口径 15.6cm (残存1/6からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。 • 内面 ヨコナデ。 • _____ • _____	乳褐色	L - S 3	S 1 1 1 2	M S S S	M - S 2				
27-10	土坑1	甕 布留形	• - • - 5 e <sub>1</sub>	口径 13.5cm (残存3/4からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。黒斑。 • 内面 ヨコナデ。 • _____ • _____	淡褐色	M - S 3	S 3 3 0 1	L S S S	S			火熱のため一部赤変。	

27-11	土坑1	甕 布留形	• -B- 5g <sub>2</sub>	口径 13.2cm (残存1/2からの回転復元) ヨコナデ。煤附着。 • 外面 内面 • 外面 ヨコ方向後、タテ方向のハケ (9条/cm) を施す。頸部付近ヨコナデ。煤附着。 内面 左廻りのヘラケズリ (幅1.9cm前後で、工具は左から右)。 炭化物附着。	淡褐色	M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3	M   S 2 M   S 0 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3	M   S 2 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3	搬入土器 紀伊製 (結晶片岩が目だつ。 赤色斑粒、チャート 多く、雲母はみられ ない。)	
27-12 (図版19)	土坑1	甕 布留形	I-B- 5h	復元完形 口径 15.2cm (残存4/5からの回転復元) 器高 21.2cm • 外面 内面 • 外面 内面 • 外面 内面 • 外面 内面 ヨコナデ。煤附着。 ヨコナデ。 タテ方向のハケ (9条/cm)。煤附着。 ヘラケズリ (幅不明)。炭化物附着。 タテ方向のハケ (9条/cm)。煤附着。 ヘラケズリ (幅不明)。炭化物附着。	乳褐色	M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3	M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3	M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3	結晶片 岩 ①-S 3	搬入土器 紀伊製 (結晶片岩が目だつ。 赤色斑粒、チャート 多く、雲母はみられ ない。)
27-13	土坑1	高杯 (脚台)	B <sub>4</sub> or B <sub>5</sub>	裾部径 11.6cm • _____ • _____ • 外面 内面 ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm) を 施す。黒斑。 柱状部は指頭によるタテ方向のナデ および押圧。シボリメ残存。ヨコナ デ。黒斑。	乳褐色	S 3 S 3 S 3 S 3 S 3 S 3	S 3 S 3 S 3 S 3 S 3 S 3	S 3 S 3 S 3 S 3 S 3 S 3	丹塗	
27-14	土坑1	高杯	B <sub>4</sub> or B <sub>5</sub> 4-A-c	• _____ • 外面 内面 • 外面 内面 • 外面 内面 左廻りのヘラケズリ (工具は左から 右) 後ヨコ方向のヘラミガキ (幅0. 8cm)。 ヨコナデ。黒斑。 柱状部は下から上にタテ方向のヘラ ケズリを面取り風に行った後、ヘラ ミガキ (幅0.8mm) を施す。 指頭による押圧。シボリメ残す。	赤褐色	M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3	M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3	M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3 M   S 3	搬入土器 (赤色斑粒大きめで 多く、チャートもや や多い。)	

挿 お よ び 版 号 番	遺 層	構 位	器 種	形 式	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色 調	胎						備 考
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ イト	赤 色 斑 粒	
27-15	土坑1	高杯	B <sub>4</sub> 4-A-c	口径 14.4cm (残存1/8からの回転復元) 裾部径 11.0cm (残存2/3からの回転復元) 器高 12.8cm ・外面 指頭による押圧およびヨココナデ後、ヨココ方向のヘラミガキ(8条/cm)。 内面 ヨココ方向のヘラミガキ(8条/cm)。 ・外面 ヨココ方向のヘラミガキ(8条/cm)。 内面 ヨココ方向のヘラミガキ(8条/cm)。 ・外面 面取り風にタテ方向のヘラケズリを行ってあるものとみられる。ヨココナデ後、ヨココ方向のヘラミガキ(8条/cm)。異斑。 内面 指頭による押圧。シボリメを残す。裾部はヨココナデ。	赤褐色	M   S 2	L   S 3	S 3 2 0	S S	M   S 3		搬入土器 (赤色斑粒大きめで多く、石英は小形が主体で少ない。)	
27-16	土坑1	高杯	B <sub>4</sub> or B <sub>5</sub> 4-A-c	・ _____ ・ _____ ・ 外面 面取り風にタテ方向のヘラケズリを行ってあるものとみられる。ヨココナデ後、ヨココ方向のヘラミガキ(幅1mm)を施す。 内面 ヨココナデ。シボリメ残存。	淡赤褐色	S 3 3	S 3 3 1	S S S	S S	S S			
27-17	土坑1	高杯	E <sub>3</sub> or E <sub>4</sub> 3-B-c	・ _____ ・ _____ ・ 外面 ヨココナデ。 内面 ヨココナデ。 柱状部と裾部の境界付近に径1.0cmの円形スカシを4方に配す。	淡赤褐色	L   S 4	M   S 4	S S 2	S S 2	L   S 3	S S 3	搬入土器 (赤色斑粒、チャート多く、角閃石少ない。)	

28-18	土坑1	小形丸底鉢 (口縁)	II-B <sub>1</sub> or II-C <sub>1</sub>	口径 11.2cm (残存1/7からの回転復元) ・外面 ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm)。黒斑。 ・内面 ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm)。 ・	淡褐色	M L S S 3 3 3 3 3 3 3 3	S S S S 2 2 2 2 2 2 2 2	S S S S S S S S S S S S	器面摩滅著しい。
28-19	土坑1	小形丸底鉢	III-B <sub>2</sub>	口径 13.0cm (残存1/2からの回転復元) 器高 4.5cm ・外面 ヨコナデ。黒斑。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデおよび指頭による押圧。かすかにへらミガキ (幅1mm) 残存。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデおよび指頭による押圧。 内面 ヨコナデ。	淡褐色	S S S S S S S S 2 2 2 2 2 2	S S S S S S S S S S S S	S S S S S S S S S S S S	搬入土器 (石英小さく少ない。 チャートややめだつ)
28-20	土坑1	小形丸底鉢	III-B <sub>2</sub>	口径 13.6cm (残存2/5からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後ヨコ方向のへらミガキ (幅0.7mm)。黒斑。 内面 ヨコナデ後ヨコ方向のへらミガキ (幅0.7mm)。黒斑。 ・外面 ヨコ方向のへらミガキ (14条/cm)。 内面 ヨコ方向のへらミガキ (14条/cm)。 黒斑。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコ方向のへらミガキ (幅0.7mm)。 黒斑。	淡褐色	S S S S S S S S 3 3 3 3 3 3	S S S S S S S S S S S S	S S S S S S S S S S S S	
28-21	土坑1	小形器台	C <sub>3</sub>	口径 10.2cm (残存1/7からの回転復元) ・外面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。 内面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。 ・外面 ヨコナデおよび指頭による押圧。 内面 左廻りのクモノス状ハケ、口縁部と体部の境界に、焼成前外面からの円形 (径0.3cm) の穿孔を1箇所確認できる。	乳褐色	S S S S S S S S 3 3 3 3 3 3	S S S S S S S S S S S S	S S S S S S S S S S S S	

挿 お よ び 図 版 号	遺 構 層	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎					備 考	
						石 英	石 長	角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒		其 他
28-22	土坑1	小形器台	C <sub>3</sub> or C <sub>4</sub>	<ul style="list-style-type: none"> <li>口頸部</li> <li>体部</li> <li>底部（脚台部）</li> </ul> 法量と調整 裾部径 10.8cm（残存1/7からの回転復元） <ul style="list-style-type: none"> <li>外面 ヨコ方向のハケ（10条/cm）後、ヨコナデ。</li> <li>内面 ヨコ方向のハケ（7条/cm）後、ヨコナデ。径0.9cmの円形スカシを外 面から焼成前穿孔。配置不明。</li> </ul>	淡黄褐色	M	M	S	S	S	S	
28-23	土坑1	小形器台	C <sub>3</sub> or C <sub>4</sub>	裾部径 11.4cm（残存5/6からの回転復元） <ul style="list-style-type: none"> <li>上半外面 ヨコ方向のヘラミガキ（8条/cm）。</li> <li>内面 左上がりナナメ方向のハケ（5条/cm） 後、ヨコハケ（9条/cm）後、ヨコナデ。</li> <li>下半外面 ヨコ方向のヘラミガキ（8条/cm）。</li> <li>内面 左上がりナナメ方向のハケ（5条/cm） 後、ヨコナデ。</li> </ul>	淡赤褐色	S	S	S	S	M	S	

第9表 W地区 土坑2 出土遺物観察表

挿 お 図 図 版 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色 調	胎						備 考	
								石 英	石 長	角 閃 石	雲 母	チャ ート	赤 色 斑 粒		土 其 他
29-1 (図版20)	土坑2		甕 布留形	I-B- 5 n b <sub>2</sub>	口径 13.6cm (残存2/3からの回転復元) ・外面 内面 ヨコナデ。黒斑。 ・外面 タテ方向後ヨコ方向のハケ(9条/ cm)。黒斑。 内面 原則左廻りのへラケズリ。 ・外面 タテ方向のハケ(9条/cm)。黒斑。 煤付着。 内面 指頭による押圧またはナデ後、へラ ケズリ。		灰褐色	M   S 3	M   S 3	S 3	S 2	S 1	S 1		火熱のため外面赤色 に変色。
29-2	土坑2		甕 布留形	I-B- 5 g <sub>2</sub>	口径 13.6cm (残存1/2からの回転復元) ・外面 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ナナメ方向のハケ(12条/cm)。煤付 着。 指頭による押圧後、原則左廻りのへ ラケズリ。 ・外面 ナナメ方向のハケ(12条/cm)。煤付 着。 内面 指頭による押圧後、へラケズリ。		淡褐色	M   S 3	L   S 3	S 3	S 2	S 0	S 0		
29-3	土坑2		甕 布留形	・- 5 g <sub>3</sub>	口径 16.1cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 内面 ヨコナデ。煤付着。 ・外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 左廻りのへラケズリ(工具は左から 右)。		淡褐色	M   S 3	M   S 3	S 2	S 2	S 3	S 0		搬入土器 (角閃石・雲母少な く、チャート多い。)

挿 および 図 版 番 号	遺 層 位	構 位	器 種	形 式	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	色 調	胎 土					備 考
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒 チャ ート	
29-4	土坑2	高杯 (杯)	B <sub>6</sub>	口径 15.4cm ・外面 内面 ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm)。 ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm)。 煤付着。 ・外面 内面 ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm)。 ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm)。 煤付着。 ・	淡赤褐色	M - S 2	S 2	S 2	S 2	S 2	L - S 3	搬入土器 (角閃石・雲母少な く、チャート比較的 多い。赤色斑粒は大 形が多い。)
29-5	土坑2	高杯 (杯)	B <sub>4</sub>	口径 13.9cm (残存3/4からの回転復元) ・外面 内面 ヨコ方向のへらミガキ (7条/cm)。 黒斑。 ヨコ方向のへらミガキ (7条/cm)。 黒斑。 ・外面 内面 ヨコ方向のへらミガキ (7条/cm)。 ヨコ方向のへらミガキ (7条/cm)。 黒斑。 ・	淡赤褐色	S 3	S 3	S 2	S 3	S 3	S 3	丹塗 搬入土器 (角閃石やや少なく チャートやや多い。 赤色斑粒多い。)
29-6	土坑2	高杯 (杯)		口径 18.0cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 内面 ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm)。 黒斑。 ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm)。 黒斑。 ・ ・	淡赤褐色	M - S 3	M - S 3	S 3	S 3	S 3	S 0 2	



挿 お 図 番	図 お よ び 版 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	色 調	胎 土					備 考		
									石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒		チ ャ ー ト	そ の 他
29-11		土坑2	小型丸底鉢 (口縁)			口径 10.8cm (残存1/6からの回転復元) ・外面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。 黒斑。 内面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。 黒斑。 ・ _____ ・ _____			M   S 3	M   S 3	S 3	S 3	S 0	S 2		

第10表 W地区 W-1トレンチ⑦層出土遺物観察表

挿 図 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎					備 考
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒	
30-1 (図版21)	W-1 トレンチ ⑦層		短頸壺	T-B <sub>1</sub> -C	口径 14.5cm (残存1/6からの回転復元) ・外面 ヨコナデおよび指頭による押圧後、 ヨコ方向のヘラミガキ (幅3mm)。 黒斑。 内面 ヨコ方向のヘラミガキ (4条/cm)、 頸部は指頭によるタテ方向のナデ。 ・ ・	暗褐色	L S 3	M S 3	S S 3	0 0 0	0 0 0	弥生V様式 短頸壺
30-2	W-1 トレンチ ⑦層		短頸壺	T-A <sub>2</sub> -a	口径 13.0cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 タテ方向のヘラミガキ (3条/cm)。 内面 タテ方向後、頸部のみヨコ方向のヘ ラミガキ (4条/cm)。 ・ ・	淡褐色	M S 3	M S 3	S S 3	0 2 0	2 0 2	
30-3	W-1 トレンチ ⑦層		短頸壺	T-A <sub>2</sub> -b	口径 13.4cm (残存1/2からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 内面 左廻りのヘラケズリ (工具は左から 右)。 ・	乳褐色	L S 3	L S 3	S S 3	1 1 1	1 1 1	搬入土器 (角閃石が少なく、 雲母も極めて少ない)
30-4	W-1 トレンチ ⑦層		短頸壺	T-A <sub>2</sub> -b	口径 13.4cm (残存1/3からの回転復元) ・外面 ナナメ後、ヨコ方向のヘラミガキ (2条/cm)。 内面 不定方向のヘラミガキ (3条/cm)。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・	淡赤褐色	L S 3	L S 3	S S 3	0 1 0	1 0 1	
30-5	W-1 トレンチ ⑦層		甕 布留形	・- ・- ・e <sub>1</sub>	口径 17.1cm (残存1/7からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 左廻りのヘラケズリ。 ・	淡褐色	M S 3	M S 3	S S 3	0 2 0	2 0 2	

挿 お 図 番	図 よ び 版 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色 調	胎						備 考	
								石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ ート	赤 色 斑 粒		其 他
30-6		W-1 トレンチ ⑦		甕 内 大 和 形	・-・- ・h	口径 15.6cm (残存1/3からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。黒斑。 内面 ヨコナデおよび指頭による押圧。黒 斑。 ・外面 左廻りのハケ(5条/cm) 内面 右廻りのヘラケズリ(工具は右から 左)。 ・	淡褐色	M-S 3	M-S 3	S 3	S 3	S 0	S 2		
30-7		W-1 トレンチ ⑦		甕 布 留 形?	・-・- ・a	口径 12.8cm (残存1/6からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。黒斑。 内面 ヨコナデ、わずかにハケ残る。 ・外面 ヨコナデ。黒斑。 内面 左廻りのヘラケズリ(工具は左から 右)。 ・	淡褐色	M-S 3	M-S 3	S 3	S 3	S 0	S 0		
30-8		W-1 トレンチ ⑦		甕 布 留 形	・-・- 5nb <sub>1</sub>	口径 13.8cm (残存1/6からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。指頭による押圧。黒斑。 内面 ヨコナデ。 ・外面 タテ方向のハケ(4条/cm)。 内面 左廻りのヘラケズリ(工具は左から 右)。 ・	淡褐色	M-S 3	M-S 3	S 3	S 2	S 0	S 0		
30-9		W-1 トレンチ ⑦		甕 S 字 口 縁 (B 類)		口径 13.8cm (残存1/14からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。貝殻条線ハケ(5条/cm) 残存。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	乳褐色	M-S 3	M-S 2	S 2	S 2	S 2	S 0		搬入土器 伊勢湾岸系 (角閃石少ないが、 チャートもさほど多 いとはいえない。長 石少ない。)

30-10	W-1 トレンチ ⑦ 層	甕 S字口縁 (B類)		口径 17.4cm (残存1/8からの回転復元) ヨコナデ。黒斑。 ・外面 ヨコナデ。 ・外面 ナナメ方向の貝殻条線ハケ (5条/ cm) 後、ヨコ方向に約3mm毎に幅1. 5mmの擬凹線を施す。 ・	乳白色	M - S 3 S 2 S 2 S 2 S 2 S 2 M - S 1	搬入土器 伊勢湾岸系 (角閃石少ないが、 チャートも多いとは いえない。長石少な い。)
30-11	W-1 トレンチ ⑦ 層	甕 単純口縁	・ - - 5 b	口径 16.8cm (残存1/4からの回転復元) 指頭によるナナメ方向のナデおよび ヨコナデ。黒斑。 ヨコナデ。 ・外面 ナナメ方向の貝殻条線ハケ (4条/ cm)。 内面 ヨコナデおよび不定方向のナデ。 ・	乳褐色	M - S 3 S 2 S 2 S 2 S 2 S 2 M - S 1	搬入土器 伊勢湾岸系 (角閃石少ないが、 チャートも多いとは いえない。長石少な い。) 口縁端部は面取り (b口縁)を意識す るがあまり、a口縁 に近い。
30-12	W-1 トレンチ ⑦ 層	甕 有段口縁		・外面 ヨコナデ後、擬凹線 (4条/cm) を 施す。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	淡褐色	M - S 3 S 2 S 2 S 2 S 2 S 2 S 2	搬入土器 北陸系 (角閃石、雲母少な い。チャートはやや 多い。)
30-13	W-1 トレンチ ⑦ 層	甕 弥生形	・ - - ・ a	口径 12.9cm (残存1/6からの回転復元) ヨコナデおよび指頭による押圧。 ヨコナデ。 ・外面 右上がりタタキ (3条/cm) を上か ら下へ右廻りに施す。 内面 ヨコナデ。 ・	淡赤褐色	M - S 3 S 3 S 3 S 2 S 2 S 2 S 0 1	
30-14	W-1 トレンチ ⑦ 層	甕 弥生形	・ - - ・ a	口径 15.0cm (残存1/4からの回転復元) 指頭による押圧後、ヨコナデ。煤付 着。 内面 ヨコナデ。 ・外面 右廻りのタタキ (3条/cm)。煤付着。 内面 ヨコナデおよび指頭による押圧。 ・	黄褐色	L - S 3 S 3 S 3 S 3 S 3 S 3 M - S 3	

挿 お お 図 番 号	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎 土						備 考		
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒	其 他			
30-15	W-1 トレンチ ⑦ 層		甕	・ - ・ - ・ b	口径 22.0cm (残存1/6からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。指頭による押圧。煤付着。 ・ 内面 ヨコナデ。 ・ _____	淡褐色	L - S 3	M - S 3	S 3	S 2 1 2	S S	S S	S S		
31-16	W-1 トレンチ ⑦ 層		甕 布留式影 響弥生形	I-A- 1 h	口径 15.2cm ・ 外面 指頭による押圧後、ヨコナデ。煤付着。 ・ 内面 ヨコ方向の右廻り板ナデ後、ヨコナデ。 ・ 外面 上半はタテ方向タタキ (3条/cm) 後、 後、タテ方向ハケ (12条/cm) 後、 ヨコナデ。 下半はヨコ方向タタキ (5条/cm) 後、 ヨコナデ。ともに煤付着。 ・ 内面 右下がりの板ナデ後、ヨコナデ。炭 化物付着。 ・ _____	(上半) 黄褐色 (下半) 灰褐色	M - S 3	M - S 3	S 3	S 2 2	S S	S S	M - S 3		搬入土器 (赤色斑粒大きめで 多く、チャートもや や多い。)
31-17	W-1 トレンチ ⑦ 層		鉢	III-F <sub>i</sub>	口径 10.6cm (残存1/5からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。 ・ 内面 ヨコ方向のヘラミガキ (4条/cm)。 ・ 外面 タテ方向後、ヨコ方向のヘラミガキ (4条/cm)。 ・ 内面 タテ方向のヘラミガキ (4条/cm)。 ・ _____	淡赤褐色	L - S 3	L - S 3	S 3	S 3	S 2 1 2	S S	S S	S S	弥生時代後期

31-18 (図版22)	W-1 トレンチ ⑦層	鉢	I-F:	口径 29.0cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ナナメ方向のハケ (5条/cm) 後、 ヨコナデ。黒斑。 ・外面 ナナメ右下がりのハケ (4条/cm) 後、ヨコ方向のヘラミガキ (3条/ cm)。黒斑。 内面 ヨコナデおよび指頭による押圧後、 ヨコ方向のヘラミガキ (3条/cm) を施す。黒斑。	淡褐色	M   S 3 M   S 3 S S 3 S S 3 S S 1 S S 1			
31-19	W-1 トレンチ ⑦層	甕 弥生形		底部径 3.0cm ・ _____ ・ _____ ・ 外面 底部不定方向のナデ、体部に移行す るに従い、左廻りのタタキ (2条/ cm)。黒斑。 内面 一部ハケ (5条/cm) 残存。不定方 向のナデ後に、葉状の物があつた 痕跡。	淡褐色	M   S 3 M   S 3 S S 3 S S 2 S S 0 S S 1			
31-20	W-1 トレンチ ⑦層	ミニチュ ア壺		底部径 3.0cm ・ _____ ・ _____ ・ 外面 ヨコナデおよびナナメ方向のナデ。 内面 ハケ (7条/cm) 後、ヨコナデ。	淡褐色	M   S 3 M   S 3 S S 3 S S 2 S S 2 S S 1			
31-21	W-1 トレンチ ⑦層	甕 弥生形		底部径 5.3cm ・ _____ ・ _____ ・ 外面 底部不定方向のナデ、体部に移行す ると、タテ方向のハケ (5条/cm)。 黒斑。 内面 指頭による押圧後、ヨコナデ。	淡褐色	L   S 3 L   S 3 S S 3 S S 2 S S 0 S S 2			外面は火熱により赤 変。 弥生中期か。

挿 お よ び 図 版 号	遺 構 層 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎				備 考
						石 長	角 閃	雲 母	赤 色 斑 粒	
31-22	W-1 トレンチ ① 層	小形丸底 鉢	II-C <sub>1</sub>	<ul style="list-style-type: none"> <li>口頸部</li> <li>・口頸部</li> <li>・体部</li> <li>・底部 (脚台部)</li> </ul> 口径 11.6cm (残存3/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のへらミガキ (幅0.8mm) を施す。 内面 ヨコ方向のへらミガキ (12条/cm)。 ・外面 ヨコナデ。 内面 不定方向のナデ、上部はヨコ方向のへらミガキ (12条/cm)。 ・	淡赤褐色	M-S	S	S	S	
31-23	W-1 トレンチ ① 層	小形丸底 鉢	III-B <sub>2</sub>	口径 12.6cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコ方向のへらミガキ (4条/cm)。 内面 ヨコ方向のへらミガキ (4条/cm)。 ・	淡赤褐色	L-S	S	S	M	
31-24	W-1 トレンチ ① 層	高杯 (杯)	B <sub>4</sub>	口径 17.4cm (残存1/3からの回転復元) ・外面 左上がりのハケ (12条/cm) 後、ヨコナデ後、ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。黒斑。 内面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm) 後、タテ方向のへらミガキ (幅1mm) を暗文風に施す。 ・外面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。 内面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm) 後、タテ方向のへらミガキ (幅1mm) を暗文風に施す。 ・	赤褐色	M-S	S	S	S	

31-25	W-1 トレんチ ⑦ 層	高 杯 (脚台)	B <sub>4</sub> or B <sub>5</sub>	<p>裾部径 12.8cm (残存1/6からの回転復元)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ _____</li> <li>・ _____</li> <li>・ 外面 柱状部 タテ方向のへらミガキ (4条/cm) 後、ヨコ方向のへらミガキ (6条/cm)</li> <li>・ 裾部 タテ方向のハケ (8条/cm) 後、ヨコ方向のへらミガキ (幅1.5mm) を施す。</li> </ul> <p>焼成前内面からの穿孔の径0.9cmの円形スカンを4方に配す。</p> <p>内面 柱状部 ヨコ方向のハケ (8条/cm) 後、ヨコナデ。 裾部 ヨコナデおよび指頭による押圧。</p>	乳褐色	S S S S S 3 3 3 2 0 1				丹塗
31-26	W-1 トレんチ ⑦ 層	高 杯 (脚台)	B <sub>4</sub> or B <sub>5</sub>	<p>裾部径 13.2cm (残存1/4からの回転復元)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ _____</li> <li>・ 外面 タテ方向のハケ (7条/cm) 後、ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm) を施す。焼成前外面穿孔の径0.8cmのスカンあり。黒斑。</li> </ul> <p>内面 ヨコナデ。黒斑。</p>	赤褐色	S S S S M 2 3 3 2 2 3				搬入土器 (赤色斑粒大きめで多く、チャートや多い。石英少ない。)
31-27	W-1 トレんチ ⑦ 層	高 杯 (脚台)	B <sub>4</sub> or B <sub>5</sub>	<p>裾部径 12.3cm (残存2/3からの回転復元)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ _____</li> <li>・ 外面 タテ方向のへらミガキ (5条/cm)。</li> </ul> <p>焼成前外面穿孔の径0.8cmの円形スカンを3方に配す。黒斑。</p> <p>内面 ヨコナデ。黒斑。</p>	淡褐色	L L S S S L S S 3 2 0 2				
31-28	W-1 トレんチ ⑦ 層	加飾器台 (脚台)		<p>裾部径 19.6cm (残存1/9からの回転復元)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ _____</li> <li>・ 外面 ヨコ方向のへらミガキ (6条/cm) 後、タテ方向のへらミガキ (幅1.5mm) を施す。裾端部はヨコナデ。</li> </ul> <p>内面 ヨコナデ、一部指頭による押圧。</p>	淡褐色	M M S M S M S S 3 3 0 2				丹塗

挿 お よ び 図 版 号	遺 構 層	器 種	形 式	法 量 と 調 整	・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色 調	胎 土						備 考
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ イト	赤 斑 粒	
31-29	W-1 トレンチ ⑦	小型器台	・-C <sub>3</sub>	口径 9.4cm (残存1/4からの回転復元) ヨコナデ後、ヨコ方向にへらミガキ (幅1mm)を施す。 内面 ヨコナデ後、へらミガキ(幅1mm) を暗文風に施す。 ・ ・		淡赤褐色	S	S	S	S	S	S	精良な胎土
31-30	W-1 トレンチ ⑦	裝飾器台 (北陸系)		器台状部径 13.4cm (残存3/5からの回転復元) ヨコナデ後、焼成前外面から切り込 んだ涙滴形スカシを、上下交互に計 8方に配す。 内面 右廻りヨコ方向ハケ後、ヨコナデ後、 ヨコ方向へらミガキ(4条/cm)。 ・外 面 ヨコナデ後、10条の擬凹線(5条/ cm)。 内 面 ヨコナデ。 ・		淡赤褐色	M   S 2	M   S 3	S	S	S	S	搬入土器 北陸系 (石英は小形が主体 で少なく、角閃石多 い。粘土素地は粘性 を帯び平滑である。)

第11表 W地区各包含層出土遺物観察表

挿 お 図 番 号	遺 層 位	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎						備 考	
							石	長	角	雲	チャ	赤		土
32-1 (図版23)	鍵層 (第13区 VII層)	二重口縁 壺	㊸-A <sub>1</sub>	頸部径 8.8cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 タテ方向のへらミガキ (5条/cm)。 黒斑。 内面 タテ方向のへらミガキ (5条/cm)。 黒斑。 ・外面 頸部は突帯をはり付け、ヨコナデの 後、へら状工具で刺突文を施す。 内面 ヨコナデ。 ・	淡褐色	M	L	S	S	S				搬入土器 (角閃石少なく、チャー トやや多い。)
32-2	鍵層 (第13区 VII層)	甕 布留形	・-・- 5 e <sub>1</sub>	口径 15.0cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 タテ方向のハケ (9条/cm) 後、ヨ コナデ。煤付着。 内面 左廻りのへらケズリ (工具は左から 右)。 ・	灰褐色	L	M	S	S	S				搬入土器 (角閃石少なく、チャー トやや多い。)
32-3	鍵層 (第13区 VII層)	甕 布留形	・-・- 5 e <sub>1</sub>	口径 16.4cm (残存1/10からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 タテ方向のハケ (9条/cm)。煤付着。 内面 左廻りのへらケズリ (工具は左から 右)。 ・	淡赤褐色	L	L	S	S	S				
32-4	鍵層 (第13区 VII層)	甕 布留形	・-・- 5 g <sub>2</sub>	口径 14.0cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・	淡褐色	M	L	S	S	S				

挿図番号	遺層	構位	器種	形式	法量と調整	色調	胎土						備考	
							石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒		その他
32-5	鍵層 (第13区 VII層)		甕 布留形	• - • - 5 g <sub>2</sub>	口径 16.0cm (残存1/8からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。 • 内面 ヨコナデ。 • 外面 ヨコナデ。 • 内面 へラケズリ (工具は左から右)。 •	淡褐色	M S	M S	S 3	S 2	0 0	0 0		
32-6	鍵層 (第13区 VII層)		甕 布留形	• - • - 5 g <sub>2</sub>	口径 13.2cm (残存1/8からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。黒斑。 • 内面 ヨコナデ。 • 外面 タチ方向のハケ (6条/cm) 後、ヨコ方向、またはナメ方向のハケ (6条/cm) を施す。黒斑。 • 内面 左廻りのへラケズリ (工具は左から右)。 •	淡褐色	L S	L S	S 3	S 2	1 1	0 0		
32-7	鍵層 (第13区 VII層)		甕 布留形	• - • - 5 g <sub>2</sub>	口径 13.2cm (残存1/7からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。煤付着。 • 内面 ヨコナデ。 •	淡褐色	M S	M S	S 3	S 1	2 2	0 0		搬入土器 (石英少なく、チャー トやや多い。)
32-8	鍵層 (第13区 VII層)		甕 布留形	• - • - 5 nb <sub>1</sub>	口径 15.0cm (残存1/8からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。煤付着。 • 内面 ヨコナデ。 •	淡褐色	M S	M S	S 3	S 2	0 0	0 0		
32-9	鍵層 (第13区 VII層)		甕 布留形	• - • - 5 nb <sub>1</sub>	口径 13.8cm (残存1/10からの回転復元) • 外面 ヨコナデ。 • 内面 ヨコナデ。炭化物付着。 •	淡褐色	M S	M S	S 3	S 2	0 0	0 0		

32-10	鍵層 (第13区 VII層)	鑿 布留形	・-・- 5 nb <sub>1</sub>	口径 12.2cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。炭化物付着。 ・内面 ヨコナデ。 ・ _____ ・ _____	淡褐色	M - S 3 M - S 3 S 3 S 2 S 0 S 0			
32-11	鍵層 (第13区 VII層)	鑿 布留形	・-・- 5 nb <sub>1</sub>	口径 14.4cm (残存1/6からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヘラケズリ (工具は左から右)。 ・ _____	淡赤褐色	M - S 3 M - S 3 S 3 S 2 S 0 S 0			
32-12	鍵層 (第13区 VII層)	鑿 布留形	・-・- 5 nb <sub>1</sub>	口径 15.4cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコ方向のハケ (5条/cm)。 ・内面 ヘラケズリ後、ヨコナデ。 ・ _____	淡褐色	M - S 3 L - S 3 S 3 S 2 S 0 S 0			
32-13	鍵層 (第13区 VII層)	鑿 布留形	・-・- 5 nb <sub>1</sub>	口径 12.4cm (残存1/16からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。煤付着。 ・内面 左廻りのヘラケズリ (工具は左から右)。 ・ _____	淡褐色	M - S 3 M - S 3 S 3 S 2 S 0 S 0			
32-14	鍵層 (第13区 VII層)	鑿 布留形	・-・- 5 nb <sub>2</sub>	口径 19.0cm (残存1/20からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・ _____ ・ _____	淡黄褐色	L - S 3 L - S 3 S 3 S 2 S 0 S 2			
32-15	鍵層 (第13区 VII層)	鑿 布留形	・-・- 5 nb <sub>2</sub>	口径 13.6cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 ・内面 ヨコナデ。 ・ _____ ・ _____	乳褐色	L - S 3 L - S 3 M - S 3 S 2 S 0 S 0			

挿 お お 図 図 番 号	遺 層 位	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎 土							備 考	
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒	チャ ート	赤 色 斑 粒		そ の 他
32-16	鍵層 (第13図 VII層)		甕		<ul style="list-style-type: none"> <li>・口頸部</li> <li>・体部</li> <li>・底部(脚台部)</li> </ul> 口径 11.0cm (残存1/6からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコハケ後、ヨコナデ。 内面 左廻りのへらケズリ(工具は左から右)。	淡赤褐色	L	L	S	S	S	S	L	S	酒津型甕 (在地産) 口唇部内面肥厚。
32-17	鍵層 (第13図 VII層)		高杯	B <sub>6</sub>	口径 14.3cm (この部分ほぼ完形) ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向へラミガキ(幅1mm)を施す。煤付着。 内面 ヨコ方向のへらミガキ(幅1mm)を施す。 ・外面 ヨコ方向のへらミガキ(幅1mm)を施す。 内面 ヨコ方向のへらミガキ(幅1mm)を施す。	淡赤褐色	M	M	S	S	S	S	M	S	
32-18 (図版24)	鍵層 (第13図 VII層)		高杯	E <sub>4</sub>	裾部径 20.0cm (残存1/4からの回転復元) ・ ・ ・外面 タテ方向のハケ(5条/cm)後、ヨコナデ後、タテ方向のへらミガキ(3条/cm)。径0.9cmの円形スカシを4方に配す。 内面 ヨコハケ(5条/cm)後、ヨコナデ。黒斑。	赤褐色	①	①	S	S	S	S	S	S	輸入土器 鴨都波遺跡? (石英・長石・雲母 大きく、チャートや や多い。)

32-19	鍵層 (第13図 VII層)	高杯	B <sub>6</sub>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外面 ヨコ方向のへらミガキ (9条/cm)。黒斑。</li> <li>内面 ヨコ方向のへらミガキ (9条/cm)。</li> <li>外面 ヨコ方向のへらミガキ (9条/cm)。</li> <li>内面 ヨコ方向のへらミガキ (9条/cm)。</li> <li>外面 ヨコ方向のへらミガキ (9条/cm)。</li> <li>内面 指頭によるタテ方向のナデ。シボリメ残す。</li> </ul>	赤褐色	M - S 3	L - S 3	S S 3	S S 2	S S 0	S 2		
32-20	鍵層 (第13図 VII層)	小形丸底 鉢	II - B <sub>1</sub>	頸部径 6.6cm <ul style="list-style-type: none"> <li>外面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。</li> <li>内面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。</li> <li>外面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。</li> <li>内面 下半部は左廻りのへらケズリ後、ヨコナデ後、ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm)。</li> <li>内面 ナナメ方向後、ヨコ方向のハケ (12条/cm) 後、ヨコナデ。</li> <li>外面 左廻りのへらケズリ後、ヨコ方向のへらミガキ (幅1mm)。</li> <li>内面 右廻りのクモノス状ハケ後、ヨコナデ。</li> </ul>	淡赤褐色	S S 2	S S 2	S S 2	S S 2	S 0	S 2		精良な胎土
32-21	鍵層 (第13図 VII層)	小形丸底 鉢	I - A <sub>1</sub>	頸部径 11.2cm (残存1/7からの回転復元) <ul style="list-style-type: none"> <li>外面 ヨコナデ。</li> <li>内面 ヨコナデ。</li> <li>外面 ヨコ方向のハケ後、ヨコナデ。黒斑。</li> <li>内面 ナナメ方向のハケ後、ヨコナデ。</li> <li>外面 ヨコナデ。</li> <li>内面 ヨコナデ。</li> </ul>	淡褐色	L - S 3	L S 3	S S	S S	S 0	S 0		
32-22	鍵層 (第13図 VII層)	小形丸底 鉢	III - B <sub>2</sub>	口径 12.8cm (残存1/6からの回転復元) <ul style="list-style-type: none"> <li>外面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。</li> <li>内面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。</li> <li>外面 ヨコ方向のへらミガキ (10条/cm)。</li> <li>内面 ヨコ方向のへらミガキ (7条/cm)。</li> </ul>	赤褐色	M - S 3	M - S 3	S S 3	S S 2	S S 0	M - S 2		

挿 お 図 番	遺 層	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	胎 土					備 考
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チャ ー ト	
32-23	鍵層 (第13図 VII層)	小形丸底 鉢	II-A <sub>1</sub>	口径 13.2cm ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコ後、左上がりのナナメ方向のハ ケ(9条/cm)後、ヨコナデ。黒斑。 煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・	淡褐色	M-S 3	S 2	S 2	S 2	S 0	0	搬入土器 (長石小さく少ない。 角閃石やや少ない。)
32-24	W-1 トレンチ (第14図 4層)	甕 布留形	・-・- 5 e <sub>1</sub>	口径 13.2cm (残存1/5からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 内面 ヨコナデ。 ・外面 タテ方向のハケ(12条/cm)。煤付着。 内面 ヘラケズリ(工具は左から右)後、 一部ヨコ方向のハケ(12条/cm)。 ・	淡褐色	M-S 3	S 3	S 2	S 2	S 1	1	搬入土器 (チャートややめだ つ。バサついた感じ の胎土。)
32-25	W-1 トレンチ (第14図 5層)	甕 布留形	・-・- 5 n b <sub>1</sub>	口径 15.2cm (残存1/7からの回転復元) ・外面 タテ方向のハケ(6条/cm)後、ヨ コナデ。煤付着。 内面 右下がりのナナメ方向のハケ(6条 /cm)後、ヨコナデ。 ・ ・	淡褐色	M-S 3	S 3	S 2	S 0	0	0	
32-26	W-1 トレンチ (第14図 3層)	甕		口径 15.2cm (残存1/9からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、櫛描刺突文を施す。 内面 ヨコナデ。 ・外面 左上がりのナナメ方向のハケ(8条 /cm)を右廻りに施す。 ・	淡褐色	M-S 2	L-S 4	S 2	S 3	M-S 2	S 0	搬入土器 近江系 (石英・角閃石少な く、長石多い。)

32-27	W-1 トレンチ (第14図 3層)	臺 (脚台)	台付臺	裾部径 9.2cm (残存1/4からの回転復元) ・ ・ ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	淡褐色	M   S 3 M   S 3 S   S 3 S   S 3 M   S 1	搬入土器 伊勢湾岸系 (チャート多い。)
32-28	W-1 トレンチ (第14図 3層)	小形器台	II-C:	口径 9.8cm (復元完形) ・ 外面 ヨコナデ後、ヘラミガキ (7条/cm) をタテ方向に施す。 内面 ヨコナデ後、ヘラミガキ (7条/cm) をタテ方向に施す。 ・ 外面 ヨコナデ後、タテ方向のヘラミガキ (7条/cm)。外面焼成前穿孔の径1.1cmの円形スカンを3方に配す。 内面 柱状部は不定方向のナデ、裾部は左廻りのヘラケズリ (工具も右から左) 後、裾端部ヨコナデ。	淡褐色	L   S 3 L   S 3 S   S 3 S   S 3 S   S 2 S   S 1 S   S 0	裾部は大きく広がるが、口縁部はたち上らない。

## 第5章 檜原遺跡W地区出土土器の占める位置

### 第1節 一括資料

土器の編年研究における、いわゆる一括資料の取り扱いについて、若干思うところがあるので記しておきたい。前節では各遺構の所属時期について記してきたが、ここで気付くのは“土坑”資料の極めて高い一括性と、それとは対照的な“溝”出土資料の、混入とせざるを得ない遺物のあまりの多さである。幸いこの調査区では遺構面を特定し、先後関係を確認することができたから良かったものの、そのような条件に恵まれなかったならば、特に布留2式以降とした溝2や溝4は、庄内式あるいは下っても布留1式の遺構として理解することが通常だったのではないだろうか。

溝出土資料の一括性の低さについては度々注意を喚起され、かつて筆者らも記したこともあるが<sup>(21)</sup>、やむを得ぬとはいえ、弥生土器や土師器の編年表などにおいては未だSD-X X下層などの表記とそこから出土した土器の図面が大半を占めている現状は、いかに過去の研究が精緻であり、また近年、遺構出土遺物の分析方法に長足の進歩があったにしても、果たして当時の土器使用＝様式の実態はその通りなのかと考えると、不安に駆られるというのは偽らざる気持ちである。

今回検出した2基の土坑は共に一括性の極めて高いもので、今後の古式土師器研究に多大な影響を与えるであろう。そして、幾度も同様の条件での土坑の検出があったとき、いまは欠落している器種が出揃って初めて、古式土師器の編年研究は、限りなく完成に近づいたものと考えたい。寺沢薫氏が別稿<sup>(19)</sup>でも述べられているように、土器に限らず鉄製品なども含めて、様式設定に際しては「一括出土品そのものを常に循環的に検証し」ていく不断の努力が必要であることを、自戒を込めて記しておきたいと思う。

### 第2節 檜原遺跡の在地の土師器の胎土

南葛城地域を含めた大和西南部で製作されたとみられる、いわゆる赤焼土器の胎土は“石英や長石は大きなものが多く含まれ、雲母もめだって大形、多量に含まれる。一方、角閃石やチャートは小さく、無いかもしれない”というのが共通の理解であったように思われるし、『矢部遺跡』でも長石や角閃石に関しては本文中では触れられていないが、ほぼ同様の記述になっている。

今回、檜原遺跡の土器を観察したところ、肉眼でもまず注意されたのが雲母の少なさであった。『矢部遺跡』では土器に含まれる鉱物の大きさや量について、肉眼と倍率30倍の顕微鏡（ナショナルライトスコープFF-393）を併用した観察で、胎土中鉱物の大きさと量について各5段階の基準を設けており、本書でもそれに従って観察表を記してきた。その基準を転載しておこう。

#### 鉱物の大きさ

①＝肉眼観察でも径1.0%以上の砂粒として確認できるもので、スコープ内ではその多くを占める巨大な塊と見られるもの。

L＝肉眼観察では径1.0%前後に確認できるもので、スコープ内では大きな塊として見られるもの。

M=肉眼観察において径0.5%程度に確認できるもので、スコープ内では大きな粒子として確実に観察されるもの。

S=肉眼では殆ど判明できないが、スコープでは小さな粒子として十分観察しうる。

⑤=肉眼では全く分からない。スコープではピンホール程度にかすかに観察できる。

#### 鉱物の量

0= 観察では全く確認できなかったか、殆ど存在しないに等しい。

1= 極めて稀少であり、スコープ内に入らないこともままある。点在。

2= 少ない。スコープ内には必ず入ってくるが、その量は数えられる程度である。散在しない偏在。

3= スコープ内には必ず入り、数えられる量ではない。普遍的に認められるが、その間隔は粗である。

4= 多い。スコープ内に際立って目立つ存在である。普遍的に認められ、その間隔は密である。

5= 極めて多量である。スコープ全面に密集してみられる。鉱物が互いに接するものもある程である。

この基準と方法に従い観察した結果、橿原遺跡の在地の土器の典型的な胎土は次のようなものとみられる。“石英M-S・3～4、長石M-S・3、角閃石S・3、雲母S・2、チャートS・0～1”で、赤色斑粒については甕がS・0～1、それ以外の器種がM-S・1～2である。さきに記した「共通の理解」との顕著な差は、角閃石がSサイズながら多量にみられること、雲母が小さく少ないことに集約される。また、甕とそれ以外の器種に見られる赤色斑粒の取り込まれ方の差異は、器種による胎土の使い分けを示すものとして注目される。また、赤色斑粒は、同じ在地の土器とみられるものでも、布留0式では甕以外の器種にほぼ限られていたのが、布留1式以降になると甕にも観察できるものが多くなり、全体に大きめのもの（Mサイズ）が2～1程度含まれる傾向があることも注意しておく必要がある。

御所市内の他の遺跡との比較検討さえ未だ十分には果たせていないが、橿原遺跡と同様に金剛・葛城山東麓の扇状地緩斜面に立地する佐田遺跡出土の布留式土器はほぼ同様の胎土内鉱物の在り方を示すのに対して、盆地平野部に立地する鴨都波遺跡や中西遺跡の布留式土器は、雲母はMサイズを中心にL-S・3ないし4の含有となっているものもかなりみられるが、一方で同程度にそれとは異なる胎土内鉱物の在り方を示すものがあることも付言しておこう。このことについては改めて報告する機会を持ちたいと考えているが、いずれにせよ、ごく近い距離にあっても個々の遺跡の立地条件などによって、土器の胎土も大きく異なる場合のあることを再認識した次第である。

### 第3節 布留形甕の口縁形態

『矢部遺跡』で古式土師器を中心に設定された甕の口縁形態はa～hの8手法ならびにそれを細分したものであった。しかしながら、橿原遺跡出土の布留形甕の中に、その範疇では収まらないと思われる口縁形態を採るものがあったので、橿原の各頭文字をとって、新たに甕口縁形態 $nb_1$ 手法および $nb_2$ 手法として追加しておきたい（第33図）。甕の口縁形態に関する研究がさらに進展して整理され、将来的にはこの $nb_1$ 手法と $nb_2$ 手法が、他のものと同様に英語小文字1字と下つき数字で示されるようになることを望んでいる。

	手 法	模 式 図	説 明
『矢部遺跡』による設定	a		口唇部を尖らせるか、丸くまとめたもの。
	b		口唇部の面取りを行っているもので、外面に端面をもつもの、上方に端面をもつものが存在する。
	c		口唇部の多くはa手法を踏むが、口縁部全体を内彎させたもので、いわゆる「受口状口縁」を形づくるもの。
	d		いわゆる「はねあげ口縁」といわれるもので、口縁内面のスリナデ、ないしは指頭によるつまみ上げによって直線的に外傾した口縁に小さな立ちあがりを形成するもの。
	e		d手法による口縁端部の端面をスリナデによって外傾させたもので、明瞭な端面をもたず丸くまとめたe <sub>1</sub> と、明瞭な端面をもたせ、上下に肥厚させたe <sub>2</sub> とに分類する。口縁部が心もち内彎するものがある。
	f		内外面を肥厚させ、口唇部上面に水平な端面をもたせたもので口縁は内彎する。
	g		口唇部を内傾させて肥厚させたもので、口縁は内彎する。接合線付近をナデつけることを一般とするために、口縁の厚さは中程において最も大きい。端部処理によって以下の4形式に分類する。 <g <sub>1</sub> > 内外に肥厚させて丸くおさめるもの。 <g <sub>2</sub> > 内面にやや肥厚させ外面端部を丸くおさめるもの。 <g <sub>3</sub> > 内面に鋭く肥厚させ、外面はシャープにおさめるもの。 <g <sub>4</sub> > 内面に強く内傾、肥厚させ、外面はシャープにおさめるもの。
	h		一見c手法にも似るが、口縁基部の接合線付近と口唇部のナデつけが強いので、中程に最大厚をもつもので、全体的な手法はむしろ、f・gのグループに含めて考えられるもの。
追 加	nb <sub>1</sub>		口唇部を外側からナデつけることによって端部を外面に肥厚させるもの。肥厚の突出度が著しいものを典型とするが、さほどでないものも、同一の手法によるものは、これに含める。
	nb <sub>2</sub>		f手法に似て口唇部上面に水平な端面をもたせ、口縁は内彎するものもあるが、口唇部内面は肥厚しない。口唇部外面はナデにより調整され、かすかな肥厚部分をもつ。nb <sub>1</sub> 手法の延長線上の手法である。

第33図 甕の口縁形態

	a	b	c	d	e <sub>1</sub>	f	g		h	nb <sub>1</sub>	nb <sub>2</sub>	特殊	計
							g <sub>2</sub>	g <sub>3</sub>					
溝 1 (布留0式)	2 (13%)	1 (7%)			3 (20%)					8 (53%)		1 (7%)	15個体 (100%)
土坑 1 (布留1式)					3 (27%)	1 (9%)	5 (45%)		2 (18%)				11個体 (100%)
土坑 2 (布留2式)							1 (33%)	1 (33%)			1 (33%)		3個体 (100%)

第12表 布留形甕口縁形態の頻度によるセリエーション

まず、 $nb_1$ 手法は、口唇部上面と肥厚部分の下面に指を当てがい、強くヨコナデを行うことによって形成されるもので、b手法口縁にみられる口唇部外面の肥厚がさらに発達したように見えるものを言う。b手法は口唇部の面取りを行い若干のナデを行う結果として外面にわずかに肥厚部分が形成されるが、 $nb_1$ 手法は当初からナデによって形成され、口唇部外面の端部はその結果として強く外面のやや斜め下方もしくは水平方向へ突出する傾向の著しいものを典型とする。ただし、やや上向きに肥厚するもの、あるいは、肥厚の度合いはさほど著しくなくても、同様の手法によるものはこれに含めて考える。

次に、 $nb_2$ 手法はf手法に似て、口唇部上面に水平な端面をもたせるが、口唇部内面は肥厚しないものである。口唇部外面はナデにより調整され、かすかな肥厚部分をもつ。

$nb_1$ 手法は溝1やその覆土(W-1トレンチ⑦層)などから出土する布留形甕に限ってみられるもので、溝資料あるいは包含層資料とはいえ、布留形甕という属性を有しているので、橿原遺跡の布留0式に特徴的な甕の口縁形態といえることができる。また、 $nb_2$ 手法は布留2式の土坑2に1点と包含層中に数点(第32図-14・15ほか)みられ、 $nb_1$ ・ $nb_2$ 両手法ともに在地の胎土の布留形甕に限ってみられる口縁形態である。

さて、『矢部遺跡』では、布留0式の甕の口縁形態について、「 $g_1$ 手法を頂点にf・ $g_2$ ・ $g_3$ 手法が多用される」とされ、同書354ページの図7からa・b・d・e手法も少数ながら存在するらしいことが読み取れる。

溝1では布留形甕の口縁形態は図示した12点中、a手法1点(8%)、b手法1点(8%)、 $e_1$ 手法3点(25%)、 $nb_1$ 手法6点(50%)、特殊形1点(後述)であり、図示し得なかった小片を含めると3点を追加でき、15点中でa手法2点(13%)、 $nb_1$ 手法8点(53%)となる(第12表)。『矢部遺跡』で記された布留0式の口縁形態の組成と比べると、 $g$ ・f手法がなく、少数派とされるa・b・e手法や新たに設定した $nb_1$ 手法のみで占められている点に大きな違いがある。また、橿原遺跡特有とみられる $nb_1$ 手法が、50%を越える高率を占めていることにも注意したい。<sup>(22)</sup>

a手法やb手法は弥生時代からの系譜上にあるものであり、 $e_1$ 手法は庄内形甕の典型的な口縁形態であるd手法の硬化したものである。そして、 $nb_1$ 手法は在地の土器のみに採用された口縁形態であった。このことから、布留0式の段階にあっては橿原遺跡では、布留形甕の体部の成形法や調整法は受け入れたものの、口縁部の製作にあたっては、未だ在地色が濃厚に残存していたと評価することができる。すなわち、大和の国中の布留形甕においてさえ未だ「布留式」は浸透しきっていないのである。

また、布留0式の段階になって、 $nb_1$ 手法といった在地色豊かな甕の口縁形態が、少なくとも大和の国中の一角で成立し得た背景に、多量の遠方からの搬入土器(後述)に象徴されるような、大きな時代のうねりを感じざるを得ない。

東部瀬戸内系とした酒津式影響の甕(第22図-29・36)も、こうした時代性のなかで、布留式の

影響を受けておそらくは彼の地で成立し、短期間のうちに消長するのだろう。同様の評価を与え得るものとして、さきに特殊形とした口縁形態をもつ布留形甕(同25)がある。胎土の特徴から搬入土器とみられ、口唇部外面の端部直下に擬凹線を施している。これも布留形甕の典型的な口縁形態であるf手法など、外面を肥厚させる口縁の影響を受けて一時的に成立したものとみてよい。

以上のことから、布留0式の段階にあっては、「布留式」は強力に推し進められ汎日本的な規模で席捲するが、未だルーズな部分を多分に残したままであったことが理解される。

ところが布留1式の土坑1になると、a・b・nb<sub>1</sub>手法の口縁形態はなくなって、g<sub>2</sub>手法やf手法さらにはh手法といった、布留形甕に典型的な口縁形態が主流を占めるようになり、様相は大きく変化している。さらに布留2式の土坑2ではe<sub>1</sub>手法がなくなって全て布留形甕に特有の口縁形態のみになり、時期が下るとともに「布留式」の席捲の度合いが増して行くことが知られるのである。そうしたなかで、f手法を明らかに意識したnb<sub>2</sub>手法を採用した在地の甕が、布留2式に下る土坑2などで出土している事実は興味深い。技法としては口唇部外面の同様の箇所にナデを施す点でnb<sub>1</sub>手法と共通性があり、口縁の見目の形状については一定の規範を守りつつも、手法としての在地色は未だ健在であると評価することができるだろう。このことについては、包含層中の遺物を含めてもg<sub>3</sub>手法の甕の口縁形態を採る布留形甕がほとんどみられないことにも現れている。『矢部遺跡』によれば、布留2式にはg<sub>3</sub>手法が主体を占めるとされるが、土坑2出土土器(第29図)の中でも、g<sub>3</sub>手法は搬入土器とみられる(3)の1点のみであることも付言しておこう。

#### 第4節 搬入土器

先述のように、搬入土器の認定は、胎土観察の結果を重視し、在地の土器の胎土とは明らかに異なるものについてのみそれと認めた。また、搬入土器の一部については〇〇系との表現をしているが、これは在地の土器とは胎土中に含まれる鉱物の大きさや量が明らかに異なり、搬入土器であることが確実視されるもので、なおかつ特徴的な手法や形態により、オリジナルの地域を認定できるものについて記した。したがって、搬入土器であることはほぼ確かであるが、その地域で製作されたものとの検証を経ていないことも今一度断っておく。

橿原遺跡の搬入土器のありかたは、布留0式と1式以降では異なる状況を看取できる。まず、布留0式併行期とみられる搬入土器についてまとめておこう。

溝1の搬入土器は、図示し得た第21～24図の90個体中19個体で21%を占め、地域を特定できるものは東部瀬戸内・生駒山西麓・伊勢湾岸・北陸と広範囲にわたっている。東部瀬戸内系とした甕2点(29・36)は純粹の酒津式の甕とは言いがたいが、先述のように、その影響下にあって成立した口縁形態とみなすことができるだろう。生駒山西麓系(35・63)はいずれも庄内河内形甕で、伊勢湾岸系には北村和宏氏のいう柳ヶ坪型壺<sup>(23)</sup>(9)がある。北陸系は谷内尾晋司氏のいう月影Ⅱ式<sup>(24)</sup>に相当する甕2点(7・8)が知られる。このほか胎土の特徴から搬入土器とみられるものを含めた場

合の、搬入土器の器種組成は、壺5個体(26%)、甕11個体(58%)、高杯3個体(16%)となっている。先述したように、溝1全体(104個体中)での器種組成は、壺26個体(25%)、甕45個体(43%)、高杯16個体(15%)ほかで、壺・高杯の比率は全体と搬入品のそれがほぼ合致するのに対して、甕は全体で占める割合(43%)に比して搬入土器の比率(58%)が高く、加えて6割近い高率を占めていることに注目されよう。広口壺(10)は弥生Ⅳ様式に属するが、他は従前の編年研究によっても布留0式併行期のものとみて大過ないだろう。また、搬入土器19個体のうち東部瀬戸内・伊勢湾岸・北陸といった遠隔地のものは5個体あって、26%という高率を占める。

溝1覆土(W-1トレンチ⑦層)の搬入土器は第30・31図に図示し得た30個体中8個体(27%)を占め、内訳は甕5個体に対し壺・高杯・器台各1個体となっている。地域は遠方のものとして伊勢湾岸系と北陸系が注意される。伊勢湾岸系はいずれも甕で、赤塚次郎氏のいうS字口縁B類<sup>(25)</sup>の(9)(10)と単純口縁の(11)がある。北陸系としては有段口縁の甕(12)と装飾器台(30)があり、いずれも月影Ⅱ式<sup>(24)</sup>に相当する。これら遠方からの搬入土器は、従前の編年研究と先述の溝1での共伴の事実から、布留0式併行期の資料とみて良いだろう。

溝2の搬入土器は、第25図の13個体中2個体(15%)で、折返し口縁の南関東系とみられる無文の壺(4)が注目される。大村直氏はこの種の土器を壺形土器A<sub>2</sub>と呼び、前野町式新段階に有文の壺A<sub>1</sub>にかわって比率が増大し、直後の五領1式古段階には散見し得るにすぎなくなると記している<sup>(26)</sup>。前野町式新段階には『矢部遺跡』でいうところの小形器台C<sub>4</sub>の出現も知られ、布留0式と一部併行関係にあるとみてよい。奈良県内での類例は矢部遺跡の土坑305下層<sup>(27)</sup>で知られ、布留0式の一括資料中にある。このほか胎土の特徴から搬入土器とみられるものとして高杯(11)がある。

溝4の搬入土器は、第26図に図示し得た6個体中2個体(33%)で、北部九州系複合口縁壺の複合口縁部とみられるもの(1)の存在が特筆される。突帯直上に波状文を施す点は異例であるが、常松幹雄・折尾学両氏のいう壺形土器A-Ⅱ類に該当し、西新町Ⅱ式に属するものとみられる<sup>(28)</sup>が、西新町Ⅱ式とⅢ式の間には過渡的な小様式の存在が予想されていることからしても、この土器を布留0式併行期とすることに無理はない。このほか胎土の特徴から搬入土器とみられる鉢(4)がある。

包含層出土(第32図)の遠隔地からの搬入土器には近江系の26と伊勢湾岸系の27の甕2点などがある。26に最も近似した特徴をもつ土器は、纏向遺跡<sup>(29)</sup>では辻地区土坑4下層(同書 図102-77)や辻地区河道下層(同書 図121-139)で知られ、それぞれ纏向3式と4式に位置付けられており、布留0式を前後する時期とみてよいだろう。なお、本書第32図-16の酒津型甕は、布留形甕の口唇部内面肥厚の影響を認め得ることに加え、胎土の特徴からも橿原遺跡近辺で製作された可能性が高いが、口縁立ち上がり部の特徴はオノ町Ⅱ式<sup>(30)</sup>に対比できるので、これも布留0式併行期とみて大過ないと思われる。

以上のように、溝1やその覆土(W-1トレンチ⑦層)の搬入土器は布留0式にほぼ限定され、溝2の南関東系壺および溝4の北部九州系壺、さらには包含層の遠隔地のものもほぼ布留0式併行

とみて矛盾はない。このことから布留0式段階においては、橿原遺跡は非常に遠い地域との交渉を行っていたらしいことが判明する。具体的には北部九州・東部瀬戸内・近江・北陸・伊勢湾岸・南関東の各地域であり、これら布留0式に属するとみられる遠隔地の土器の器種別の内訳は、全体数15個体に対して壺3個体(20%)、甕11個体(73%)、器台1個体(7%)となっている。ここでもさきに溝1で搬入土器の器種別の組成を検討した結果と同様、甕の比率の高さに注目させられる。ちなみに溝1とその覆土(W-1トレンチ⑦層)および溝2・4に限った場合の搬入土器の総数は39個体だが、そのうち遠隔地からの搬入土器は12個体あるから、これも31%もの高率を占めていることになることにも注目しておく必要がある。

次に布留1式および布留2式の状況を試みよう。布留1式の土坑1の搬入土器は、第27・28図に図示し得た23個体中5個体(22%)を占め、紀伊製とみられる甕(12)1点のほか、胎土の特徴から搬入土器と考えられるものを含めた場合の内訳は、甕2、高杯2、小形丸底鉢1となっている。また、布留2式の土坑2の搬入土器は、第29図に図示し得た11個体中3個体(27%)を占め、内訳は甕1、高杯2となっている。

土坑1・2を通じて言えることは、溝1に比べると、搬入土器のなかで甕の比率が相対的に下がっていることである。土坑1と土坑2の搬入土器の合計8個体のうち、甕3個体(38%)、高杯4個体(50%)、小形丸底鉢1個体(13%)となっており、高杯や小形丸底鉢といったいわゆる祭祀に関わる器種の比率の伸びも看過できない。また、この時期においても東部瀬戸内・東海・北陸などの地方では、独特の口縁形態をもつ甕などに地方色は色濃く残存しているが、包含層資料を含めても、その段階の搬入土器はみられない。このことは溝1であれほど目立った遠隔地からの搬入土器が、この時期以降突然に入らなくなることを示しており、この点も溝1とは大きく異なる状況である。

以上、述べてきたことをまとめておこう。布留0式の溝1と、布留1式以降の土坑1および2では、全体に占める搬入土器の割合は21~27%と大差ないが、その内容には大きな違いがみられた。

布留0式の溝1などでは、北部九州・東部瀬戸内・近江・北陸・伊勢湾岸・南関東など遠隔地からの搬入土器が搬入土器中約3割を占め、当時の交易圏の広さと活発さを雄弁に物語っている。一方、生駒山西麓系の庄内河内形甕はW地区全体でもわずかに数点と目立った存在ではなく、この時期の橿原遺跡は、単に大和から河内への経路の要衝地として存在した訳ではないらしいことが判る。また、遠隔地からのものも含めて、搬入土器の中で甕の占める比率が高いことは、遠隔地からの人の移動を伴った可能性を示唆している。そして、橿原遺跡特有かともみられる $nb_1$ 手法の甕の口縁形態の卓越。これらのことから、布留0式段階においては橿原遺跡は、「布留式」の席捲の波にまきこまれながらも、未だ、対集落外交渉と $nb_1$ 手法の口縁形態に象徴される文化の独自性を、一定程度保ち得た段階であったと評価することが可能であろう。

ところが、布留1式期以降になると、おそらくは遠隔地からの搬入土器は皆無となり、高杯や小形丸底鉢といった祭祀に関わる器種に搬入土器の主体が移り変わっていくのである。そして独自の

甕の口縁形態<sup>nb</sup>手法はもはやみられない。これらのことは画一化された祭祀形態の強要と、橿原遺跡やその近辺に居住した勢力が持つ持ち得た独自性の崩壊を示唆している可能性があり、この地域に前期古墳がみられない所以であると言えば、軽率の誇りを免れないであろうか。

ひたすら禁欲的な分析を行ってきたつもりが一転して、最後には大胆な推測を交えた「はなし」になってしまったが、橿原遺跡の実態の解明は今後の調査に委ねられているところがあまりに多いことは改めて述べるまでもない。また、遺跡内外の広範囲の遺物を集めてくるであろう土石流によって埋没した溝1や包含層と、周辺に存在した遺物しか廃棄されないであろう土坑1や2を、遺構の性格の違いを無視して比較してみたところで、遺跡内での移住者との住み分けの事例が確認されつつある現在、あるいは意味を成さないのかもしれない<sup>(31)</sup>。ただここでは「この地域に前期古墳がない」理由を考えるにあたっての、覚え書きとして書き留めておくことにしたい。

## おわりに

昭和62年に現地調査を終えてから丸7年が経過した。不十分な内容ながらも、ともかくこうして本書が刊行されるに至ったことを素直に喜ぶたい。この間、市当局・補助員の皆さん、および明新印刷株式会社には、心ならずも、特に費用の面でご迷惑をかけてしまったことを、この場を借りてお詫びし、多大なご理解を頂いたことに深謝申し上げたいと思う。

それにしても、やむを得ぬ事情により遅延している遺物整理や報告書の刊行費用を、小規模な一地方公共団体が単独で負担せざるを得ないという今の状況は、何としてでも改めて頂きたいと思う。

今回の場合、遺物量はコンテナ50箱程度で、しかもその大半を占める包含層の遺物の図示は、予算の関係でやむなくほとんど割愛したので、無理をしながらもどうにか報告書という成果品をあげることができた。このような中途半端な状態で報告書を刊行することの是非については様々な意見もあろうが、あの「小林遺跡」や大きな話題を呼んだ「名柄遺跡」「鴨都波遺跡」は、各々その3倍、10倍そして20倍を超える遺物量があって、同様の理由で、基礎的な整理作業さえほとんど手付かずのままである。

もはや財政的な裏付けがほとんどない状態で整理作業を進めるには、限界をはるかに越えた遺物量と、高い質をもつ遺構・遺物が眼前に立ちはだかっており、このままでは永遠に報告書の刊行ができないまま、遺物やラベルが朽ち果てていくことも杞憂とは言えないとの切実な危機感を抱いている。

今回のように幾度にも分けて、市当局に予算の要求をしていこう。しかしながら人口わずか3万6千人あまりの小さな、そして万年赤字財政に悩む地方公共団体において、そこに所属する一職員が市当局に主張できること、そして実際に成し得ることを想像してほしい。

遺物整理や報告書の刊行を目的とした国庫・県費による補助金制度の設立を切に望む次第である。

(文責 藤田 和尊)

## 文献註・補註

- (1) 榎原考古学研究所編『近畿古文化論攷』(1962年)  
網干善教「鴨都波遺跡」(『御所市史』、1965年)  
堤賢二・菅谷文則・吉村雅博・吉田二良「奈良県御所市鴨都波遺跡の石戈」(『考古学雑誌』第59巻第3号、1973年)  
伊藤勇輔『鴨都波遺跡—調査概報—』(1977年)  
伊藤勇輔「鴨都波遺跡発掘調査概報(県立御所高校内)」(『奈良県遺跡調査概報 1978年度』、1979年)  
豊岡卓之「御所市鴨都波遺跡第7次発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報 1988年度』、1989年)  
木許守編『奈良県御所市鴨都波遺跡第11次発掘調査報告書』(『御所市文化財調査報告書』第11集、1992年)  
藤田和尊編『奈良県御所市鴨都波12次概報』(『御所市文化財調査報告書』第12集、1992年)  
藤田和尊「鴨都波遺跡第13次調査」(『御所市文化財調査報告書』第13集、1992年)
- (2) 島本一「琴柱形石製品の新例」(『考古学雑誌』第28巻第6号、1938年)
- (3) 伊藤勇輔「新庄町寺口和古田墳群」(『奈良県遺跡発掘調査概報 1979年度』、1980年)
- (4) 東潮・西藤清秀「高取町の古墳」(『奈良県遺跡発掘調査概報 1982年度』、1983年)
- (5) 秋山日出雄・網干善教『室大墓』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊、1959年)ほか
- (6) 関川尚功「御所市室大墓古墳外堤」(『奈良県遺跡発掘調査概報』1988年度、1989年)  
木許守『奈良県御所市室中西遺跡—第2次発掘調査報告—』(『御所市文化財調査報告書』第9集、1990年)  
木許守『奈良県御所市室中西遺跡—第3次発掘調査報告—』(『御所市文化財調査報告書』第10集、1991年)
- (7) 木許守『奈良県御所市佐田遺跡範囲確認調査報告』(『御所市文化財調査報告書』第16集、1993年)ほか
- (8) 平成4年(1992年)度～平成5年(1993年)度にかけて御所市教育委員会ならびに榎原考古学研究所が発掘調査を実施。
- (9) 坂靖「御所市南郷遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報 1992年度』、1993年)
- (10) 藤田和尊「奈良県御所市名柄遺跡」(『日本考古学年報』42(1989年度版)、1991年)
- (11) 田辺昭三『陶邑古窯址群』(『平安学園考古学クラブ研究報告』第4号、1966年)
- (12) 寺沢薫編『矢部遺跡』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊、1986年)
- (13) 佐原真「畿内地方」(『弥生式土器集成』本編2、1968年)
- (14) 寺沢薫編(前掲書(12)文献)
- (15) 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年)
- (16) 田辺昭三(前掲書(11)文献)
- (17) 小笠原好彦・西弘海「土器」(『平城宮発掘調査報告』Ⅶ、『奈良国立文化財研究所学報』第26冊、1976年)
- (18) 寺沢薫編(前掲書(12)文献)
- (19) 寺沢薫編『奈良市六条山遺跡』(『奈良県文化財調査報告書』第34集、1980年)
- (20) 存続時期については、E地区の包含層中から大形高杯の破片の出土も知られ、布留3式以降も継続して集落が営まれた可能性が高いが、主体となる遺物の様相からみて、盛行時期はやはり布留0式～2式の間と考えられる。
- (21) 木許守・藤田和尊「長頸壺からみた今次調査出土一括資料の占める位置」(木許守編『奈良県御所市鴨都波遺跡第11次発掘調査報告書』、『御所市文化財調査報告書』第11集、1992年)
- (22) 布留2式までの遺物を含むとみられる包含層である、鍵層(第13図Ⅶ層)でも布留形甕のうち nb<sub>1</sub>手法を採用するものが全体の31%と最も高い比率を示すことは先述した。  
柳本照男氏によると同様の口縁形態の布留形甕は、豊中市・利倉西遺跡でも若干知られるが、量は少なく数点程度という。

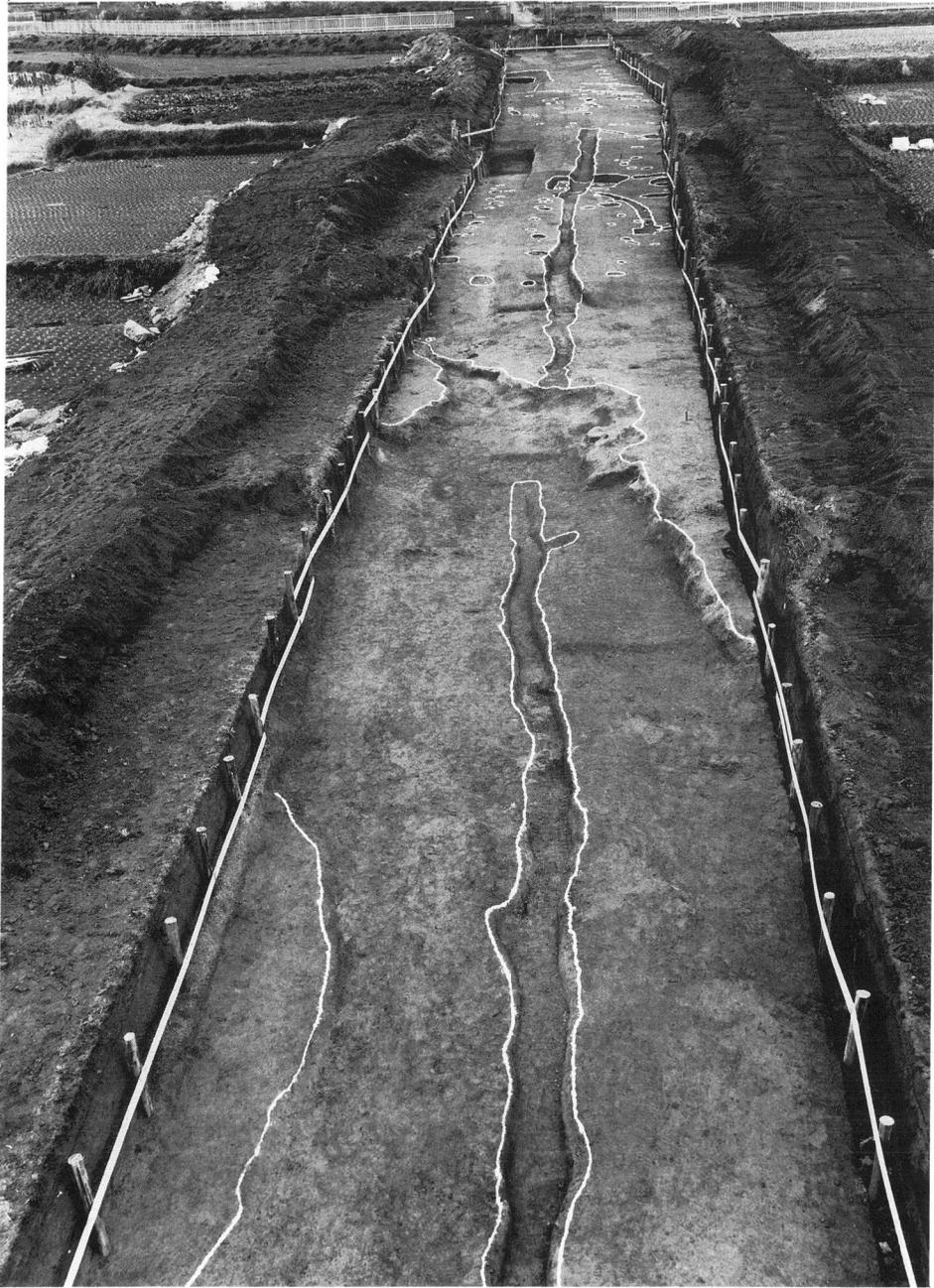
- (23) 北村和宏「付論 柳ヶ坪型壺について」(『古代』第86号、1988年)  
なお、この土器については寺沢薫氏から、胎土中に角閃石を多量に含むことから、纏向遺跡周辺で製作されたものではないかとのご教示を得た。
- (24) 谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」(『北陸の考古学』、1983年)
- (25) 赤塚次郎「S字甕覚書 '85」(『年報』昭和60年度、1986年)
- (26) 大村直「前野町式・五領式の再評価」(『神谷原』Ⅲ、1982年)
- (27) 寺沢薫編(前掲書(12)文献)
- (28) 常松幹雄・折尾学「北部九州における西新町遺跡の位置」(『西新町遺跡』、『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第79集、1982年)
- (29) 石野博信・関川尚功『纏向』(1976年)
- (30) 伊東昇ほか『上東遺跡の調査』(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集、1974年)
- (31) ただし、包含層中のものを含めて全ての土器を観察しても、布留一式ないし2式まで下るとみられる遠隔地からの搬入土器は見い出せない。
- これは多くの遺跡に通じる一般的な傾向ではあるが、以上報告してきたような個性豊かな口縁手法の動態や搬入土器の器種組成の変化などから、庄内式から布留0式に至るまでの、異常なまでの土器の移動について、個々の遺跡間に偏差を抽出し得る可能性と、それが古墳時代の幕開けや各地域における古墳の初現に密接にからんでいる可能性を考えたい。
- このような意味で、森岡秀人氏による土器移動の類型化(森岡1993)は、氏がケーススタディーとして行われたような旧国単位にとどまらず、さらに個々の遺跡レベルで検討を行う必要が意識されるが、現実には、各種条件が未だ整っていないというのが実態なのだろう。
- 森岡秀人「土器移動の諸類型とその意味」(『転機』4号、1993年)

## 報告書抄録

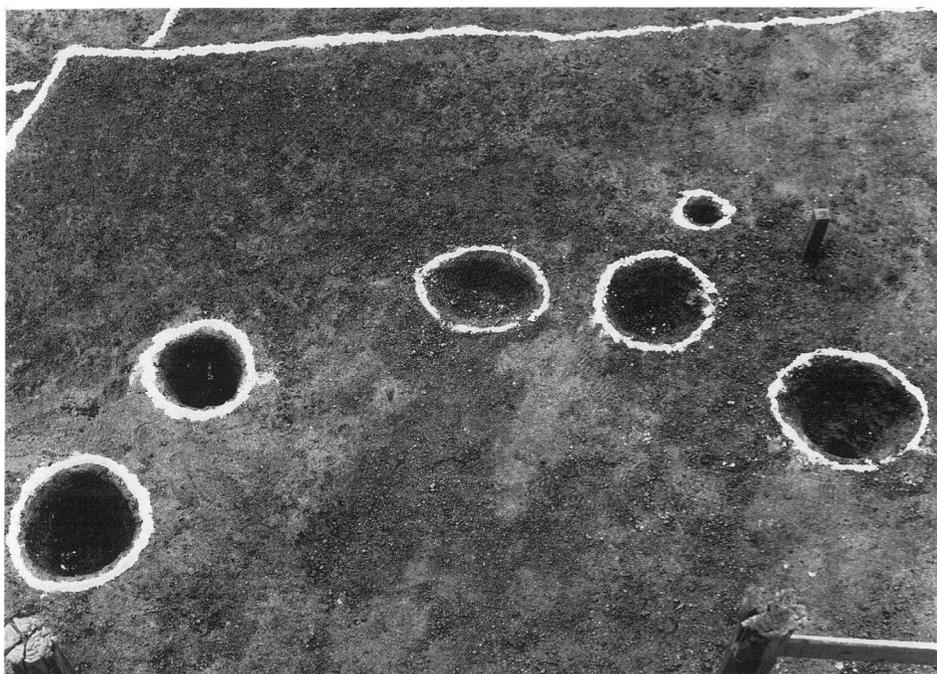
ふりがな	ならぼらいせき I							
書名	檜原遺跡 I							
副書名								
巻次								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	藤田 和尊							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639 - 22 奈良県御所市三室117番地 TEL 07456 - 2 - 3001 (内412)							
発行年月日	西暦 1994年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ' "	東経 ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ならぼら 檜原	ならけんごせし 奈良県御所市 だいじならぼら 大字檜原	29208		34度 27分 15秒	135度 43分 36秒	19861128～ 19870210	1,005	小集落地区改良事業に伴う改良道路部分の事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
檜原	集落	古墳時代 前期	E地区 溝 土坑	1 1	古式土師器 砥石		葛城地域で初めて古式土師器の良好な一括資料を検出した。搬入土器は北部九州から南関東までの広範囲に及んでいたものが、布留式の浸透と共に搬入率はそのままで、遠隔地のものが見られなくなることが半明した。	
		古墳時代 後期	E地区 掘立柱建物 竪穴式住居 土坑	1 1 1	須恵器 土師器 陶質土器			
		中近世	E地区 溝	11ほか	瓦 磁器			



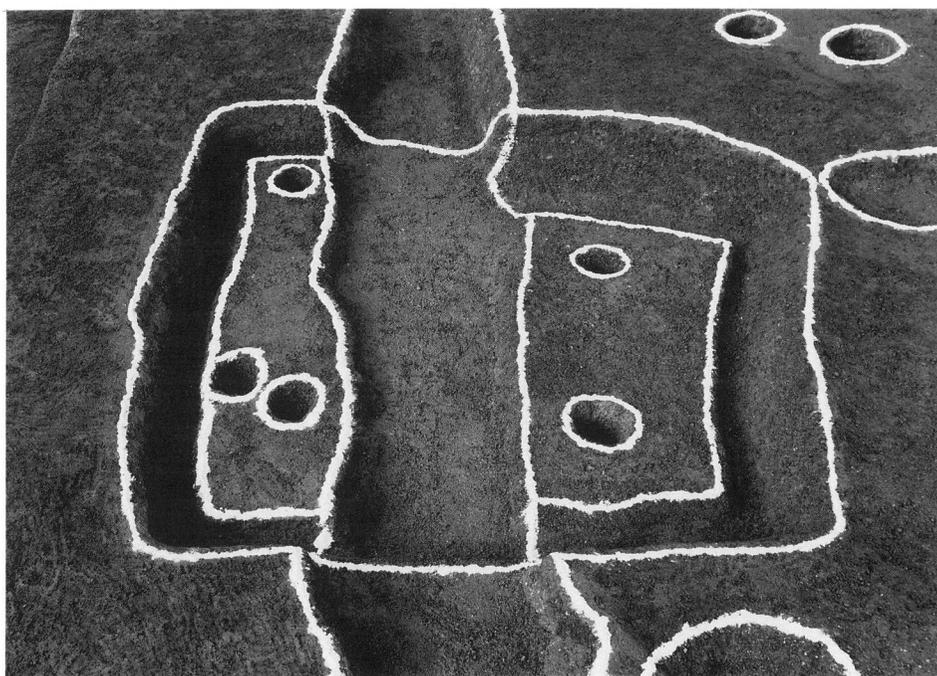
E地区 全景 (西から)



E地区 全景（東から）



E地区 小屋状遺構（P52～56,北から）



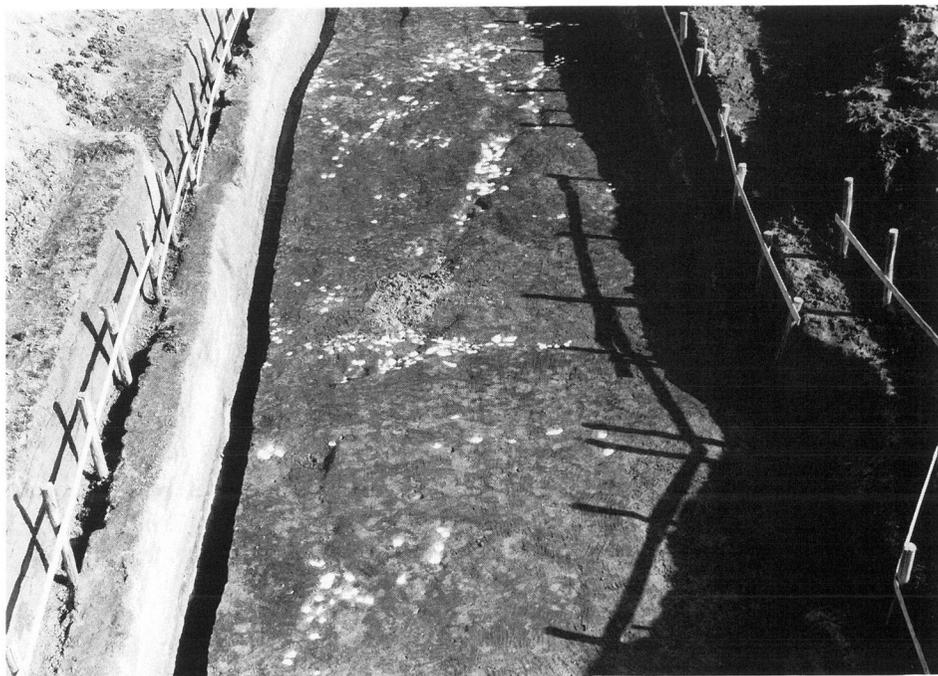
E地区 竪穴式住居（P60～64付近,東から）  
（左上のピットは近代のもの）



E地区 溝11遺物出土状態（東から）



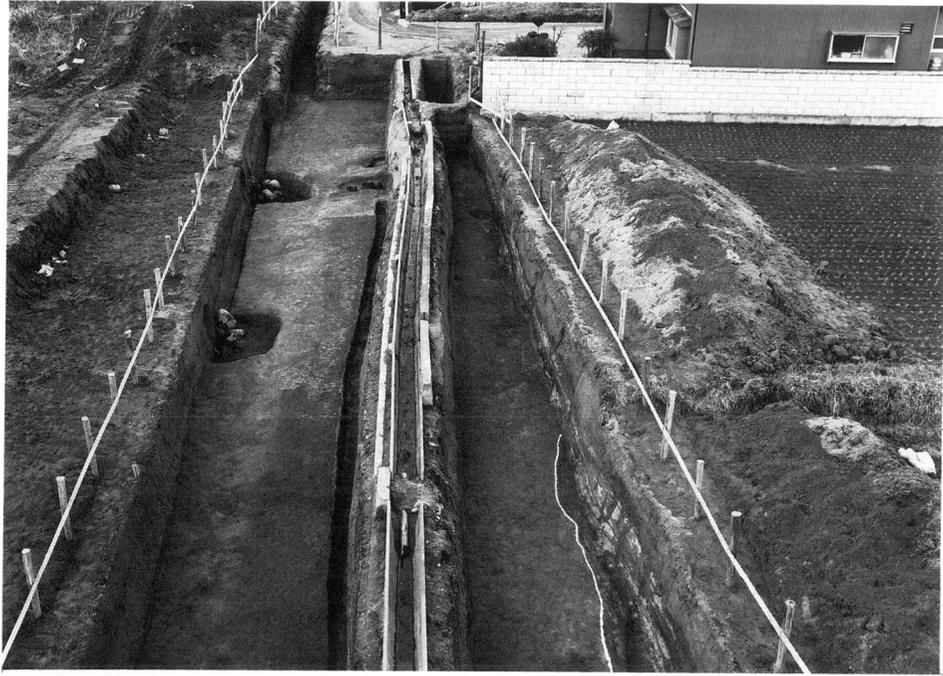
E地区 土坑4遺物出土状態（北から）



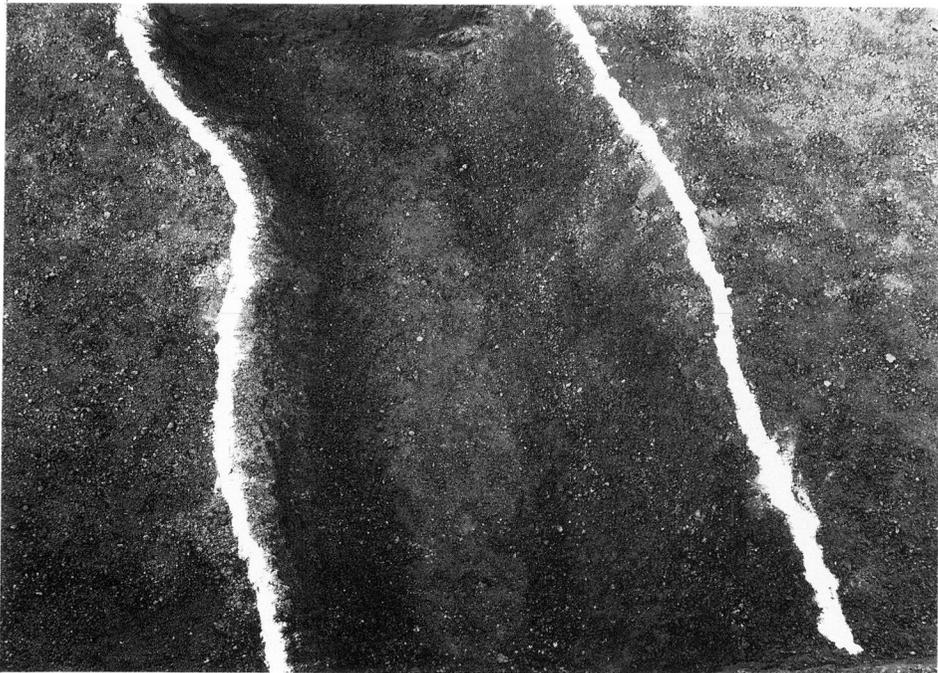
E地区 地山下の獣の足跡（西から）



同 接写(中央部、北から)



W地区 全景（東から）  
（手前右は溝1）



W地区 溝4（南から）



W地区 溝3 (東から)



W地区 土坑1 (手前が北)



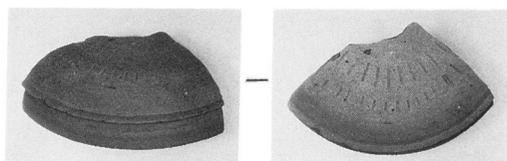
同 (南から)



W地区 土坑2 (手前が北)



同 (南から)



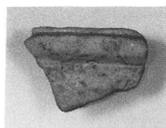
(斜め上から)

(上から)

10. 陶質土器？  
E地区包含層（29層）出土  
(S. ≈ 1/4)



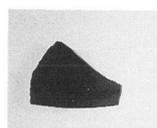
11-1



11-2



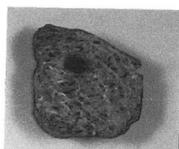
11-3



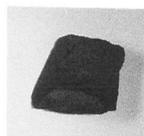
11-4



11-5



11-6



11-7



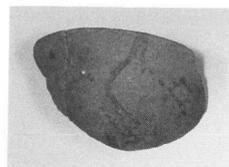
11-8



11-9



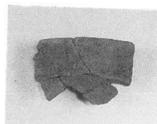
11-10



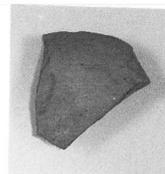
11-11



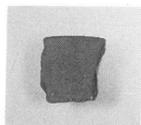
11-12



11-13



11-14



11-15



11-16

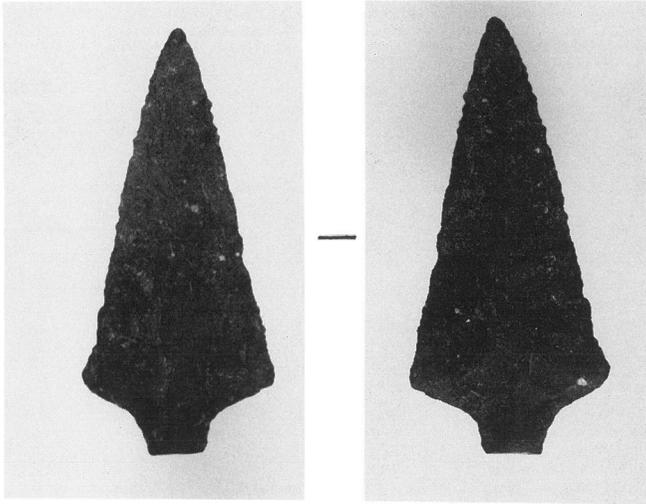


11-17

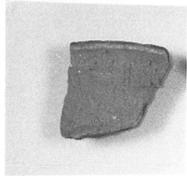


11-18

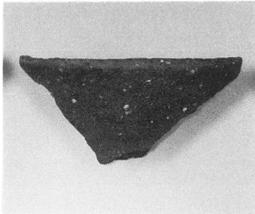
E地区 各遺構出土遺物 (S. ≈ 1/4)



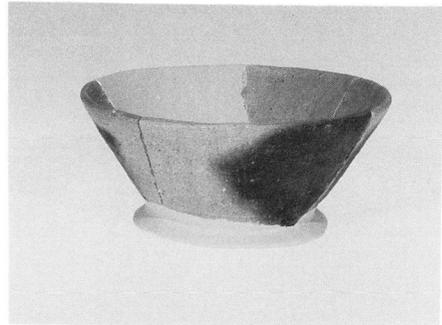
15. W地区 溝1出土 石鏃  
(S. ≒ 1/1)



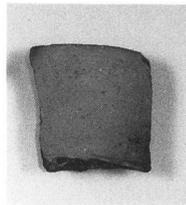
21-1



21-2



21-3



21-5



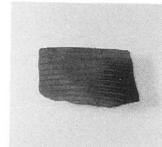
21-6



21-4



21-7

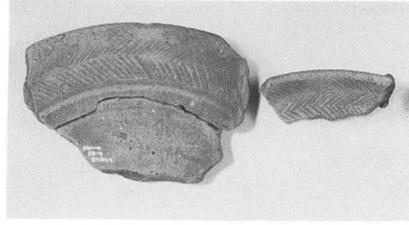


21-8

W地区 溝1出土遺物(その1)  
(S. ≒ 1/4)



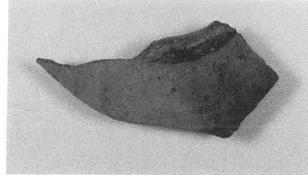
(外面)



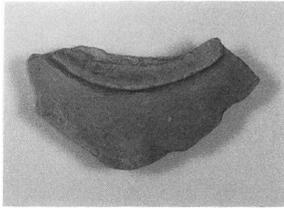
(内面)  
21-9



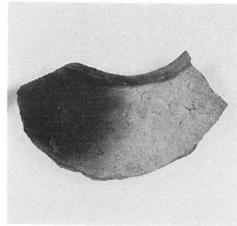
21-10



21-11



21-12



21-13



21-14



21-15



21-16



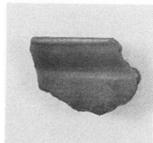
21-17



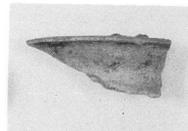
21-18



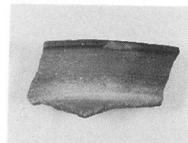
21-19



21-20

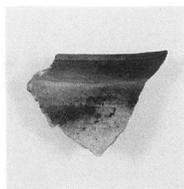


21-21

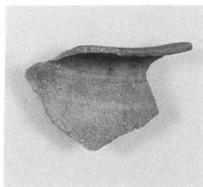


21-22

W地区 溝1出土遺物(その2)  
(S. ≒ 1/4)



22-23



22-24



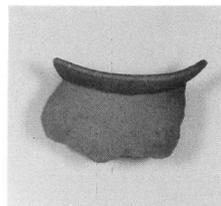
22-25



22-26



22-27



22-28



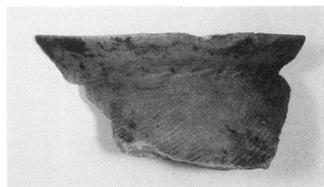
22-29



22-30



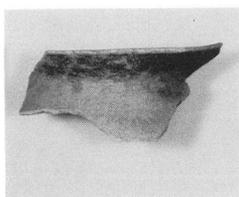
22-31



22-32



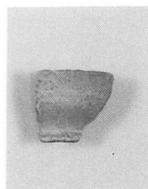
22-33



22-34



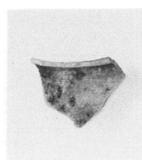
22-35



22-36



22-37



22-38



22-39

W地区 溝1出土遺物(その3)  
(S. ≒ 1/4)



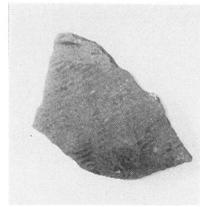
23-40



23-41



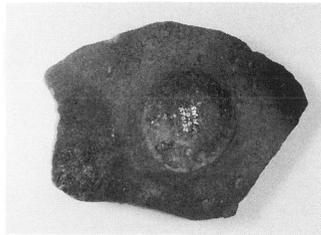
23-42



23-43



23-44



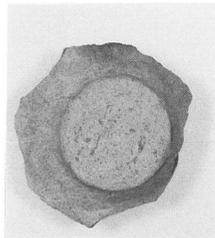
23-45



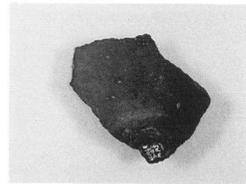
23-46



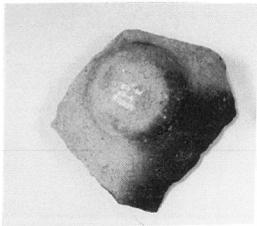
23-47



23-48



23-49



23-50



23-51



23-52



23-53



23-54



23-55



23-56



23-57



23-58



23-59



23-60



23-61



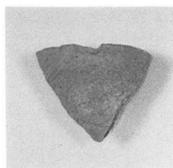
23-62



23-63



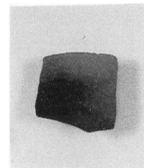
23-64



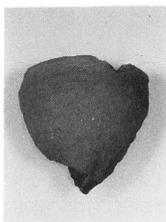
24-65



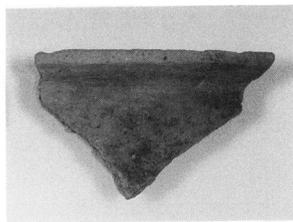
24-66



24-67



24-68



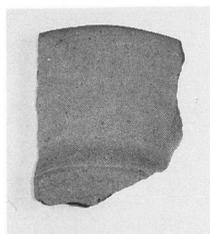
24-69



24-70



24-71

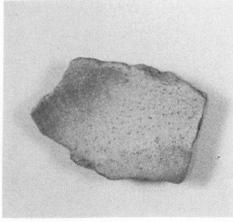


24-72



24-73

W地区 溝1 出土遺物 (その5)  
(S. ≒ 1/4)



24-74



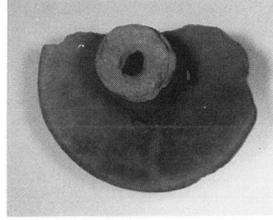
24-75



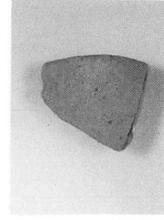
24-76



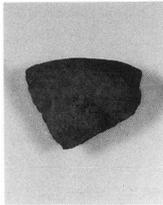
24-77



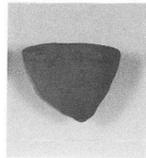
24-78



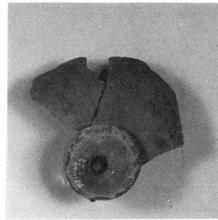
24-79



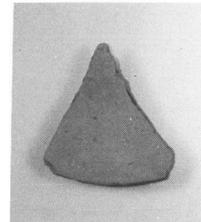
24-80



24-81



24-82



24-83



24-84



24-85



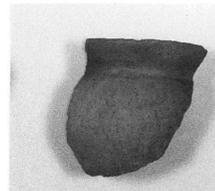
24-86



24-87



24-88



24-89

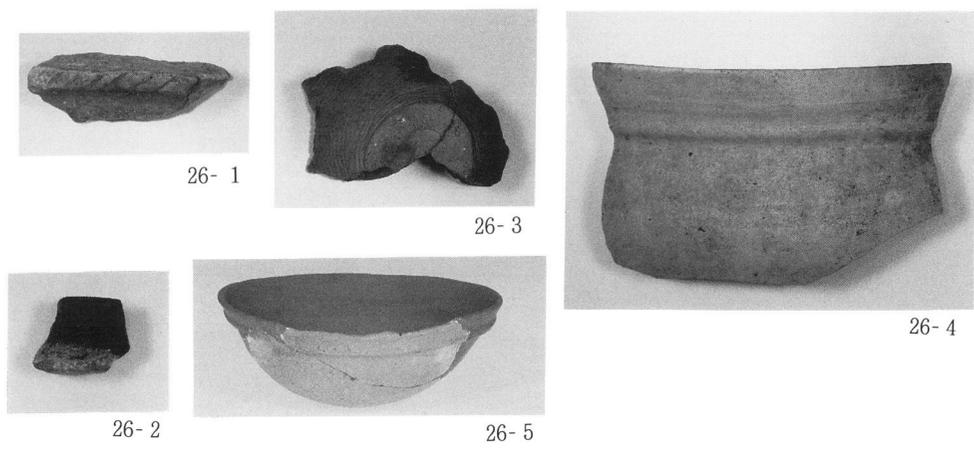


24-90

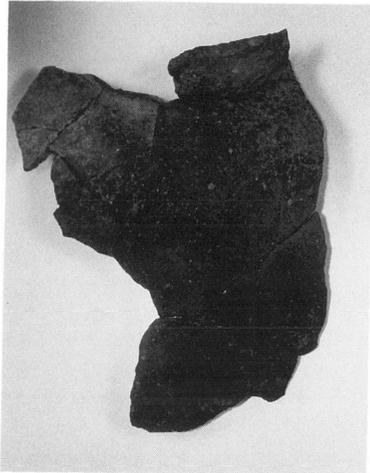
W地区 溝1出土遺物(その6)  
(S. ≒ 1/4)



W地区 溝2 出土遺物 (S.  $\approx$  1/4)



W地区 溝4 出土遺物 (S.  $\approx$  1/4)



27-1



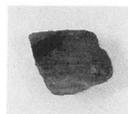
27-8



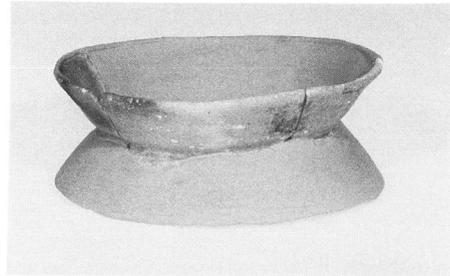
27-9



27-2



27-3



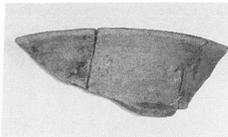
27-10



27-4



27-5



27-6



27-7



27-11



27-12



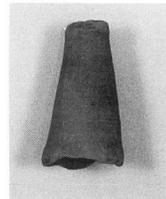
27-13



27-14



27-15



27-16



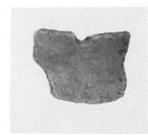
27-17



28-18



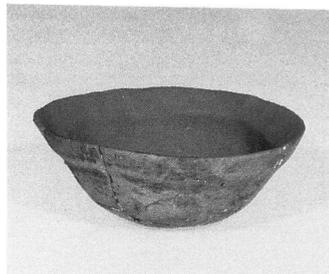
28-21



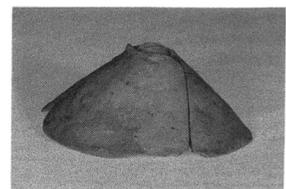
28-22



28-19



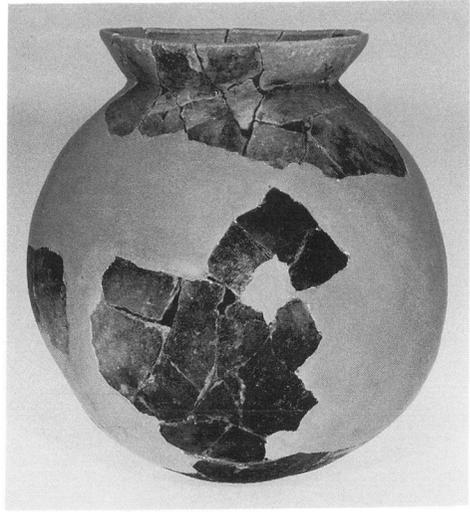
28-20



28-23



29-1



29-2



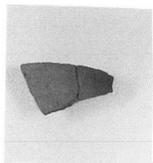
29-3



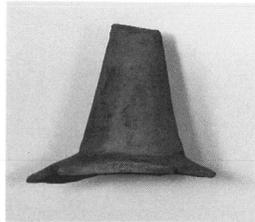
29-4



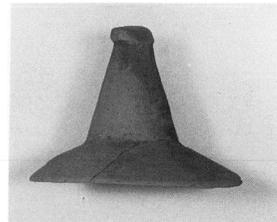
29-5



29-6



29-7



29-8



29-9



29-10

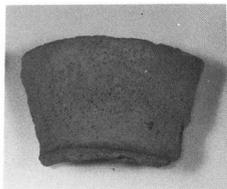


29-11

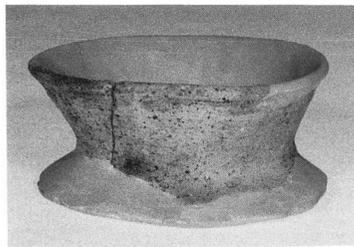
W地区 土坑2出土遺物 (S. ≒ 1 / 4)



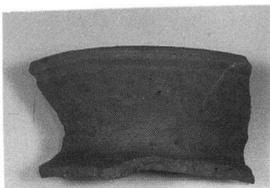
30-1



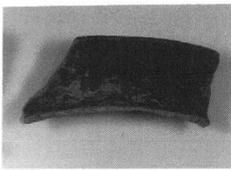
30-2



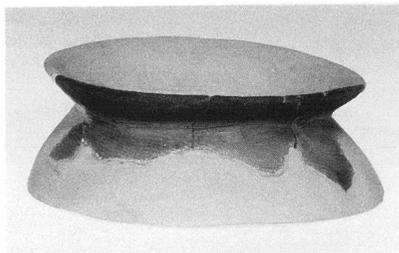
30-3



30-4



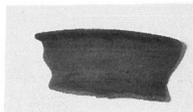
30-5



30-6



30-7



30-8



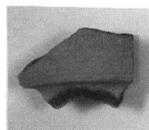
30-9



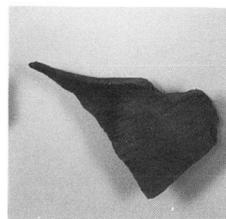
30-10



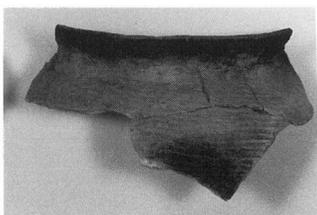
30-11



30-12



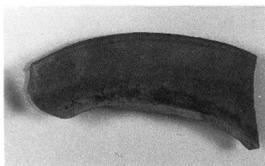
30-13



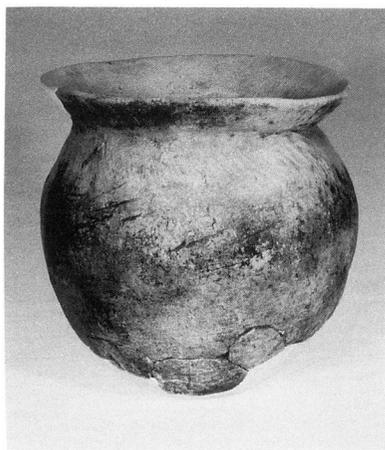
30-14



30-17

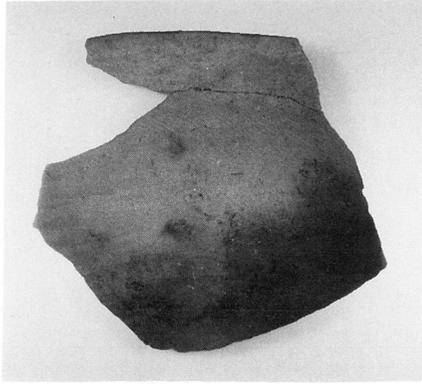


30-15



30-16

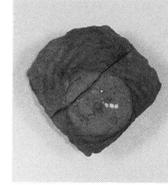
W地区 溝1覆土 W-1トレンチ⑦層出土遺物 (その1)  
(S. ≒ 1/4)



31-18



31-19



31-21



31-20



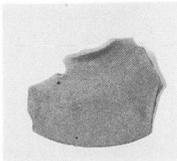
31-23



31-22



31-24



31-25



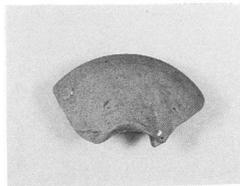
31-26



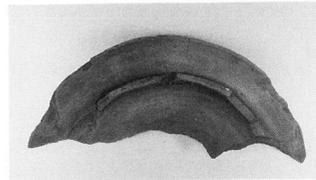
31-27



31-28



31-29



(上から)



(横から)

31-30



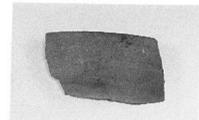
32- 1



32- 2



32- 3



32- 4



32- 6



32- 5



32- 8



32-10



32- 7



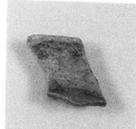
32- 9



32-11



32-12



32-13



32-14



32-15

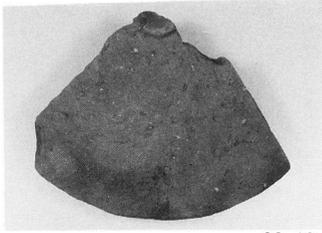


32-16



32-17

W地区 包含層出土遺物 (その1)  
(S. ≒ 1/4)



32-18



32-19



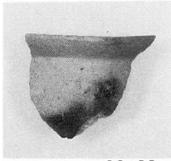
32-20



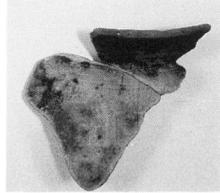
32-21



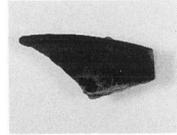
32-22



32-23



32-24



32-25



32-26



32-27



32-28

奈良県御所市

# 榑原遺跡 I

御所市文化財調査報告書 第17集

平成6年(1994年)3月31日

編集・発行 御所市教育委員会  
御所市三室117番地

印刷 明新印刷株式会社  
奈良市南京終町3丁目464番地

奈良女子大学附属図書館